

---

# ジールヴェン【携帯投稿版】

宇乃弘晃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジールヴェン【携帯投稿版】

### 【Nコード】

N7105F

### 【作者名】

宇乃弘晃

### 【あらすじ】

ラプラスの悪魔は死んだ。穏やかな平和に包まれる【蒼穹世界】で生きてきた青年、相原<sup>あいはら</sup>健吾<sup>けんこ</sup>。巨大な機動兵器による果てなき争いが繰り広げられる【暁世界】で生きていた少女、ユイ。世界という名の壁に阻まれ決して邂逅するはずのなかった二人が出逢うとき、宇宙は運命から解き放たれる。革新する未来の調律。それは、神の定めた理<sup>ことわり</sup>を破る。ジールヴェンの鼓動。多元宇宙を跳び越えるSFロボットアクション。こちらは携帯投稿バージョンです。近日、カラーイラストと本編修正を加えたパソコン投稿バー

ジョンとして作品をリニユール致します。

## 暁の戦場

何者かの手によって碎かれた秩序が混沌となるのか。あるいは、自然の摂理によって氷解した秩序が混沌となるのか。運命と呼ばれた、目には見えない巨大なうねり。その始まりに思いを馳せるのは、果たして本当に意義のあることだろうか。上空を荘嚴な金色で焦がし尽くすこの暁は、世界に生きる全てに等しく無慈悲である。空の下には、人の姿を象り意匠化した兵器たちが、気まぐれな死神に導かれて殺陣の舞を踊っていた。

右マニピュレーター携行【九七ミリ碎榴弾ライフル】消失。

左マニピュレーター携行【プラズマソード】帯電率二八パーセント低下。

左マニピュレーター甲部内蔵型【スナイプダガー投射機構】残弾数三。

右腕部可変型【一五〇ミリ粒子ビームランチャー】強制冷却中。

左肘部スライド式【高周波振動ブレード】破損。

胸部内蔵型【CIWS機関砲】残弾数〇。

左腰部側面可変型【リニアールガン】残弾数〇。

両脚部展開型【マイクロミサイルサイロ】破損。

右背部マウント式【長距離エネルギーキャノン】分離後破棄。

両肩部展開型【フィールドジェネレーター】パワーダウン。

自分の手を取ってダンスのステップを踏む死神は、そろそろ宴の終焉を望んでいるらしい。単騎で敵拠点を制圧するべく設計された自慢の愛機も、大幅な戦闘能力の低下を伝えている。目まぐるしく情報を展開する幾多のモニターと、武骨なコンソール群で周囲を構成されたコックピット。中心で操縦桿のグリップを握り締める自分

自身の荒々しい呼吸が、先から続く壮絶な消耗戦を物語る。

「はあ、はあ、」

白のパイロットスーツに身を包んだ細い体付きと、息遣いに混じるその高い声色は、精錬な兵士を気取っている自分が未成熟な少女である事実を、嫌というほどに自覚させた。ヘッドアップディスプレイを睨みつける。数え切れないほどの敵機が己に肉薄するさまを、光点と言語が混在するデータによって訴えていた。友軍機を示すマークは一五分ほど前に全て消失している。ふと自嘲気味に笑ってみた。

「分かった。いつかこうなること」

コンソールに指を疾<sup>はし</sup>らせる。

C I F      意識情報フィードバックを最高感度、全感覚にフルレスポンス。

F C S      火器管制システムを現状に最適化、兵装プログラム転身。

C M G      姿勢制御のリミッターを解除、機体各部位の稼働領域を最大に。

「ごめんね ジールヴェン、最期まで付き合ってもらってから」

ジールヴェン      と名付けられた我が愛機。

上半身の胸部と両肩部、下半身の大腿部が巨躯で力強いボリュームをもつ反面、両腕部および腹部はスマートで鋭角的なフォルムという独特の流線形シルエット。数多くの可変内蔵兵器を有する全身の装甲は、胴体の紫と四肢の群青で彩られ、各部の凹凸が生むコントラストと相まって立体的な重量感を誇示している。

その ジールヴェン      を四方から囲うのは、敵軍の量産機 ミシア。全機が灰色で統一された没個性な機体だが、簡略な内部構造ゆえに極限まで追求された広い汎用性と高い信頼性は未だに一線級である。

「さあ、行くよ！」

握り締めた左右のグリップを力強く前方に押し込む。機体背部中

央の光圧式スラスターを全開に出力させ、ジールヴェンが敵陣へ突進する。正面で陣形を組む ミシア 数機がこちらにサブマシンガンを照準、銃口から鉄の塊が立て続けに発射された。

ジールヴェン は機体各部のスラスターを噴かせて変則的な回避運動を取りつつ、掃射をかくぐり低空飛行で直進、振り構えた左マニピュレータ甲部からスナイプダガーを投射する。最も接近した ミシア の下腹部内側にある動力チューブを裂き貫いて、その本体に誘爆を引き起こす。

爆ぜる炎の向こう側で、爆風から逃れようとステップ機動をとる二機を捕捉する。二射目及び三射目のスナイプダガーを投射、徹甲仕様の刃が炎を裂いて続けざまに両機の頭部を潰した。カメラの復旧機能が作動される刹那に追撃、先に頭部を潰した方の ミシア コックピットを串刺しにする。スラスターを再び全開にしてプラズマソードを突き刺したままの敵機を、後に頭部を潰した方の ミシア にぶつけて押し返す。敵機に後方へ向かう慣性法則が働いたところでプラズマソードを引き抜き急制動をかけ逆噴射。

ここで、ウェポンプラットホームを映したモニターの項目に『STAND BY』という字列が表示された。

「いい子ね ジールヴェン」

冷却の完了した右腕部がビームランチャーに変形する。照準。薄紅色に輝く粒子を高濃度に圧縮して加速、鋭い銃声と共に撃ち放つ。放たれた一条のビームが、折り重なって後方に飛ばされる ミシア の動力炉を二機もろとも貫通した。爆発に次ぐ、爆発。

間髪入れず次のターゲットへ距離を詰め、最大稼働の左腕部が生み出す運動エネルギーをのせた強力な袈裟斬りでさらに一機を葬り去る。常に敵機との混戦状態を維持した戦闘機動。これにより遠方でジールヴェン を狙う支援機が、誤射を恐れて狙撃を躊躇うのだ。遠距離からの集中砲火を封じる戦術のひとつである。

機体後面に展開する、背部中央の光圧式主推進を含む大小一基ものスラスターが、重武装に反した高い機動力を ジールヴェン

へ齎<sup>もたら</sup>している。

敵陣を縦横無尽に掻き乱しながら、刻々と移り変わる戦いの流れに呼応してプラズマソードとビームランチャーを奔<sup>はし</sup>らせ、標的のミシアを蹴散らしていく。粒子の筋とスラスタ―光が戦場を飛び交い、命を散らす爆発が悲鳴のような輝きを放って機体表面に反射する。美しく醜い機人と死神の舞踏会がそこにあった。

八機目のミシアを消し飛ばしたところでビームランチャーがパワーダウン。本来長時間連射を想定して開発された武装ではない為、長期戦で酷使すればこうなることは当然の帰結だろう。むしろよく砲身が耐えた方だ。プラズマソードも発振装置の一部が既に欠損している状態で、刀身を形成するプラズマの流れが弱体化し切断力の鈍りも著しい。限りが見え始めたジールヴェンの動きを察知して、敵軍が巧みに距離を取った砲撃を浴びせてくる。前後左右に旋回しながら回避運動を行うが、第一装甲版を徐々に削られていく。

ああ、私ここで死ぬんだ。

生まれついてからずっと戦場にこの身を置いている自分には、死の覚悟など遥かに通り越した強い信念のようなものが備わっていると思っていた。実際に死線を切り抜けた経験も数え切れないほどある。しかし信念なんか、これっぽっちも持ち合わせていなかった。

これでファイナーだ。

死神の声を聞いたような気がした。

死への潔さではなく、生への諦観。

そのときだ。

腹部に熱と痛みが走った。

同時にコックピット内の全モニターが暗転、直後に再起動。膨大なデータ群を、狂ったようなスピードで演算しながら解読不能の奇怪な羅列を次々と流し出す。

「これは、何？」

パイロットすら知り得ない未確認機能の発現。声なき声を上げ、

ジールヴェン が咆哮<sup>ほうごう</sup>していた。フレームに刻まれたスリットと全身を通うライン状の放熱帯から、青白い閃光を外部へ解き放ちながら。

震える左手をグリップから引き剥がして、己の腹部に宛がう。激しい熱。感覚という感覚がこの一点から新しく生まれ、次いで頭頂や手足の爪先へ向かって浸透していくかのような、激しい熱。それが更に強さを増していく事実を、身体の内と外から感じとる。

「ジール、ヴェン……あなたは、」

愛機の鼓動と叫びが自分の声を絡めとって、機体の解放する輝きが周囲の空間を脈打つように振るわせる。ほどなくしてそれは蠕動<sup>ぜんどう</sup>へ。世界が幾何学形に歪み、黄金の無慈悲で地上を圧制し続けた空の暁を遮った。

異常な事態に反応した敵の ミシア 群が ジールヴェン に向けて四方からさらに激しい一斉放射を開始。しかし青白い閃光が、それら全てを喰らい尽くし本体への着弾を阻む。

圧倒的な力の胎動だった。

ジールヴェン と相対する敵兵のパイロットたちは我が目を疑った。防御エネルギーフィールドのジェネレーターなど、遙か以前に停止していることが実証済みである。加えて言うなら、砲弾を無力化している力場の範囲が明らかに常識を越えている。これはもはや通常の兵装ではない。後方で戦局を押し量っていた敵軍の指揮官がそう判断し、一時の後退を発令しようとして、手遅れだった。

青白い閃光はさらに大きく、大きく成長し、周囲を包み込んでいく。

やがて光が収束したところ、最前線で戦闘行動中だった二〇機近くに及ぶ ミシア はおろか、中心で光を放っていた ジールヴェン とそのパイロットさえ、この場から跡形もなく消え去っていた。

廃墟と化した軍事施設、誰もが予想し得ぬ結末。ただ一人の勝利者も出さぬまま、直径三〇〇メートルに広がるクレーターと、数機



の ミシア 指揮官機だけを残して、壮絶な消耗戦を呈したこの戦  
闘は終了を告げた。

## 世界の邂逅は突然に（１）

『私、健吾<sup>けんこ</sup>のことが好き。ずっとずっと好きだったんだから……！』  
幼なじみの麻紀<sup>まき</sup>が顔を真っ赤にして、一〇年間胸に秘めていた思いを打ち明けた。

『私をこんなに弱い女の子にして、責任とりなさいよっ』  
いつもは小生意気な彼女も、この瞬間だけはありったけの勇気を振り絞ったのだろう。唇と肩が震えて今にも泣き出してしまいそうだ。

俺は何と答えれば、

『俺もだよ、麻紀』

『ごめん。他に好きな人が』

「ここで断るバカがあるか！」

『俺もだよ、麻紀』

『ごめん。他に好きな人が』

コントローラーの決定ボタンを押そうとしたその瞬間、  
「ケンー、ちょっといい？」

亜麻色のショートヘヤーをふわり靡<sup>なび</sup>かせながら、妹の明美がノックもなく部屋のドアを開けて入ってきた。

「コラっ、俺のことはお兄ちゃんと呼びなさいと何度言ったら分かるんだ！」

「何でそっち。勝手に中に入って来てる方をお突っ込むでしょフツー」

明美は据え置きゲーム機の繋がれたテレビのモニターを見やる。  
クリッとしたその瞳に嫌悪を表す光が浮かぶ。

「うっわ、またギャルゲーの主人公に自分の名前つけてる。イタい  
しキモい」

「うるさい帰れっ」

「英語の辞書借りたらすぐ出てくからさ。いやー私の携帯について  
る辞書、凄く頭弱くて困ったよお」

そうか。お前と一緒にだな。

ぐごしやつ。

「いだあぁ！」

和英辞書で後頭部を強打された。

「あ、あれ、おかしいな、口に出してた？」

「いんや、何かバカにされてる気配を感じたから」

「一年戦争に参加することを強くお勧めする」

「意味分かんないし」

「考えるな感じるんだ」

「はいはい。はぁ、大学生は気楽でいいねえ」

聞き捨てならない捨て台詞を吐いて部屋をあとにする明美。ツン  
デレにもほど遠い。全く萌え要素の欠片もない妹だな、と本人に聴  
こえないように返しておく。

相原健吾。<sup>あいばけんこ</sup>一九歳になる大学二年生の若者である。

趣味はパソコンとゲーム、アニメにフィギュア。健吾という存在  
を表現するのに最適な、オから始まりタを挟んでクで終わる三文字  
の素敵なキーワードが存在するが、ここは彼の人権を尊重して「機  
械に強い超インドア派」と紹介しておく。家族構成は両親と妹との  
四人暮らしという比較的ポピュラーなもので、特に金持ちでもなけ  
れば貧乏でもないという大変面白味に欠ける家庭である。

しかし健吾の恋愛遍歴は輝かしい武勇伝で<sup>たた</sup>讃えられている。

活発で元気なツインテールの後輩に、穏やかで優しい眼鏡の先輩、  
料理上手で甘えん坊な血の繋がらない妹と、猫目で世間知らずなお

嬢様、果ては現在人気急上昇中の国民的アイドルにと　まさに女  
を取っ替え引っ替えにし、つい今しがたも長年好意を寄せられてい  
たツンデレで美少女の幼なじみから自宅の前に呼び出されて愛の告  
白を受けたばかりである。

『ホントに？　嬉しい。……あ、べ、別に、あんたの為に一緒にい  
てあげる訳じゃなだからねっ』

「フフ、さっきと言ってることが逆だろ？　今さら照れるなよ、こ  
れからはずっと一緒なんだからさ」

鼻の下を伸ばしながら健吾はそう言った。

翌日の午前一時、眠い目を擦りながら大学の正門をくぐる。今  
日の講義は卒業単位を取得するのに必須の科目である。

人格はともかく頭の出来はそれほど悪くなかった健吾は、特に苦  
労を払うことなく進学に成功。二流の大学ではあるが、別に上流企  
業に就職して人類ヒエラルキーを駆け登ろうという気概があるわけ  
でもないで、それなりのゆとりを利かせたキャンパスライフを謳<sup>うた</sup>  
歌<sup>うた</sup>している。

講堂へ向かう途中、渡り廊下で自分とは別の学部らしき数人の小  
洒落た女の子達が通路に屯<sup>たむろ</sup>って談笑をしている光景に出くわした。  
健吾が籍を置く理工学部の学生は、男性がその大半を占めており、  
講義中に香水の香りを嗅ぐ機会はほとんどない。心拍数が上がって  
発汗作用を促進する。女の子たちの脇を通り抜けようとしたその瞬  
間だ。

「ちょっと何あれ」

「うわ、酷いファッション。センスゼロ」

「絶対根暗だよな。想像するだけで気持ち悪い」

流し目で何度周りを確認しても、自分の他に渡り廊下を歩いてい  
る人影は存在しない。

「ていうか、あの存在自体が有り得ないから」

「私あんなのと同じキャンパスの学生だなんて思われたくない」

「あははっ。それ言ってるー」

迫害意識を隠そうともせず軽蔑心を剥き出しにした嘲笑をその背中に浴びながら、目頭が熱を帯びていることに気づかないふりをして健吾は通路を抜けた。

人類は異星人と敵対している。

地球の侵略を狙うエイリアンは、高度な文明兵器を駆使して世界各地に攻撃を開始した。

「世に広く知られている半導体の特性。まずはその詳細についてだが」

エイリアンの圧倒的な武力に震え上がる人々。しかし希望はあった。人類はあらゆる技術を結集し、敵の侵略兵器に唯一対抗しうる力を持つ巨大人型戦闘ロボットの開発に成功したのだ。

「現在も様々な分野の技術者がその旨を検討しており、」

このロボットを操るには特殊な適性を持つ人間が搭乗しなければならぬ。そんな折り、普通の一般市民だった健吾はエイリアンの地表攻撃を受けて家族を失った。だがそのショックがきっかけで、ある能力に目覚める。

「最新の家電製品などにも搭載されている」

なんとその能力は、ロボットに搭乗するために必要な適性と全く同質のものであった。パイロットとしての高い素養を地球防衛軍に見出された健吾は、戦闘ロボットに乗ってエイリアンと戦う運命を選択する。

「この熱伝導を表した式だが、」

家族を殺したエイリアンへの復讐心に捕らわれたまま戦っていた健吾だったが、仲間との絆や友情を通じてやがて純粹に世界を守りたいという熱い決意を持ち始める。

「固体物質がパーツとして機能し」

最後の反攻作戦は激烈を極めた。防衛軍の分解、仲間の死。しかし健吾は負けない。強い覚悟と使命感に突き動かされ、満身創痍まんしんそういの

愛機を駆り敵兵器を殲滅<sup>せんめつ</sup>していく。想像を絶する死闘の末、ついに健吾は勝利を掴む。

「今日の講義はここまで」

今日まで健吾のことをバカにしてきたあの女たちが、今さら彼を見返したつてもう遅い。勝利者となった健吾は英雄として永久に人類の歴史にこの名を刻むことになるのだから。

「さっきの公式は非常に重要なので各自必ずメモを取るなりして確認すること。それから次は実技の予定だ。準備を忘れないように。」

現実なんてクソ喰らえだ。こんな世界は死んでしまえばいい。甘い幻想に閉じこもり、誰からの賞賛も得ることが出来ない人生の不甲斐なさ、情けなさ、負の感情を虚空に向かつて吐き捨てた。

すっかり遅くなってしまった。

大学の帰りに「機械に強い超インドア派」たちの聖地と呼ばれるとある電気街へ寄ったからだ。正直いうと結構な遠出なのである。往復の電車賃は相当高くついた。右肩に担いだショルダーバックの中は、買い込んだコンピューター雑誌やらゲームソフトやらでこった返している。何とも情けない話だが、交通費の元を取るべく思い切り羽を伸ばそうとして店先を歩き回ったところ、余計に出費がかさんだ。

長時間の歩行で失った水分を補給するべく購入した清涼飲料水をようやくと飲み干し、空になったペットボトルを自動販売機の傍らに置かれたゴミ箱<sup>ふもと</sup>に放り込む。駅を出て歩道に入る。向こうに見える小さな山の麓<sup>ふもと</sup>に建つ閑静な住宅街、その一画に健吾の家はある。駅から自宅までは歩くには少し遠く、バスに乗るには少し近いというとても微妙な距離である。今度こそ出費を抑えたい健吾は徒歩で帰ることにした。

小蠅<sup>こばえ</sup>のたかる黄ばんだライトに照らされた夜の公園を突っ切って正面の角を曲がり、長い直線に入ったところで 健吾は見た。遠

目に見える自宅のすぐ裏手。聳<sup>そび</sup>え立つ深緑に彩られた背の低い山の足元で、周囲の空間を震わせるように脈動する青白い閃光を。

## 世界の邂逅は突然に（２）

恐怖は、確かにあった。

しかし健吾は、この理解不能な現象が自分に齎もたらすであろう非日常という未知の領域に、計り知れない魅力を感じずにはいられない。心のどこかで、自分という存在が「特別」に変わる瞬間を渴望している。

青白い閃光が瞬いて消えた裏山。その山林に侵入し、鬱蒼うつそうと生い茂る雑草を掻き分けながら先へ。視界は相当に悪い。周囲の住宅から漏れる光では足元を照らすのに不十分な為、携帯のカメラ機能につけられた小型ライトで一步先の視界を確保しながら前進。しばらくして異変に気づく。明らかに不自然な形で、草木がぽっかりと無くなってしまっている場所がある。

真ん中に何か、何か巨大な物体が横たわっていた。

両膝が笑い出す。未知との遭遇。一瞬逃げ出してしまうのかと考えて、しかしすぐに思い直す。緩む前立腺とお尻の穴をグツと引き締め、足を踏み出した。

侵略直前の地球に哨戒に來たエイリアンのUFOか。

はたまた試験運用中に墜落した人類の新兵器か。

暗がりでもだに全容がはつきりとしなない巨大な物体の傍らに人が、否、人の形をしたモノが倒れている。

それが僅かに身じろいだ。思わず心臓が跳ねるが、何とかライトを照らして正体確かめる。先ほど失礼なことを思ったので訂正。少なくとも見た目は完璧な人だった。手足の長さや体のバランスは完全に地球人のそれなのである。だが、エイリアンが潜伏の目的で人間に擬態している可能性も否定できない。

SF映画などに登場する、気密性に優れた戦闘服のようなスーツを身にまとうてうつ伏せに倒れていた。体は健吾よりひと周りほど



小さい。そこら辺に落ちていた比較的芯の硬めな木枝を選んで拾うと、その先端で首に当たる部位をつついてみる。

「う、……いたい」

「っ！」

頭部に被っているヘルメットと思われるものからくぐもった声が漏れた。

「いたい」とは、あの

「痛い」のことなのか？

「み……ず、お、願い、水を、」

不思議と直感する。

この人、地球人だ。

「あ、これ水」

「ありがとう、」

ミネラルウォーターの注がれたコップを、お礼の言葉を発すると同時に健吾の手からぶん取った彼女は、中の水をもの凄い勢いで飲み干す。

結論から言うと、絶世の美少女だった。

ヘルメットの下から現れた女神像のような芸術性をもつ整った顔立ちに、健吾は思わず魅入る。青みがかった銀色をした大きな瞳は、見つめていると吸い込まれてしまいそう。カラーコンタクトを入れているのだろうと考えるのが普通だが、少女の瞳からはそういった胡散臭さが全く感じられない。雪のような白い肌と、それに相反する漆黒の長髪。額や頬に凝り固まった汗と、無造作な髪の乱れが、女性としての清潔感を著しく欠いているにも関わらず、それすらも献身や自己犠牲の贗す魅力ではないかと思案してしまうほどに彼女の美貌は際立っていた。

少女の着ている服は、先に述べた通り気密性を重視した素材と構造のようで、生地が身体に密着して彼女のボディーラインを強く表出させるものとなっている。滑らかに伸びた脚、柔らかそうな太股、

小振りの腰周り、驚くほど細い腹部。そして手に余るほどの大きさであるうことが見てとれる胸の膨らみが、少女の可憐さと大人の女性の妖艶さを併せもつ第二次性徴特有の官能的な色香を放っていた。その瑞々しい肉感に、危うく体じゅうの血液が下半身へ結集しうになる健吾だが、今はそれどころではないと身体をくの字に曲げて必死に情動を鎮める。美しさはともかく、どう考えても怪しいこの娘を、よく状況を理解しないままに肩を貸して家まで連れ帰ってしまったのである。家族の誰かにバレないうちに早く何とかしなくては。

「ういーす！ 昨日借りた辞書返しに、」

「あ、」

「え、」

「……」

試験勉強の一夜漬けが祟ったのか、おそらく明美の思考回路はこのような方向へ。

### 【設問】

彼女いない歴イコール年齢のモテない男、相原健吾一九歳。彼の部屋のベッドに髪の毛の乱れた美少女が座っている。如何な紆余曲折<sup>つよきよくせつ</sup>を経てこの驚嘆すべき状況が完成したのか、その理由を以下の二択より選んで答えよ。

A) 初めて付き合うことになった彼女が家に遊びに来た。

B) 気に入った少女の弱みを握ることに成功し、それをネタに揺すりをかけて部屋に連れ込んだ。

「B いいーっ！」

A の選択肢をコンマ数秒で排除し、明美は甲子園投手顔負けの豪快なフォームで振りかぶると、和英辞書を健吾の顔面に向かって投<sup>とう</sup>擲<sup>てき</sup>する。

「B って何がっ？ ふぎゃぶ！」

見事なクリーンヒットだった。

「何だかよく分からない状況なのは確かだけど、この娘どうするのケン」

「そんなこと言われても　て、お前はまず俺に謝れっ。痛々しく流血している俺のこの顔面に謝れ！」

まるで何事もなかったかのように会話を進めようとする妹を悔い改めさせるべく声を張り上げたそのとき、謎の少女が何の前触れもなく立ち上がった。

「迷惑を掛けているようだから出て行くわ」

待った、と明美がその腕を掴んで引き止める。

「当てはあるの？」

「わからない。まずここがどこなのか正確に把握しないと。見たところ日本なのは間違いないようだけど……」

彼女はやはり人類が開発した新兵器のテストパイロットなのか。

健吾は裏山に放置プレイ中の巨大な物体に思いを馳せる。

「とりあえず今晚は泊まっていきなつて。ワケありの迷子さんみたいだし、別に何も聞かないから。住所も明日詳しく教えるよ」

「……いいの？」

「いいつていいつて。親にバレないようにシャワーも一緒に浴びちやうからさ」

「あの、第一発見者である俺の意見は？」

放置プレイを受けているのは実は健吾の方だった。

「うるさい。ケンはリビングから彼女の食べるもの何か持ってきて」

「恩に着るわ二人とも」

「私は明美、こっちは健吾。一応兄妹」

「一応つてお前……」

何とひどい云われようか。対抗心につられて、妙な独占欲が沸いて出る。少女をうちへ連れてきたのは他の誰でもない、自分なのだ。会話のペースを明美に掌握されてしまう前に、自分もこの少女からいろいろと情報を引き出してやらねばカッコがつかない。まずは名前と年齢あたりからだろう。

「あなたの名前は？」

「ユイ」

「おいくつ？」

「コラッ、失礼でしょーが。女の子に向かって年齢と体重を訊ねるのはご法度だよ！」

「何だよ、まだ加齢を気にするような歳でもないだろ」

健吾と明美が特撮ヒーローみたいな構えを取って言い争っている  
と、ユイと名乗った少女が躊躇いもなく口を開いた。

「一六」

「何だ私とタメじゃん！ 仲良くしようよー」

浮き足立つ心を隠し切れない喧騒の中で、激動の一夜が更けていく。果たして健吾は、焦がれていた「特別」になれたのだろうか。筆舌に尽くし難い未知を我が日常へ運び込んできた少女、ユイ。彼女は一体何者なのか。興奮気味で今夜は一睡も出来ないであろうと踏んでいた健吾の意識を、疲れた身体は思いのほか早く深い眠りの内へといざなうのだった。

## 蒼穹の平和（１）

腹部に感じた激しい熱は鳴りを潜め、自分を包み込む青白い閃光がもはや収まっていたことに気がついた時には、全く知らない場所へ飛ばされていた。

直前に起こった戦闘システムやモニターの異常も今は見られない。戦闘行動に備えてとつさに左右のグリップを握り締めるも、交戦していたはずの敵機は一機も見当たらず、ポインターはレーダーから完全に消失している。システムが制御不能に陥り機体から閃光を放った原因を突き止めようと、あらゆるコンソールとタッチパネルを操作するが、目ぼしい手掛かりは得られなかった。

モニターに映し出された前方の光景は、微風に揺れる草木と背景の疎<sup>まば</sup>らな街明かり。慌てて現在地を確認しようとするが、どういう訳かGPSが反応しない。敵の電波攪乱を疑うも、広範囲レーダーが生きていることからその線は弱いと推測できる。周囲に通信可能な味方はいないかと周波数を弄<sup>いじ</sup>るが応答はない。

乾ききった喉<sup>のど</sup>を潤そうにも、パイロットシートの脇に収納された容量五リットルの給水パックはもうとつくの昔に空っぽである。このままでは埒<sup>らち</sup>があかない。機体を寝かせるように背部をゆつくりと慎重に接地させ、意を決してコックピットハッチの開閉装置に手を伸ばす。

地面に足をついたところで、

「あ」自分の体力が限界を超えていることに気づく。足がもつれてうつ伏せに倒れ込んだ。体が言うことを聞かない。

ほんの僅かな時間、自分は気を失っていたんだと思う。目覚めた意識が次に捉えたのは、見慣れない靴を履いた誰かの足元と、

先端部の尖った何かで首周りをつつかれている感覚。

「う、……いたい」

“見慣れない靴を履いた誰か”が仰け反る気配。敵かもしれない。しかしどの道逃げられないのならば、僅かな救援の可能性に賭けてみるのもいいだろう。こんな形で命乞いをするのは些いささか屈辱的ではあるが、この状況で他に手はない。

声を絞り出す。

「み……ず、お、願い、水を、」

こうしてユイは、民間人の見ず知らない兄妹に命を救われることとなる。

小鳥のさえずりが聴こえてゆつくりと瞼まぶたをあげる。見慣れない天井。ああそうか、と明美の部屋で寢床を拝借して一夜を過ごした記憶が蘇る。

「ふあ」

欠伸あくびと背伸びを同時に行いながら上半身を起こす。こんなに深い眠りを貪むさぼったのはいつ以来だろうか。信じられない。生きて朝を迎えられるとは思わなかった。隣のベッドでは、明美がお腹を僅かに上下させて健やかに眠っている。

昨晚のシャワー上がりに明美は、愛用の水玉模様のパジャマをユイに着せた。さらにそのあと彼女は、自分にベッドを使うよう進言してくれたのだが、さすがにそこまで尽くされるのは心苦しいのでユイは慎んでこれを辞退した。

今さらだが……もし睡眠中に彼女の両親が部屋の扉を開けたら、一体どう誤魔化すつもりだったのか少し気になる。

「ん。ううん」

借りた布団を丁寧に畳んでいたら、明美が眠い目を擦りながら起き上がった。

「あ、ごめんなさい。起こしてしまったかしら」

「おはよー。ふああー」

「おはよう明美。昨日は色々ありがとう」

「ほわぁ。いいよん、何かパジャマパーティーみたいで楽しかったし」

そう言いながら明美が窓のカーテンを開ける。眩い朝の日差しが部屋いっぱいに入ってきて。

「うそ。どうして？」

それを見たユイは、驚愕して瞳を見開いた。

「今日は高校休みだし。うちの両親共働きでたぶんもういないから、リビングでゆっくり朝食……、ってあれ。ユイ？」

全力を奮って窓際に走り寄り、ガラス戸を開け放つ。窓枠に掴まると、落ちてしまいそうなくらい身を乗り出して空を見上げる。

「この空は、コンピューターグラフィックスじゃない……！」

「え、え、ちよつとユイってば突然どうしたの、」

ユイはそのまま勢い良く部屋を飛び出した。

「起きてケン、大変。てかパジャマの下だけ脱いで何やってんの？

そんなことよりユイがつ、」

何っってお前これから朝勃ちの処理をだな……、てユイが？

「どうした何があった！」

途中まで下げていたズボンをももの凄い勢いで引っ張り上げると、

健吾は男前に怒鳴り返した。

「よく分かんないんだけど、外を見たら急に驚きだして」

階段をドタバタと駆け上がる騒がしい音が聞こえてくる。あつという間に健吾の部屋に飛び込んできたユイが、窓を指さしながら血相を変えてこう叫ぶ。

「空が、空が青いのっ！ どこまでも続いているかのように澄み渡って。空が青いなんて、信じられない！」

「何を、言ってるの」

常軌を逸した言動に啞然となる明美。しかし健吾は、緊張感ゼロな水玉模様のパジャマを着たままとんでもないことを口走るユイも、

それはそれで萌えるな、とかどうでもいいことを考えていた。

「落ち着いた？」

「少し。まだ頭の整理はついていないけれど」

相原邸一階のリビング。小首を傾げて顔をのぞき込んでくる明美から、ユイはモーニングコーヒーを手渡される。

「もう一度確認するけど、ずっと地下で暮らしてきたとか、そんなんじゃないんだよね？」

質問に対してユイは、ゆっくりとしかし大きく頷いて、

「……お願いがあるんだけど」

神秘的な面持ちでこう言葉を掛けてくる。

「少し力仕事を手伝ってほしいの。もちろん無理にとは言わないわ」

「ちょっと、いったい何なのこれ」

明美が頬をつねっている。どうやら現実らしい。裏山の林の、中ほど。昨晩ははっきりと確認出来なかったあの物体の全容が今ここに明らかになった。

巨大な人型ロボットが、無造作に横たわっている。

そんなまさか、と万人が思うだろう。でもこれ以外に説明のしようがない。プラモデルやアクションフィギュアをプロモーションするイベントで、大きなロボットの模型が飾られているのを幾度か見たことがある。だがしかし、今ここにあるこれは。大きさも、質感も、重量感も、そして何より存在感が、玩具のそれとは全くの別次元であり、見紛うことなき実体として健吾の視界を掌握している。

「ねえケンってば聞いてる？」

健吾は叫び出したい衝動に駆られた。

「まあ言葉を失うのも分かるけどさ、もしかしたら遊園地にあるようなアトラクションの」

妹の両肩をぐわあっしと掴み、

「ちょ、何？」

一気にまくし立てる。



「聞いてくれ妹よ。今この瞬間、お兄ちゃんにセカイ系の主人公フラグが成立した！」

「離して、」

そこはかとなく嫌な予感がしたのか肩の手を振りほどく明美だが、健吾の熱弁はさらに続く。

「きつとユイはエイリアンからの知られざる地球侵略に対抗するため、超科学をもつ秘密結社から人体改造を受けた最終兵器的なあれこれで、」

「？」

明美から借りたＴシャツとジーンズという普段着姿でロボットの脚部を弄っていたユイが、何事かと怪訝な顔をしてこちらに近寄ってくるが、しかし健吾の熱弁は止まることを知らない。

「戦いに傷つき、疲れきっていたユイは偶然にもある青年、つまり俺と出逢って恋に落ち、人を愛する幸せと安らぎを知ってしまう」

「もしもーし」

半眼になった妹の呼び掛けを聞かずにひとり白熱する。

「ずっと俺の傍にいたいからと、戦いを拒否し始めるユイ。しかしエイリアンは悠長に待っちゃくれないのだ。次々に人類の主要都市が破壊され人口が減っていく！ ユイは選択を迫られる。愛を取るか人類を救うか」

「……」

「しかしユイは決意する。愛するたった一人の俺を救うただけに自分の身を犠牲にエイリアンと戦う運命を選んだ。しかーし！」

「しかしが多い。どうせ語り切るんならもう少し整理してしゃべってよ」

すでに憐憫の眼差しを寄越してくる明美の的確な突っ込みにも負けず、健吾は尚も熱弁を振るう。

「愛するユイを守るため俺はエスパー的な特殊能力を覚醒させる。そこで登場するのがこの戦闘ロボだ！」

横たわるロボットをビシッと指差す。

「俺の思念波を取り込んで不思議なパワーを叩き出すこの戦闘口ポに乗り込み、ユイとそのついでに人類を守るべく立ち上がる俺！」

「うわ、途中から別モノになってるし。人類ついでかよ」

気が触れたように熱狂する健吾を見て、ユイが眉間に皺を寄せる。

「彼、さっきから何を言っているの？」

「受信しないほうがいいよ。タチの悪い怪電波だから」

健吾の発する怪電波は、そのあと一五分ほど続いたのだった。

「そろそろ手を貸してほしいんだけど。いいかしら」

「んー。それは構わないけどさ、ユイ。ずばりこれってなんなの？ 差し支えなければ教えてほしいなあーなんて」

「もしかしてあなたたち、NFAを知らないの……？ でもそんなはずは、」 ユイの驚愕の表情。

目を丸くする明美。

「えぬえふ、えー？」

「そう。人型兵装端末の総称。本当に見たことないの？ 世界中の、八割以上の戦場に投入されているのに」

「あ、もしかしてゲームとかマンガの話？ 私そういうの分かんないんだ。ゴメンね、ノリが悪くて……」

茶化すことなく本当に申し訳なさそうに明美が答える。冗談ではない様子を見て取ったらしいユイは、心の底から恐ろしくなった、というように顔を蒼白させた。

「私は、いったいどこに来てしまったの？」

暫くのあいだ茫然としていたユイだったが、かぶりを振って立ち直るとロボットのもとへ。

無言の作業が始まる。彼女がロボットの脚部から細かい網状のシートを取り出す。それを機体に被せ、上から大量の纏まった枝葉や草木を載せていく。三人掛かりでも結構な手間だった。

ロボットの頭部にシートを被せようとしたユイの手が、ふと止まる。

「見て」

彼女は確かにそう言って空を見上げた。健吾たちに向かって小さく言葉を発したのではなく、そっとロボットに語りかけたのだ。

「あの青い空。すごいよね。綺麗で、清々しくて。私達の知っている空とは大違い」

視線をロボットに戻し、柔らかに微笑む。

「何故だか分からないけど、ここにはまだ戦火が広がってないみたい。すごく平和で穏やかなところ」

そこで一転、寂しそうな笑みへと変わる。

「ほんの少しの間、あなたはここで休んで。メンテナンスもなしにこんなところにいるのは窮屈だろうけど、ごめんなさい」

頭部にゆっくりとシートを被せた。

「お休み。　ジールヴェン」

## 蒼穹の平和（2）

ユイが相原兄妹の家にやってきて、二週間が過ぎようとしていた。この一四日間、彼女は大量の地図や歴史書を読み漁ったり、街の周辺を詮索したりして、「ここはどこなのか」という健吾たちにとっては全く意味が理解できない質問の答えを探し回っていた。何故なら彼女自身は「ここが日本である」という自覚があるにも関わらず、「ここはどこなのか」と問うのである。最初は安易に国内の地名や地理の問題なのだろうと考えていたが、それとは何かが、本質的な何かが違うのだという。

このまま彼女の存在を両親に隠し通せるとは思わなかったのも、インターネットで知り合った海外の友達が日本に遊びに来ることになったから、暫くの間うちに泊めてほしいという強引な作り話をでっち上げて無理やり承諾を得た。

内心、この状況に健吾は拍子抜けしている。謎の美少女が謎のロボットと共に自分の家にやって来たのだ。これでワクワクするような事件のひとつやふたつ、起こらない方が不思議である。エイリアンが攻めてきたり、ユイに惚れられたり、自分に特殊能力が開眼したり、そしてやっぱりユイに惚れられたり。しかし現実には、彼女が同じ部屋でご飯を食べて違う部屋で寝ていること以外、いつもと何も変わらない日常だった。

いや、敢えて挙げるならばジルハムだ。普段ユイは、裏山に放置プレイ中のジルハムへ二日に一回は必ず会いに行く。こっそり後をつけて様子を窺ってみても、彼女はコックピットらしき場所に籠もるだけで機体を動かす素振りを見せない。

ところで、前述の文章に二つほど突っ込みどころがあることにお気づきだろうか。

まずひとつ目。ジルハム。これは決して新種のハムスターのこと

ではない。健吾があのロボットにつけたあだ名のようなものだ。ユイがロボットのことを ジールヴェン と呼んでいるのは、この一四日間で何度も耳にした。由来は至極単純で、つまりはジールヴェン ジル ジル公 ジルハムである。

それからふたつ目。ユイの行動を「見に行く」ではなく「会いに行く」と表現しているところ。彼女はいつもジルハムに語りかける時には眩しいほどの笑顔であったり、時には憂いに満ちた寂しい顔であったり……。そのどちらも、健吾達には見せたことのない彼女の飾らない表情だった。まるで心を許した愛しい恋人に声をかけるかのような。だから、「会いに行く」なのである。

嫉妬していないと言えは嘘になる。健吾も健全な男だ。身近にあれば美しく魅力的な女の子がいる。仮にこれが下心からくる感情であつたとしても、自然と惹かれてしまうのは責められることではない。ジルハムという言葉の響きに若干蔑称の意が含まれている事実と、健吾の嫉妬心が全くの無関係だとは言い切れないだろう。

答えを受け入れるしかないと思った。それはずっと疑つてきて、しかしあまりに非現実的だと自ら切り捨てていたある答え。

自分は、別の世界に来てしまったのではあるまいか。

もう二週間も全く戦っていないなんて信じられなかった。青い空のもとで。街は活気に溢れ。人々は笑顔を絶やさない。まるで絵に描いたような平和世界だ。その全ては、ユイが知る日本では絶対に有り得ないはずのもの。しかしならばどうやって元いた場所に帰るのか。途方もなく漠然とした問いかけに頭が重くなる。そもそも何故自分は戻ろうとしているのか。

この街で一番大きなデパートの屋上にある噴水広場。中央噴水を囲うベンチのひとつに座つて、頭上を仰いだ。

「ここにいれば、もう戦わなくていいのかもしれない」

ユイの呟きが青い空へと溶けていく。

先ほどから自らが発している、世界、という言葉に思わず気が遠

退きそうになる。周りに映る平和などは全部嘘っぱちで、ユイを欺いてからかう為の大掛かりなセットやエクストラである可能性は？  
空に見える青だって、本当は新型衛星の超広角ホロフィールドが形成する幻である可能性は？

しかし、空の青から連想する確かな感覚がある。あの、青い光に包まれて飛ばされたのだとしたら。自分をここへ連れてきたのは、やはり ジールヴェン の意志なのだろうか。絶望的な戦局からユイを存命させるために。

そして腹部に感じたあの熱はいったい何だったのか。機体システムとリンクする操縦系の生理的な反応は、全て熟知しているはずだったのに。あんな感覚、いや痛覚を發したのは初めての経験だ。これも能動的ではなく、受動的なものだった。 ジールヴェン が関連しているようではない。

もう幾度も機体の A Iユニットと各システムを調べているが、特異なもの、異常なものは何も見つかっていない。これ以上詳細に調べるのなら、モジュールやフレームを解体する必要がある。そんな設備と技術が果たしてこの世界にあるだろうか……。

膝に力を入れて立ち上がる。とにかく、疑念を抱いたままただ考えているだけでは何も始まらない。 ジールヴェン にもう一度会いに行こう。太陽の光を反射して中空にきらきらと輝き散る噴水を横切り、ユイは再び歩き始めた。

## 走るメタファー（1）

「おはよう ジールヴェン。昨日は会いに来てくれてごめんなさい」  
裏山で、大量の草木に覆い被されたジルハムを見上げて語りかけるユイ。と、彼女が何の前触れもなくこちらへ振り返った。

「いい加減出てきたら？ 私たちに、何か言いたいことがあるんでしょう」

「っ！」

彼女が今日、必ずここに来るだろうと考えて張り込んでいた。気づかれていたのか 声の感じからして、覗き見をされていたことに対して別段怒っている訳ではなさそうだ。叢くさむらの影からいそいそと這い出して、顔色を窺いながらユイの隣に並ぶ。

「あなたたちには色々と迷惑を掛けているわ。ごめんなさい。本当に」

視線は機体に向けたままだが、今度は健吾に謝っているらしい。

「いって、別に」

張り込んでいたことがバレた気恥ずかしさから、ついぶっきらぼうになってしまう。こんな可愛い女の子を隣にして、自分はいったい何を言えがいいのだろうか。

「この半月足らずで色々分かったことがあるの」  
そうなんだ。

「この世界って本当にいい所ね」

…… ちょっと待て。何だって？ 今、何て言った？

「平和で、みんな心が優しく、穏やかで。誰からも敵意を向けられることはないもの」

まさか。そんなことは有り得ない。

絶対根暗だよね。気持ち悪い。

まずあの存在自体からして有り得ないから。

他人に蔑まれるあの視線が、敵意ではないなんて。

「欲しいものはすぐ手に入るし、自由で、どこへだって行ける」

違うだろ。人には、生まれたときから予め定められた限界がある。いくら欲したって手に入らないものや、いくら努力したって到達できない領域がある。

「本当に羨ましい」

沸々と起きる、負の感情。大嫌いな全てから健吾を解放する為に、ここではない「特別」な何処かへ連れて行ってくれるはずのユイの口から、こんな世界に対する賞賛の言葉など聞きたくない。この地球上で、自分ひとりだけが知らない生物になったかのような疎外感が、健吾の胸に忍び寄る。

「あなたもこの世界が、この場所が好きでしょう？」　そこでユイはこちらを向いた。ジルハムへ向けていたほどのものではないにしろ、それでも充分に眩しい微笑みを讃<sup>たた</sup>えて。ゆえに決定的だった。

「そんなわけ、ないだろっ……！」

「え、」

「こんな世の中、好きな訳ないだろ」

口に出したからにはもう止まらない。

「もつとよく周りを見てみるよ。どいつもこいつも自分のことしか考えてないバカばかりだ！」

空気に苦味が混ざる。

喉の奥が急激に熱くなる。

「人には優しくしようなんて、口先ばっか」

溜まりに溜まった世の中に対する不平、不信、不安が、醜い怪物に姿を変えて健吾の心を驚掴む。

「だいたい環境汚染の地球代表な人類なんてこの星で最も生きてる価値のない生き物だろ」

いきなりスケールがぶつ飛んだ。言いたいことをとにかく全部出



してしまおうとする、人前で語ることが不得手な人間特有の未熟な心理が働いて、話があらぬ方向に広がっていく。勢いづいて聞き手を置いてけぼりにしたまま言葉が暴走する。

「むしろ人類は癌細胞だね、つまり惑星癌。今はステージ2Bくらいの。さらに進行して月や火星に遠隔転移する前に人間は全員死んだ方がいいでしょ」

待て待て。こんな唐突に何を言ってるんだ俺。キャラ違うだろ。イタすぎるだろ。聞くに耐えない稚拙な弁論だ。気づいた時には更に手遅れで、もう口が止まってくれない。

「人間同士で戦争起こして殺し合うのが一番お誂え向き」

言葉を遮るように、乾いた音が山林を駆け抜けた。同時に左頬に熱が走る。平手打ち。殴られるまで気がつかなかった。

「何するんだよっ！」

「信じられない。何で殴られたのかも分からないの？」

「せっかく倒れてるとこ助けて、うちに二週間も泊めてやってるのに……！」

「最低ね。自分の非を省みる前に相手の弱点を探そうだなんて」

ユイが両の拳を握り締めて震えている。

「私は、確かに ジールヴェン でたくさん人を殺してきたけど」

目前で悲痛に歪む表情。大きな怒りと重い哀しみを訴える彼女の姿に、ついたじろいしてしまう。

「それは、平和になって、そこで暮らす人達にそんなひどいことを思ってもらわなきゃない」

「な、何カッコつけたこと言ってる」

「あつ、二人ともやつぱりここにいた！ 大変だよ大変っ。かなりの一大事」

尋常ならざる慌てようで健吾とユイの間に飛び込んで来たのは、明美だ。妹はすぐに二人の不穏な空気を感じ取って、

「あれ。もしかして告白の最中だったり？」

しかし全く見当違いなことを言った。

「違っつ」「違っわっ」

咄嗟とつさに発した言葉がユイのそれと重なって、「あっ」という顔で互いを見つめ合う。ユイ本人の気持ちはともかく、自分が抱いていた好意まで否定されたかのようなひと言に瞬間的な怒りを覚えるも、気まずさには勝てずすぐに視線を逸らした。

「声を揃えて怒鳴らなくても」

お前が変なコトを言うからだろうに。明美は一体何をしに来たのか。

「それより何だよ、大変なことって」

「そうだった大変なのっ。街のど真ん中にデカイロボットが現れたって、今そこら中で大騒ぎになってる」

「！」

「数と特徴は？」

二人の驚愕は一瞬、すかさず聞き返したのはユイである。

「実際に見た訳じゃないから詳しくは分かんないんだけど、聞いた話をまとめると多分一体だと思う」

「分かった。この子のシートを剥がすから手伝って」

「えっ！ オ、オッケー。ほら、ケンもぼさって突っ立ってないで避難という選択の真逆を表すユイの発言に、一瞬戸惑いを隠せなかった様子の明美だったが、「この子」と言ったユイの視線の先にあるものを了解し、すぐにその意志に従って健吾を促す。

「俺は　　！」

「別にそれでもいいわ。けれど、」

再び重なった自分とユイの視線。息が詰まりそうになった。生まれてからの一九年、これほど強い眼差しを向けられたことがあっただろうか。続く彼女の言葉は、健吾の胸を大きく騒がせた。

「いつまでもそんな考え方で生きていたら、いつか必ず後悔する日が来るわ」

真正面からぶつけられたそれを、今はまだ自分の中に受け入れることが出来ずに、尻の穴が痒かゆくなってくるような思いを味わう。何

かこの一〇分足らずの間にももの凄いい恥をかいた。そんな思いを誤魔化そうと、反射的に言葉を投げ返す。

「わ、分かったよ。手伝えばいいんだろ手伝えばっ」

コックピットの全てのモニターが輝きを取り戻す。プログラムを開始してOSを立ち上げる。システム起動。動力炉、反応開始。CIF同調。データ群の流れるヘッドアップディスプレイとサブモニターを視認しながら、右手でタッチパネルを、左手でコンソールを操作する。待機状態をチェック、異常なし。モード移行、プライオリティ正常値へ。前方左右に展開した大型モニターが、機体頭部のメインカメラが捉える外部の光景を映し出す。

「あなたの力が必要なの。さあ立って ジールヴェン」

四肢に電流が通い、低音で無機質な駆動音を響かせながら ジールヴェン が立ち上がる。

『すごいっ……！ ホントに動くんだこれ』

明美が興奮気味に呟くのが聞こえる。傍らの健吾が僅かに口を動すのが見えた。流し視線の捉えたそれに、無意識が読唇術を駆使する。彼の漏らした言葉は「夢じゃない、すげー」であつた。

彼に対して手を上げてしまった。もしあの信じ難い仮説が事実であるならば、自分と彼は住んでいる世界が違うのだ。価値観を違<sup>たが</sup>えていて当然かもしれない。

でもだからといって、自分の考えが間違っているとは絶対に思わない。ユイのいた世界の人々が、いくら欲しても手に入らない命と平和。それをあれほどまでに酷く軽んじ貶<sup>おとし</sup>める彼の言葉は、ユイにとって決して許せるものではなかった。さらに彼の感情の奥には、無知や甘えがあつたように思える。また同じ世迷い言を言ってきたら、自分は何度でも反論するだろう。例えそれで彼から嫌われて家を追い出されたとしても。

しかし今は、そのことを思索する前にやらなければならないことがある。広範囲レーダーの走査開始。反応あり。半径三キロメートル

ル以内にNFA一機を確認。データ照合中、  
「近い。ジールヴェン には一応申し訳程度のECMが機能しているけれど、向こうの電子性能によってはすでにこちらも探知されている可能性がある」

照合終了。機体の熱紋及び周波パルスから【DGI 024】、あるいはその系統に類する機種であると暫定。

「この機体コードは ミシア か」

通信システムをオンに。機体の収納に保管していた無線機を先ほど明美に渡した。周波数は合っている。

「明美、聞こえる？」

「あ、聞こえるよユイ」

「これから街に出現したNFAの元へ向かうわ。戦闘になるかもしれないからあなた達は出来るだけ離れた場所へ避難して」

「私たちに他に来ることない？」

「ありがとう。大丈夫よ。もし何かあったらその無線で連絡して」  
「りょーかい」

スラスターの制御ステータスをサブフライトシステムへシフト。  
ジールヴェン は全高一五メートルの巨体を垂直方向に浮遊させた。スラスターの巻き起こす旋風に髪の毛を煽<sup>あお</sup>られながら、機体を見上げている健吾と明美の姿が見える。

時間差を置いて各部のサブスラスターを噴かせる卓越した姿勢制御で、目的の方角へと軸を向けながら上昇。直後メインスラスターを出力して前方に飛翔、機影を彼方へいざなう。

雄々しい発進。いや、出撃と言うべきか。明美は瞳をきらきらと輝かせてうっとりする。

「やばい、ユイ格好良すぎ。わたし惚れちゃいそう。百合やばい」  
全身が震える壮観だった。ジルハムはやはり本物だったのだ、とユイへの対抗心を忘れて感嘆してしまった。けどまだ認めたくない、自分を完膚なきまでに否定した彼女のことを。胸の奥で、羨望

と嫉妬がせめぎ合っている。何とちつぽけなプライドか。

「くそ。ほつぺたがじんじんする」

頬の痛みが、募る敗北感に焦燥を乗せて加速させる。居てもたつてもいられなくなって、

「ちつくしう。このままで終われるかよ……！」

「ちよつ、どこ行くのケンそっちはダメだつてばっ」

健吾は ジールヴェン が飛んでいった方角に向かって全力疾走を開始した。ここ最近ろくに運動をしていない自分の体が、ユイに追いつくまでもつかどうかは全く頭になかった。

## 走るメタファー（2）

『どこの企業のものかは知らないが、あなたの搭乗しているそれは、道路交通法で認可の下りていない明らかな違反車両です』

国道線。合計七車線の幅広いこの幹線道路は今、嚴重な交通規制がかけられていた。原因は他でもない。アスファルト舗装された車道の上に、突如として降り立った灰色の巨大な人型ロボット。直立するそれを取り囲むように、機動隊と思しき十数台の警備車両と、多くの隊員が睨み<sup>にら</sup>みを利かせて対峙している。

『直ちにその車体から降りてきて身分証明書の提示を、』

無機質な駆動音。凝集された粒子の銃弾が放たれる。刹那、爆発。拡声器を片手に声を張り上げる隊員の、傍らに留めていた無人の警備車両が一瞬にして蒸発する。巻き起こる悲鳴と怒号。爆風で吹き飛ばされた隊員が地面に叩きつけられた。彼の名前を叫びながら駆け寄る同僚。幸いまだ息はあるようだ。

激情と恐怖が場を疾<sup>はし</sup>り交う。

「周辺住民の避難と誘導を最優先しろっ！」

「本部に連絡。至急応援の要請と発砲の許可を」

「信じられん……！ あの右腕に抱えた大きな銃器、実弾、いや、本物の武器なのか」

「悪夢だ。あんな冗談みたいな機械が、日本の国内で戦争を始めるなど」

「発砲許可が下りた、総員構え」

数十丁に及ぶハンドガンとライフルの黒光りした銃口がロボットに向けられ、照準を合わせる。「撃て！」という号令の直後、一斉に発砲。怒涛<sup>どうたう</sup>なる実弾の嵐は、しかしロボットの装甲に弾き返されて甲高い金属音を響かせるだけであつた。ロボットの右脚がゆっくりと持ち上がる。バリケートとなっていた警備車両を踏み潰し

て、巨大な機人が前進を開始した。

「後退、後退だ！」

ロボットが、再び右手に握る巨大な銃身を下方へ構えた次の瞬間、上空より新たな機影が路面に旋風を吹きつけながら飛来する。

前方一〇〇メートルの距離に存在する機体を「DGI 024」ミシア のカスタム機と断定。戦闘システム及び全兵装、アクティブモードを維持。

「試作のエネルギーライフルを携行したチューン機か」

ユイは外部スピーカーをONにした。さらにもう一体のロボットが出現したことで、大きなどよめきと動揺が広がっている機動隊に向かつて声を張り上げる。

「周辺に集まっている保安部の皆さんは一刻も早くここから退避して下さい」

突然 ジールヴェン から発せられたユイの声に、不審感を露わにする機動隊の面々。指向性マイクが彼らの声を拾う。

「女性の声？ しかもずいぶん若い」

「保安部って俺たちのことか？」

「これから目の前の機体を制圧します。あなたたちがいるとはつきり言って足手まといです。邪魔です」

「な」

「我々から見ればお前も充分警戒対象だ！」

「そんな貧弱な対人武装でいったい何が出来るんですか？ ここは私に任せてとっと一般市民の安全確保と警護に向かつてください！」

『ぬう』という唸り声。 ジールヴェン を警戒しながら機体の足を横切ってじりじりと後方に下がる警備車両と機動隊員。一時撤退の構えだろう。コックピットのレーダーに映る生体反応がまばらに散っていく。と、ここでレーダーを映したディスプレイにノイズが走る。

「敵のジャミング。至近距離限定だろうけど、かなりレベルの高い電子戦装備ね。こちらが取れる戦術は……」

ジールヴェン が搭載する動力部は準永久機関である。供給される出力は無尽蔵だがコンデンサー容量に限界がある為、エネルギーの大幅な連続使用は機体と火器の稼働時間に如何ともし難い制限をかけてしまう。反面、以前の戦闘においてパワーダウンした武装は、動力炉直結のエネルギー兵器に限り補給なしでの自動充填を可能にしている。現在使用可能な兵装は、右腕可変式のビームランチャーと、マニピュレーター携行型のプラズマソード、両肩部展開型の防御フィールドのみ。

「あいつには訊きたいことが山ほどある。パイロットを殺さずに機体を無力化、それも、周囲に気を配って市街地への被害を最小限に抑えながら」

操縦桿のグリップを握り直す。

「ウォーミングアップにしては少しきつめかな……でも、私とジールヴェン ならやれる！」

自分の駆る ジールヴェン が着陸してから数分、ことの成り行きを静観していた ミシア がついに動きを見せる。右手に握る大型のエネルギーライフルをこちらに向け、その砲身を左手で支える

命中補正を重視した発砲態勢。 ジールヴェン に対処行動を入力、フィールドジェネレーターが起動した。大きく盛り上がった両肩部を外側にスライドして放熱機構が出現、琥珀色の微粒子を散布する。

ミシア のライフルからエネルギー弾が一条を描いて発射された。ジールヴェン の放つ微粒子の膜が急激に濃度を上げて機体前面に安定還流し、防御力場を展開する。力場に干渉したライフルのエネルギー弾が霧散、原子レベルに分解されて消滅した。

ライフルを連射しながら前進する敵機。横目でサブモニターを確認。そこには現在の機体周囲の熱量と、防御フィールドが耐えうる熱量の限界値が表示されていた。前者の数値が上昇し、後者の数値



を肉迫する。 ミシア が放つエネルギー弾の連続砲火にフィールドが耐え続けている証拠である。回避運動を取って砲撃を躲すことは可能だが、それでは市街地の建造物に被害が及ぶ。

「まずはあのライフルを黙らせる」

ジールヴェン の腰部両側面の上端には、左右のマニピュレーターが携行する二種の武器にそれぞれ対応したハードポイントが存在する。左のハードポイントにマウントしていたプラズマソードを、左マニピュレーターで保持して引き抜く。刃渡り七メートルに達する電流刀を形成。先の戦闘で発振装置の一部が欠損した為に放電が減衰しているが、この状態で手段は選べない。メインスラスターを出力。フィールドを展開しながら ジールヴェン が ミシア に向かつて突進する。

交錯は一瞬。

防御フィールドの熱量が限界を超える直前の、機体同士がすれ違う瞬間、プラズマソードによる斬撃を繰り返す。金属が切り裂かれる音。中空を舞ったのは、エネルギーライフルを握ったままの ミシア の右腕。ライフルの暴発を避ける為に右腕の関節部を切断したのだ。その右腕が地面へ落下すると同時に両者二機的位置が入れ替わる。振り向きざま ミシア の左腕甲部が展開、そこからビームを放出して収束。刀身状に固定された。

「ビームブレード！ あの ミシア 、新兵装の試験運用機なの？」

敵機が白兵戦術に切り替えて突進、粒子の凝集した刀身を振りかぶる。あれほどの出力を持つ斬撃兵器ならば、厚い装甲に覆われたジールヴェン の胸部すら容易く切り裂くだろう。機体各部のスラスターを噴かせる俊敏かつ小刻みな機動で、ビームブレードによる怒涛の切り払いを躲し続ける。

「まだ……！」

ユイの発したその言葉と同時に ジールヴェン はプラズマソードを投擲、 ミシア の左肩関節に突き刺さった。これによりビームブレードの剣閃が大きく逸れ、その隙について ジールヴェン

の右手が ミシア の左腕を掴み上げる。

右マニピュレーターの握力リミッターを解除。右腕部へ送る出力を一時的に全開に。一気に ミシア 左腕部を握り締める。細やかな雷電が走った。左腕部の配線及び配管を握り潰され、エネルギーの供給を断たれたビームブレードが粒子の放出と刀身の固定を維持できずに霧散した。肩部に突き刺さったプラズマソードを引き抜こうとした次の瞬間、 ミシア が ジールヴェン に組み付いて動きを封じてくる。

「こいつ、」

恐らく後方のビルにこちらを叩きつけようというのだ。 ジールヴェン のパワーを以てすれば振り解くことは可能である。

しかし。

敵の ミシア が機体を接触させる際にジャミングを切ったのだろう。ユイが全身のスラスターを出力させようとしたその時、復活したレーダーが周囲に生体反応を捉えた。慌てて頭部カメラと指向性マイクを反応のあった方角へ向ける。

『うわぁん、お母さぁぁぁん！』

二機が押し合いをしている地点から五〇メートルほど離れた横断歩道の真ん中で、五歳前後の男の子が泣きじゃくりながら立ち尽くしていた。

「あんなところに子供がっ。保安部の人達は何をしているのよ全く！」

このままスラスターを出力すれば、敵の ミシア もこれに対抗して推力を限界まで上げてくるだろう。そうなれば互いに反発し合う慣性を与えられた二機の機体が、周囲の道路を踊り回るようになる。

「あの子を巻き込んでしまっ」  
「どうすれば……。」

そのとき、コックピットに通信が入った。

「この周波数、明美？」

『ユイ聞こえる？　実はさ、ケンがそっちに走って行っちゃったみたいなんだけど』

「いいえ見てないわ。それより今はそれどころじゃ、」

あ。

気がつけば、レーダーに反応がもうひとつ。

「こら子供っ。俺と一緒に来い」

相原健吾一九歳彼女いない歴一九年。彼は、小さな男の子の手を引つ張つてぜえぜえ言いながら今まさに奮闘している。傍目からは間抜けな誘拐犯か変質者に見えなくもないが、そんなことを気にしていられる状況ではない。街道まで走り着いたときの息切れが激しく、二機のロボットが望める建物の影で小休憩を取ろうとしたところ、歩道にこの子の姿を見つけたのだ。

「お母さんじゃなきゃだ」

頑かたくなにその場を踏ん張り、ぶくうとほつぺを膨らませてかぶりを振る男の子。いじらしくてなかなか可愛い。

「何だよ、聞き分けのないやつ」

ぶくうとほつぺを膨らませて対抗する健吾。こっちは可愛くないそこへ　ジールヴェン　の外部スピーカーからユイの大声が飛んでくる。

『健吾、早くその子をここから離れた場所に連れて行って！』

その言い方に何だかカチンときたので怒鳴り返す。

「今やってるだろ？　見て分かんないのかよバカっ」

一瞬の間があつて。

『どうして、来たの？』

「俺にもそれが分からないから困ってんだろ。ここまで走ってくるの、しんどかったんだぞ！」

『そんなこと私に怒鳴らないでっ。……恐い思いするから避難してつて言つたのに』

「もうしてるよ、足がガクガク震えて今にもチビリそうじゃボケ」

『あなたね、さっきから聞いてれば人のことバカとかボケとか、』  
「つべこべ言つてないで、お前は目の前の如何にも量産型なシヨボ  
メ力を抑えてろ！」

『今やつてるでしょ？ あなたこそ見て分らないのかしらっ』  
外部スピーカーから『うわー、痴話喧嘩ー』という明美の声が漏  
れてきた。

「この人もこわいよおかあさああん！」

余計に泣き出した男の子に面をくらないながら健吾は頭を悩ませる。  
うーん。俺がこれくらいの年齢のころっていつもどんなこと考えて  
たっけ？

あ。

ふと、頭に降りてきたアイデア。この歳でロボットが嫌いな男の  
子なんて滅多にいないだろう。文字通りの子供だましではあるが、  
胸を痛めて反省するなんてことは、この場から生き延びれさえすれ  
ばいくらでも出来るのだ。試してみる価値はある。

「君は何とか戦隊何とかレンジャーを知ってるか？」

「えぐ、えぐ、電脳戦隊デジタルレンジャーのことお？」

肝心な部分は全て「何とか」でぼやかす、という酷いレベルの出  
たとこ勝負だったものの、どうやら脈あり。男の子が嗚咽おえつしながら  
も興味を示した表情でこちらを見上げてくる。

「そうそれ、あれにロボット出てくるだろ？ 今向こうで戦ってる  
青いのがそのロボだ」

「ちがうよお、超電脳合体ロボ、デジタルグレートEXはあんなん  
じゃないもん」

「なかなか手強いな。いいだろう、よく聞くんた。実は……」  
もったいぶるように含みを持たせ、

「あれはまだテレビには登場していない新ロボット、ジルハムグレ  
ートなんだ！」

如何にも胡散臭い大仰なりアクションで健吾はついに言い放った。  
無駄にノリノリである。

「ほんとう？」

「ホントホント、再来週辺り登場予定だ」

同じことを二回繰り返して言う人は信じてはいけないと何かのCMでやっていたような気がするが、純真無垢な五歳の男の子は瞳を輝かせて泣き止んだ。

「だから坊や。悪のロボットを撃退する為に俺たち、いや、我々、えと、そう、地球防衛軍に協力しておくれ」

「きょうりよくするっ」

大粒の涙を小さな握り拳で拭い、男の子が興奮気味にほっぺを紅潮させてそう言った。やはり可愛い子だ。健吾はますます調子づいていく。

「いい子だ。よし俺について来い！」

重ねて言うが、無駄にノリノリである。

コックピット脇の小さなディスプレイに映る健吾が、男の子の手を引いて意気揚々と横断歩道から離れていく。その光景を見て取ったユイは、すぐさまフットペダルを力強く踏み込んで ジールヴェンのスラスターを出力。予測通りこれに反応した ミシア が、推力を増加させ肉迫してくる。

「いつまでもベタバタと」

路面を挟りながら国道線上を組み合った状態で乱舞する二機のNFA。

「私の ジールヴェン に触らないでええ！」

ジールヴェン が右脚部後面に展開した光圧スラスターを全開にし、ミシア の胸部に膝蹴りを見舞う。強力な肉弾攻撃を与えられた ミシア が、ジールヴェン から吹っ飛ばされて仰向けの状態で路面に叩きつけられた。コックピット外郭に活きる衝撃緩和機構シヨックアフソフバーの許容を遥かに凌駕する烈蹴れっしゅうとアスファルトへの衝突。パイロットは脳震盪のうしんどうを起こして気を失ったと見て間違いないだろう。

敵性機体 ミシア 、制圧完了。

## 蒼穹世界と暁世界（１）

「助けてくれてありがとう、ジルハムグレートのお姉ちゃん！」

「ジルハムグ      ？      え、何ですって？      もう一回言って」

「ジルハ      もごつ、んーんー」

「いや、何でもない。こつちの話、気にすんな」

何故かは分からないが、裏返った声でそう言いながら健吾が男の子の口を塞いでいた。

傍らに立つ      ジールヴェン      の装甲が、夕陽に照らされてその輪郭を黄金に浮かび上がらせている。あの暁に少し似た、ユイもよく知る景色。こちらの世界にも、太陽が地平線の近くに存在する時間帯      つまり夜明けと夕暮れに限り、こういった色の空が見られることは、もちろん今は充分に理解している。しかしこの時、世界を焦がす黄昏がユイの心に訴えてきたものだけは違う。

“ お前は「こちら側」の人間だ ”

握り締めていたグリップの感触が、汗ばんだ両の手のひらから離れない。

周囲の状況が慌ただしく変わっていく。事後処理に追われて辺り一帯を走り回る機動隊の面々が、近くを横切る度に好奇心とも敵対心ともつかぬ露骨な視線を投げかけてくる。

放たれた粒子の塊に灼かれて藻屑と化した無惨な金属片。圧倒的な重量に踏み潰され、引き千切られた無数の車体。怪鳥の巨大な鉤爪で引き裂かれたかのようなアスファルト。異物が如く横たわる満身創痕の      ミシア      と、悠然と佇む      ジールヴェン      。これを平和への蹂躪と呼ばずに何と呼ぶのか。全ては、自分がここにいなからなのだろうか。

「ユイ」

「分かつてる」

やがて機動隊の部隊長と思しき風格の男が、こちらへ走り寄って尋ねてきた。

「その少年は？」

「母親とはぐれた一般市民の男の子です。保護をお願いします」

ユイの申し出に、隊長はその精悍な顔を大きく頷かせた。

「了解した。保護者と思われる女性からの搜索要請を受けている。照合を急がせよう」

「ほら、」

健吾が男の子の背中を押してやる。寂しそうな顔で見上げてくる男の子。

「またあえる？」

「そのうちな」

「うんっ」

名残惜しそうに何度かこちらを振り返りながら、男の子が救護隊に先導されてとぼとぼ走り去る。それを目で見送った隊長が、再びこちらに向き直った。

「目標の鎮圧に際しての多大な尽力を、まずは感謝する。事態を収集してもらっておいで大変申し上げにくいのだが、」

「心配しなくても保安部の皆様に同行するつもりです」

「ユイっ」

「あなたは黙ってて」

健吾の制止を、とりつく島もなく切り捨てた。決めたのだ、この世界における自分の形振り<sup>なりふ</sup>を。

「話が早くて助かる。それで隣の青年は君とどういう……」

「俺は」

「彼も戦いに巻き込まれた一般市民です。自宅まで無事に送り届けて下さい」

努めて他人行儀に振る舞う。心を鬼にする、というにはまだ幾分

甘い、言葉を発した瞬間に胸がちくりと痛んだ。だかこれ以上、彼に迷惑は掛けられない。危険にも晒したくない。

「ちよつ、急に何言つてんだよ、もしかしてまだあのこと怒ってるのか？」

「うつん。違う」

視線を健吾へと向ける。機動隊の隊長が、何かしらの空気を察したのかこの場を離れていつてくれた。ユイに対する敬意を表したのかもしれない。

ユイの視線が自分へと向けられた。自然な二重瞼と、銀色の光彩が特徴的な、大きくて綺麗な瞳だ。この瞳に何度魅せられたことか。「聞いて。あなたと私はここまで。あなたはもう、私とは関わらない方がいい」

何だよ、それ。

彼女が動く。機動隊の隊長が向かった方角へ数歩だけ進んで、また止まった。今度は振り返りもせず背中ごしに語りかけてくる。

「私が今こうして生きてるのは、ここに居るのは、あなた達のおかげ。ありがとう」

本当にこればかりである。それはもうお互いさまのはずだ。ユイだってあのロボットからこの街を守ってくれたではないか。

「急にぶつたりしてごめんなさい。あなたには分かって欲しかったから。この世界の、尊いところ」

何も言い返せない。

「それから」

横顔だけで振り向く彼女。そこには、黄昏に彩られた微笑みがあった。ジルハムに向けるあの笑顔。どきりと心臓が跳ねる。

「最後は健吾のこと、少し見直したわ」

「……！」

初めて名前で呼ばれた。

「明美にもよろしく。じゃあ元気でね」



徐々に離れていく背中。

終わってしまう。

健吾の「特別」が。

たった二週間の「特別」が。

いやだ。ここで終わらせてたまるか。

「あー、そういえば！」

如何にもわざとらしく声を張り上げる。驚いたユイが体ごと振り返った。夕日を背景として展開するお別れのシーンは、すごくドラマチックで感動ものの演出だったと思う。

でも、ごめん。やっぱり俺には、その隊長さんみたいな空気の読み方は出来ないよ。

「ユイのパジャマ姿、ものすっごく可愛かったなあーっ！」

「なな、なに言い出すの、いきなりっ」

ユイがリンゴみたいに顔を真っ赤にして、見るからにあわわし出した。こんな彼女の表情を見るのは初めてだ。俄然<sup>がぜん</sup>やる気が出てくる。

「水玉パジャマのカッコで『空が青いのっ』は反則だよなあ」

「ちよつとそれ以上言わないで、みんな聞いているのよ？」

機動隊の隊員たちが手を止め、今度は何ごとだと二人のやりとりを鑑賞し始めた。構うものか。教えてやる。この場にいる誰よりも自分はこのユイという女の子のことを知っているのだと。

「でも二週間も俺の部屋に居たのに一度も添い寝してくんなかったなー」

「は？ あなたと私がいつからそんな関係になったの？」

健吾の根も葉もない大言壮語に、とうとうユイも感情的な反論を始めた。

「だいたい、健吾。あなた盗み聞きしたり人の後つけたりするのやめなさい。犯罪でしょう？」

「ぐっ。でも最初は、ユイの方だってかなりの不審者ぶりを発揮してたんだから仕方ないだろ、」

「それはっ……！ 身も知らない場所に放り込まれて、いったい他にどうしろと言うのっ」

だんだんと、周囲から小さな笑い声が漏れ出す。

「だからってそれを差し引いてもジルハムに話かけるとか」

「ジルハム？」

あ、しまったつい。片眉を下げた訝しげな表情のまま思考を巡らせているうちに、ついぞその言葉の響きが意味するところへ行き着いたらしいユイは、カッと両目を見開いた。

「っ！ ま、まさか、ジルハムって ジールヴェン のこと？」

「いやーそのー」

ユイの両肩がふるふると小刻みに震え出し、その声も次第に荒んでいく。

「健吾ね、あの子に変なこと吹き込んだのはっ。 ジールヴェン

という響きには、私の愛情がたくさん込もっているの。そんなふざけた語呂の名前を勝手につけて……！」

「あれはしうがなかったからだろ」

「何がしうがないの？ ちゃんと説明して！」

もう堪えるのは限界だ、と言わんばかりに周囲がどつと沸いた。

爆笑に次ぐ爆笑である。空気の変化についていけず、健吾とユイはポカンと口を開けた。

「はっはっは！ 面白いな二人とも」

そう笑って近づいてきたのは、あの精悍な顔立ちの隊長である。

「せっかく彼女が君のことを庇ってくれていたのに……。 もう言い逃れは出来んぞ。大勢の前でここまで盛大な痴話喧嘩を見せつけられては、こちらとしても君達が無関係な他人だなどと見過ごす訳にはいかないな」

「……っう」

ユイが苦い顔で俯いた。

固い強制力を感じさせながらも、爽やかな響きを含んだ声音で隊長は言う。

「青年。本件の重要参考人として、君にも我々と同行願おうか」  
臨むところだ。健吾はビシッと下手くそな敬礼の構えをとる。

「喜んで！」

「喜ばないでっ」

ユイの鋭い突っ込みはしかし、再び周囲の爆笑を誘っただけであった。

## 蒼穹世界と暁世界（2）

何かの映画でみた気がする。

着ている服を全てむしり取られ、鋼鉄の椅子に体を拘束され、冷水を浴びせられ、爪を剥がされ、鞭で殴打され、焼石を押し付けられ。

さあ、知っていることを洗いざらい吐くんだ。貴様に人権などありはしないつ。長く苦しむより早く吐いて楽になった方がいいぞつ。もつとも、それではこの俺様が楽しめないがな！　ぐわははは。

「どうしたの。随分と顔色悪いけど」

「し、仕方ないだろ。何されるか分かんないんだから」

「だからついてこないでつて言つたのに」

「それとこれとは話が別だ」

「あなたって本当に呆れた人ね。でも、拷問の順番を待たされているようには見えないけど？」

そう言つてユイが辺りを見回した。よく磨き上げられた汚れひとつないタイルの床、黒光りする高級皮のソファ。壁面には穏やかな海辺を描いた絵画、見事な双角を持つ鹿の剥製<sup>はくせい</sup>。あらゆる調度品が絶妙な等間隔で配置され、入室者に閉塞感を与えない工夫が見て取れる。非常に手入れの行き届いた応接室である。

「分かつてるけど緊張するんだよ」

健吾が、薄い橙の縞模様が入った大理石のテーブルの上から、老舗メーカーの和菓子の包みを手に取ろうと腕を伸ばしたそのときだ。二人の座るソファの上座から斜め前に見える部屋の扉が不意に開かれた。ビクツとなつて思わず手を引っ込める。

部屋に入つて来たのは、右手の携帯電話を耳に押し当てながら、左腕に膨大な資料を束ねたファイルを抱えるスーツ姿の中年女性。「動画静止画を問わず全てCGによる合成で通しなさい。報道規制

はそちらにお任せします。……分かっています」

彼女は健吾とユイに軽く会釈すると、扉を閉めて再び携帯電話に話し掛ける。

「しかしだからこそその情報操作でしょう？ ええ、ええ、目撃者の名前と住所を今日明日じゅうに割り出してこちらへ送ってください。くれぐれも漏れることのないようお願い。……長官には私から話を付けます」

携帯電話を切って折りたたみ、胸ポケットへと仕舞う。

「申し訳ないわ。あなたたちを長い間待たせてしまったようね」

そう詫びると二人に近寄って握手を求めてきた。ユイが立ち上がり、それに応じる。健吾もユイに倣<sup>なら</sup>って慌てて立ち上がる。

「いいえ。こちらこそお忙しいところ時間を取らせてしまって」

ユイの言葉を聞いた女性が、柔和な笑顔をつくった。

「あら。とても礼儀正しいお嬢さんね」

白髪交じりのオールバックと、整った細もての顔立ちが、高潔で威圧的な雰囲気彼女に纏わせていたが、こうして笑うとなかなか愛嬌のある人だ。二〇年ほど前はさぞかし美人だったに違いない。

ひと通り握手を交わし終わると、女性はスーツの内ポケットから名刺を二枚取り出してユイと健吾に手渡した。

【防衛省特査管理局 対策部 監督官 北村千秋】

なんじゃこりゃ。

政府の構造構成に対して含蓄<sup>がんちく</sup>ある知識を持っているわけではないので具体的にどこがおかしいのかは指摘できないが、あまりに聞き慣れない響きのする言葉に少なからず異質さを感じる。まさか、ドツキリやインチキではないだろうか。

「私はユイといいます」

「あ、相原健吾、です」

健吾は面と向かって自分の名前を名乗るのが実に苦手である。そのせいかイントネーションが若干おかしくなってしまったが、北村は特に気にする様子もなく承知の意として小さな首肯を返してくれ

る。

「掛けてちょうだい二人とも」

三人は向かい合う形でソファーに腰を下ろした。

「さて。何から話しましょうか。私も実際、あなたの存在に驚嘆を  
禁じ得ません」

まあ、そりやそうだよ。ロボットに乗ってきたんだもんな。  
俺も最初は驚きました。

北村は、ゆっくりとため息を吐くかのように次の言葉を紡いだ。  
「まさか。このタイミングで、NFAに乗って【蒼穹世界<sup>そうきゅうせかい</sup>】に渡っ  
てくるなんて」

そうそう、NFAで蒼穹……、ん？ 何だ、この違和感。

「向こうの世界は一体どうなっているの」

「NFAを知っているんですかっ！」

荒ぶる剣幕でテーブルを叩いて立ち上がるユイ。その反動でソフ  
アーが揺れ、健吾はバランスを崩しそうになる。しかしそれで健吾  
にも違和感の正体が理解できた。

この女性、北村千秋はNFAの存在を知っている……？

「こつちの世界にも、私の世界のことを知ってくれている、理解し  
てくれている人がいるんですか！」

「なかなか難しい質問ね。情報を知っている、という意味では政府  
の中でも数十人。だけど『それを本当に信じていたか』という<sup>はかり</sup>篩に  
かけると、私を含めてもさらに一桁に絞られるでしょう。もっとも  
今回の件で、その認識は覆ることになる」

あの。話についていけないんですけど？

「とにかく落ち着いて座って頂戴、ユイ」

北村に促され、困惑の表情を浮かべたまま再び腰を落とすユイ。  
視線を外すことなく北村は語を継ぐ。

「それに。単独でこちらの世界に渡ってきたということは、あなた  
のNFAには【あれ】<sup>はんちやう</sup>の試作型が積んであるとみて間違いないわ」  
たった今、理解の範疇<sup>はんちやう</sup>を超えた存在として強く印象づけられたこ

の北村千秋という人物を、ユイは忽然と眺めながら問う。

「【あれ】とは何のこと？ あなたはどうしてそんなことを……。あなたは一体何者なんですか」

名刺に記された役職を問うていいるのではない。北村千秋が放つ得体の知らない何か、その片鱗へんりんをこの手で手繰り寄せ、実態を見極めたい。そんな思いがユイの表情から読み取れる。

「現段階で、あなたがそれを知る必要はないと判断します。どうやら今の私の使命は、無事にあなたを【暁世界】へ送り届けることのようにだから」

「どうやって……」

呟きにも等しいユイの問い掛けに北村は、  
「実際にやってみなければ分かりませんが、我々にはたったひとつだけ、その手段を用意することが出来ます」

と言い放つ。さらに。

「その為にはユイ、もちろんあなたと ジールヴェン の力を借りなければいけないわ」

愛機の名前を囁ささやかれて、ユイの瞳が再び揺れる。本来ならば未知の世界にやってきた彼女は、その不安定な状況から抜け出そうと、北村のこの言葉に光明を見出して然るべきだろう。しかしどこか腑に落ちない居心地の悪さを感じているのか、ユイは放心に近い状態で声をなくしていた。 ジールヴェン 。その機体が秘めるというオーバースペック。パイロットであるユイを差し置いて、北村は ジールヴェン の本当の能力を理解しているというのか。

何だよ、この人。

計らずも健吾のその心境だけは、ユイの反応と同じようなものであった。この状況は明らかに変だ。どうしてユイの方が、この女性ひとの言葉にいちいち動揺しているのか。こういうのは普通逆だろうに。

【蒼穹世界】と【暁世界】

急にそんなこと言われても困る。というか、何の伏線もなしにこんなキャラ出してくんな。シナリオが破綻する と、相変わらず

「機械に強い超インドア派」的解釈で事象を計る健吾であった。

この不穏な空気をどうにか払拭したい。今まではどうしていただろうか。ちよつと思ひ返してみよう。

あれは確か、家に連れ帰った直後にユイの処遇に困り果てていたとき、

「ういーす！ 昨日借りた辞書返しに、」

あれは確か、裏山に横たわる ジールヴェン の傍らでユイと大喧嘩して険悪なムードになったとき、

「あつ、二人ともやつぱりここにいた！ 大変だよ大変つ。かなりの一大事」

明美つ。 そうだ明美だ！

さあ、妹よ。今こそお前の力が必要だ。ここはまさにお前のタイミングだろう？ いでよ我らがムードブレイカーっ！

……。

無理か。考えてみれば当然である。彼女の携帯に「当分のあいだ帰れないと思うから親に適当に言い訳しといて」とメールを送ってしまったのだ。残念だが諦めるしかない。

そのとき、北村の胸ポケットに仕舞われていた携帯電話が、プルルルという変哲のない着信音を室内に響かせた。

「失礼」

ふた折りの携帯電話を再び取り出して展開させ、通話ボタンを押す。

「私です。……誰も通さないようにと伝えてあるはずですが？ え。そう、そうなの」

そこで北村は一瞬、横目で健吾の顔をちらりと窺ったような気がした。

「分かりました。お連れして頂戴」

ぱあん、と両開きの扉がぞんざいに開け放たれる。

「やっと見つけた！ ケンにユイ」

「明美っ！」



突然応接室へ姿を現した明美は、息も絶え絶えにぜえぜえ言わせながら、ズンズンとユイの元へ歩み寄る。

「こ、これ、返しにきた」

突き出した手に握られている、無骨で物々しい軍備端末。

「あ。無線機」

「それからひと言。わたし、小さい頃から、除け者にされたり、仲間外れにされるの、」

盛大に空気を口の中に吸い込みながら溜めに溜め、一気に解き放つ。

「だいつキライだからあつ！」

天井が抜けるんじゃないかと思った。

「彼女、あなたの妹さんよね？ 例の現場であなた達の名前を叫びながら探し回っていたらしいのよ」

「あースツキリした。取りあえず水を　てケン、何で泣いてるの？」

明美。

お前って奴は、

お前って奴はなんて、

「なんてよく出来た妹なんだ！」

「きやあつ。くつつかないでよ、走り回ったせいで只でさえ暑いんだから」

「俺は信じていたぞ、お前のことを」

ついさっき一度諦めてしまってたような気もするが、そこはこの熱い妹愛に免じて無かったことにして頂きたいと思う。

「もうっ、いい加減離れてよー。いくら実の兄とはいえ、その鼻水垂れてる顔をアップで迫られるのは精神的にキツいんだってばっ」

「照れちゃって。全く可愛い妹だなお前は」

迷惑だと言わんばかりに腕の中で暴れまわる明美に構わず、抱擁ほうようと頬擦りを続行する。そんな健吾たち兄妹の姿を傍で見守っていたユイが、大きく溜め息をつき、それから小さく笑った。

## この空よさらば（１）

どうやらユイは、異世界の住人であるらしい。

ファンタジーよりもどちらかというとＳＦ寄りの趣向をもつ健吾は、どうにもこの異世界というメルヘンな響きに釈然としないものを感じたが、

パラレルワールド。

可能性の数だけ世界が分岐すると云われている多元宇宙。その別の宇宙から、ある転送システムを介してこちら側の宇宙へ渡ってきた　　と言ひ換えて説明されてなるほど納得するに至る。

言うまでもなく、この世界の文明がひっくり返るほどの超常現象だと解釈して頂いてまず差し支えないだろう。そんなの信じられないの一言で斬り捨てるのに充分過ぎる、果てしなく漠然とした事実。だが健吾は、　　ジールヴェン　　の存在、　　N F Aなる人型ロボットによる白兵戦闘を目の当たりにして今さら何を疑うんだと結論づける。それにまだ、諦めた訳ではない。自分自身が「特別」に変わる瞬間を。

　　N F Aを乗り回したい！

ユイとちゅっちゅしたい！

お前はアホか。いいだろう。そんな捻りのない突っ込みも今は甘んじて受けよう。しかしっ。身の内から湧き上がるこの猛々しいパッションを抑える込むことがどうして出来ようか。間もなく、防衛省特査管理局による総力を挙げたユイの【暁世界】帰還作戦が開始されようとしている。

家には、情報処理の資格を取る為に知人の所で合宿すると伝えてきた。健吾の事などさして興味がない父と母は「ま、せいぜい頑張

りなさい」と情のこもらない声で言い捨てた。

大学はすでに休学手続きを済ませてある。健吾の事など毛ほどにも思っていないのか「あ、そ」という記入済み休学届を受け取った事務員のやる気のない声が返ってきた。

買ったばかりのまだ手をつけていないゲームソフト。気合い充分で塗装に励む未完成のプラモデル。もうすぐ発売予定のフィギュア付き限定版アニメDVD。パソコンのハードディスクに眠る書きかけの創作ラノベ。この世界。北村千秋が「蒼穹世界」と呼んでいるこの場所に未練がないと言えば嘘になる。もう二度とこちらの世界に帰って来れない可能性は極めて高い。でもそんなものより遥かに価値のある人生を、健吾は生まれて初めて見出しつつあるのかもしれない。

覚悟を決めた。

そしてこの決意は、明美には伝えないでおこうと思う。もし妹に知られたら、いろんなことに首を突っ込みたがるというか、へんなところで世話好きというか、ともかくあの性格上、私も一緒に行くと言い出しかねない。自分などと違って、妹は両親から多大な愛情を注がれている。やはり明美には、帰還作戦の開始直前までバレないうような細心の注意を払わねば。

「ケンさ、実はユイについて行く気でしょ。顔に出てる。ていうか、大学なんで退学届じゃなくて休学届なのさ？ 覚悟がちっさい」

……。

だ、大丈夫大丈夫。

この際だから、ユイ本人にさえ悟られなければまだ活路はあるはず。

「健吾。あなた私と一緒に来るつもりでしょう。絶対に許さないから、そんなこと」

おお、神よ。

健吾は跪く。

あなたはそれほどまでにこのわたくしめを憎んでおいででしょう

か？

全長一六五・八メートルにして全幅三三・三メートルのその巨体は、かつて一〇〇〇トンの排水量と三一・六ノットの最大速力でマリアナの大海を果敢に割いて渡り、四〇基の二〇ミリ機銃と二六基の四〇ミリ連装機関砲、さらには艦載した四五機の戦闘機によって、展開中の旧日本空軍を殲滅せしめた。

インディペンデンス級、航空母艦。

日本の領海内に浮かぶこの米軍製軽空母を取り囲むようにして、自衛隊所属の護衛艦が五隻、警戒態勢のまま周辺の海域を監視している。

「まさか、本当にあんなものを手に入れてくるなんて。あなたの交渉力にはいつも驚かされます」

旗艦と目される護衛艦の艦橋、その通信フロアで北村千秋が傍らに立つ長身の男に語り掛けた。

「いえいえ。廃棄処分寸前のものをアメリカから格安で買い取ったただそれだけのことです。浮かせて進ませるだけの最低限の整備しかさせていないので、正直いつ沈むか分かりませんよ」

背広姿のその男 防衛省特査管理局局長、乃木藤祐は、口の端を釣り上げながら悠長にそう答える。言葉の末尾には冗談を仄めかすニュアンスが含まれていた。五〇の端緒。あるいは四〇。いや三〇の終盤か。起伏に乏しいのっぺりとした顔面と皺の少ない色白の肌が、彼の外見年齢を曖昧なものにしている。

「そう急かさずに。まだ若いのですから、彼女たちは」

モニターに映る軽空母を視界に捉えたまま、北村が苦笑しながら彼を窺<sup>たしな</sup>めた。

ユイと私たちだけで少しのあいだ話をさせて下さい。

それは、兄に対する明美なりの優しさだったのだろう。無論、作戦の速やかな完遂を望む防衛省及び自衛隊は、この身勝手極まりない申し出に一度は表情を渋らせた。しかし明美は、本作戦の中枢を

担うユイと友好関係にある、この【蒼穹世界】では極めて貴重な存在と言える。その意志と動向には、ユイの精神状態を少なからず左右させるに足る影響力があると上層部は判断した。もしかすると、屈強な大人たちを前に何ら臆することなく自らの主張を貫こうとする明美の悠然たる姿に胸を打たれたのかもしれない。

とはいえ、「偉そうな顔して。どうせこの何たら空母、国民の税金で買ったんでしょ？」というひとことが決定打となったのは言うまでもないこの事実が、何とも哀しい大人の世界である。

大海原に忽然と浮かぶ、所々が赤茶色に錆び付いた機械仕掛けの庭園。インディペンデンス級航空母艦、天空へ面したその広大な離着陸滑走路のほぼ中央に自分たちはいる。

オートリアクションオフ、デ・アクティブモード。膝をついた状態で我が主の搭乗を待つ ジールヴェン。

その傍ら、北村から渡されたある記憶媒体を手に握りながら真っ直ぐに前を見据えるユイ。

その正面、忙しく視線を泳がせながら全く落ち着きのない両手と両脚を遊ばせる健吾。

その後方、二人を見守る形で腕を胸の位置に組みながらじれったそうに静観する明美。

その上空、会話終了と同時に速やかに彼らを回収するべく監視、旋回する自衛隊ヘリ。

ユイは、とても意志の強い女の子だ。このひと月足らずでそれを存分に思い知らされた。自分の言葉を簡単に曲げるような真似は絶対にしたいだろう。だからこそ、彼女の心を動かすには、彼女の心にこの決意と誓いを届けるには、生半可な覚悟では罷り通らない。

健吾にもう後はない。いや、最初からそんな後ろ盾など存在しないのだ。ユイの姿を盗み見る。白い無地のベストに紺のジャケット、ジーンズのズボン。色気のない出で立ち。それでも彼女はぜんぜん魅力的だと思った。ぶらぶらしていた四肢を止め、ユイの視線と自

分のそれを正面から交錯させる。

「俺。ユイのことが、好き、好きだ」

ユイ、お前を愛してる。

君の笑顔を見ていたいんだ。

毎朝俺に味噌汁を作ってくれないか。

ジルハムごと貴女を貰っていきます。

告白の経験など過らつきしな健吾は、ドラマやアニメから多様な愛の台詞を持ち出しては頭の中で何度もその響きを反芻はんすうした。どれも違う。そんなことは当然だ。借り物の言葉なんかじゃ自分の本当の思いを伝えることなど到底叶わない。だから、

「わ、分かてるさ。自分が、どれだけ、魅力のない男か」

不器用でいい。

下手くそでいい。

「でも、こんなの勝手かもしれないけど、ユイと一緒にいると、自分を高めていくことが出来るじゃないかと、思っうんだ。お前と一緒にいたいんだ。だから、」

自分の気持ちを、

自分の言葉で伝えよう。

「だから、俺を、ユイと一緒に、ユイの世界に……連れて行ってくれ。つ、連れて行って、下さい」

言った。言い切った。一〇年分の勇気を込めた。まともにユイの顔が見れない。ダメだ、視線を逸らしては。彼女に嫌われたくない。正面から向き合わなければ。永遠のような一瞬が過ぎて。

ユイの瞳は、哀しみに揺れていた。それだけで次に発せられる彼女の言葉を悟ってしまう。

「ごめんなさい。あなたの気持ちに応えることは出来ない。一緒に連れて行ってもあげられない」

「やっぱり、俺じゃダメなのか？」

情けなくて泣きそうだ。

「そういうことじゃないの。もし健吾を私の【暁世界】へ連れて行

つて、そこであなたを死なせてしまったら、私は絶対に後悔するから」

「覚悟は」

「それ以上は言わないで。そんなもの、私の世界では何の役にも立たないから。力の伴わない覚悟なんて、何の価値もないの」

崩れ落ちそうになる理性と身体を、最後に残ったなけなしの意地でつなぎ止めていた。

「健吾、顔を上げて」

くちやくちやに歪んだ顔を見られたくないのに、それはないだろうと思う。

「あなたには、きつともつといい人がいるから」

男をふる時の常套句ではないか。でも健吾には分かっている。彼女だって借り物の言葉を使ったりなんかしない。これはユイの本心だ。だからこそ、逆に苦しい。

俺は、お前がいいんだよ。

両目を擦って鼻をすすり、ゆっくりと顔をあげる。

「普段は卑屈さの裏に隠れてしまっているけど、あなたは本当は優しい人」

彼女の声はとても柔らかく穏やかだった。そんな声をもつと聞きたかったのに。

「顔だって、あなたが思っているほど悪くないわ」

そこでユイはクスリと笑った。

「まあ、その鬱陶しい髪はどうかと思うけど」

ほつといてほしい。余計なお世話である。褒めてるのが貶してるのか、いったいどっちなのか。これで最後なんだからはっきりしろよ。

うつ！ と自ら思惑した「最後」という言葉に健吾は打ちひしがれる。

「これで最後だから言っけど」

あ、今その単語言わないで。

哀しきかな。それでもユイの言葉は続く。

「明美を、家族を、周りの人を大切に。今はまだ大して相手にされないかもしれないけど。でも、いつかあなたの良さを解ってくれる人が、必ず現れるから」

そんな歯の浮くような台詞を並べ立てた綺麗ごとなんて、反吐が出るくらい嫌いだったはずなのに。彼女の声でそれを言われたら、ほんの少しでも信じてしまいそうになる。

ユイの視線が自分の後方へ流れた。それを追うと、先に立つ明美がユイの視線を受けて「うん。いいよ」と大きく頷いた。ユイも軽く顎を引いてそれに応える。

「今度こそ最後ね。さようなら」

二人にその言葉だけを残して、ユイは踵を返すと ジールヴェン に向かつて歩き始める。

終わったのだ。

今度こそ本当に。

あの日の夕焼けのように、もう何を言っても彼女の背中を自分に振り向かせることは出来ないのだろう。

ぼん。

いつの間にか背後へ近寄っていた明美が健吾の肩に手を乗せた。

「よく言った。カッコ良かったぞケン。今夜は失恋パーティーだ」

それを聞いた途端、大声で叫びながら無性に走り出したい衝動に駆られて無造作に周囲を見渡す。目に滲み、鼻にツンとくる潮風。

果てしなく広がる海。海。海。

かなづちなのでやっぱりやめておく。この涙は塩気のせいなんだと無理やり自分に言い聞かせる。体じゅうを強張らせていた力が、行き場をなくして一気に諦観の彼方へ抜けていった。



## この空よさらば（２）

ジールヴェン が迎えてくれる。これでいい。やはりこの【蒼穹世界】に自分という存在は似つかわしくない。

もう戦わなくてもいい。この場所で休んでもいいのだと、そう考えたこともある。しかし錯覚だった。市街地で制圧した ミシアに搭乗していたパイロットの死亡確認を聞いている。死因は神経にインプラントされた時限式の有毒物質。

口封じ、機密保持でしょう。あなたのせいではないわ。氣に病まないで頂戴。そんな北村の言葉に、ユイは納得などしていない。この世界に死を運んでくるのはもうたくさんだ。

ほんの僅かな間だったが、存分に感じる事が出来た掛けがえのない平和。その名残惜しい幸せを最後にもう一度だけこの網膜に焼き付けておこうと、ユイは平和の象徴たるこの空を見上げた。

海を覆い尽すように一八〇度に渡って展開する壮大な青。雲がひとつとしてない美しい青。天空を熱して輝き照らすのは、この星のありとあらゆる光を燦然と掌握する、<sup>さんぜん</sup>“双子”の太陽。

「馬鹿げてる、そんなわけないじゃない！  
有り得ない。」

瞼の筋力を総動員して目を凝らす。大きさを不安定に変化させながら、もうひとつの太陽が震えていた。周囲の空間を脈動させる金色の強烈な閃光。形容し難い異質、奇怪、超常。天空に黄金の穴が空いて、ユイは驚愕する。何故ならその閃光が、人の形をした巨大な無機物を、この青い空に招き入れる瞬間を両の瞳に映したからである。

「健吾っ！ 明美っ！ 今すぐ伏せ

先に続く言葉は、頭上を旋回していた自衛隊のヘリが爆散する轟音によって上書きされた。急激な鼓膜の振動に五感を削られながら

ユイは、青ざめた戦慄の表情で上空を見上げる健吾と明美のもとへ疾駆。二人に飛びついてその肩を掴んで引き寄せ、強引に地面に組み敷くと自分の体を覆い被ぶせて低く伏せる。

一瞬前までヘリコプターを成していた鉄塊が、無数の金属片となつて空母の飛行甲板に降り注いだ。

中空を、巨大な推進器の唸りが駆け抜ける。

鋼の驟雨<sup>しゅうう</sup>が止むと同時に、上体を起こして怒鳴り声を上げた。

「無事ね？ 立って二人とも！」

「何、何なの」

「耳が、痛った……」

頭上を仰いでユイは言い放つ。

「【暁世界】からの進撃。空戦型NFAよ」

NFA リンドエア。空戦用に軽量化された全身のフレームと、縦軸に並んだ二基の巨大なジェット推進を背部に有する量産機。バツクパック側面から左右に広がる逆三角形の両翼が空気抵抗を切り裂いて飛翔する姿は、まさしく“鳥人”<sup>とりびと</sup>を想起させる。

推進剤による姿勢制御で琥珀色の機体を翻し、垂直に上昇していく。距離をとって誘導弾を撃ち込んでくるつもりか。脚部側面に武装されたウェポンコンテナの形状から対艦ミサイルは搭載されていないようだが、戦闘能力を持たない空母など僅かな時間で沈められてしまうだろう。

北村から渡された記憶媒体が、自分の手中から消えていることにユイは気づいている。無我夢中で体を動かした際にどこかへ落としてしまったか。もしや爆風で吹き飛んで既に海の中かもしれない。どちらにしろ、今は応戦を行う方が先決だ。

「二人とも早くこつちへ！」

護衛旗艦のブリッジに、張りのある高い怒声が響き渡る。

「局長！ これは最悪の事態です、何故もつと前に出て応戦しないのですか。何の為の護衛艦なんです！ 今すぐ航空部隊を出撃さ

せて下さい」

通信フロアで堰を切ったように乃木を攻め立てているのは北村千秋その人だ。

「監督官、どうか落ち着いて。貴方の身の上、取り乱す気持ちはお察しする。だが我々の戦力でNFAに対抗しようなど無謀です」

「子供がつ、子供が殺されかけているのですよ！ それを黙って見ていると？」

「既にこちらにも犠牲者が出ています。どうやら貴女はご自分の責務を軽視して、個人的な感情を優先しようとしている」

乃木の細い目が、得も言われぬ強烈な眼光を宿して北村を射竦める。防衛省特査管理局、最高権力者。その威厳と覇気が表層へ浮かび上がった瞬間だった。

「最低限の牽制と援護は行うよう命じています」

「人の命を天秤にかけるのですか？」

「この【蒼穹世界】を護る為ならいくらでも」

乃木は口の端を釣り上げてこう言った。

「しかしそれほど悲観的になるものでもありませんよ北村監督官。我々にはまだ ジールヴェン がある」

「ここが ジールヴェン のコックピットか」

「もつとくつついて。なるべく体を固定するように」

「お、おう」

寄せ合った体をよじってさらに密着させる健吾。恥ずかしいのか耳が真っ赤だ。もごもご訊ねてくる。

「あのさ。敵の攻撃が来るんだよね？」

「そう。もつミサイル撃たれたから」

「えっ！」

健吾が驚愕するさなか、息の長い警報がコックピットに鳴り響いた。

「それってこれのこと？」

健吾とは反対側からユイと身を寄せ合った明美が指を差した先は赤く明滅する警報ランプとサブモニター上に円形で表示された深緑色のレーダー。それに映るのは、上方から中央へと向かう四つの光点。

「ええ。護衛艦からの援護射撃がなかったら機体に取り込む前に吹き飛ばされていたでしょうね……来るわ」

上空、 リンドエア 脚部のコンテナから放たれた左右二発、計四発のマイクロミサイルが、空の青に白煙の軌道を奔らせて空母へ迫る。パイロットの技能か、あるいはFCSの性能か。護衛艦による機関砲及び対空機銃の斉射、これへの回避運動を行いながら発射した リンドエア のマイクロミサイルは、空母の飛行甲板上を正確に捉えていた。

ジールヴェン の戦術AIは演算する X 7 9 3 4 Y 1 2 3

6 Z 1 2 8 5 X 8 5 2 4 Z 7 7 4 6 Y 3 8 2 X 9 9 5 7

Z 2 0 8 9 Y 5 4 6 X 1 3 3 6 8 Z 3 0 7 1 Y 1 0 1 1

X 1 5 7 5 8 . . . 弾道予測終了。着弾ポイント算出、誤差

修正、許容範囲±35。

「動くわつ。掴まってて。舌を噛まないように！」

左脚のフットペダルをゆっくり踏み込むと、握り締めた左右のグリップを手前に引き寄せる。ジールヴェン の反応速度は、ユイの超人的な反射神経に追従するべく調整を受けている。刹那、横殴りのGがコックピットを驚掴みにして大きく弄んだ。瞬間的にマグニチュード強の地震をその身に体感したのに等しい。

「きゃあっ」

全身の内蔵が右へ寄ったかもしれないと錯覚するほどの激しい揺れに明美が思わず悲鳴を上げた。

マイクロミサイルが空気を裂く鋭敏な飛行音を響かせながら空母滑走路に到達。対する ジールヴェン は、地面上の数センチを機動するホバリングで斜線移動とターンブーストを繰り返し、氷上を滑るようにこれらを回避する。直後に起こった幾重の爆発と震動は、

滑走路の表面を灼いたものではない。機体の足元、対艦仕様ですらないこのミサイルが、飛行甲板を易々と刺し貫き、空母の下層部に侵入。そこで爆発を発生させて内部構造に誘爆を引き起こしている。【蒼穹世界】と【暁世界】

両の世界間における兵器レベルの相違、その圧倒的な火力の差をまざまざと見せつけられた瞬間である。

「うえ」

「……す、凄い」

吐き気を必死に飲み込んだ健吾と、爆発の大きな震動に驚嘆の呻きを漏らす明美。

「こちらからも攻撃する。反動に気をつけて」

FCS解放　ウエポンプラットフォーム展開、出力上昇。　ジールヴェン　の右腕部、その内部と外部が織り込むように反転して一五〇ミリ粒子ビームランチャーの砲塔に変形。銃口を天空へ掲げ、砲身の尾端となった右肘部に左マニピュレーターを添え射撃態勢を取る。

ヘッドアップディスプレイのターゲットサイトが、地上の獲物に嘴くちばしを向ける猛禽類せうきんるいが如く急降下を開始した　リンドエア　の機体を追う。相対速度補正、インサイト。ユイは人差し指を乗せていた右グリップのトリガーを押し込んだ。銃身内部の加速帯より指向性を与えられたフォトンフォトンの凝集弾が、空気を熱して放射される。目標に命中　せず。　リンドエア　の俊敏な軸回転によって光芒は躲かわされ、背景の青へ消えていく。間髪入れず二射目三射目のビームランチャーを　ジールヴェン　より撃ち放つ。

対して　リンドエア　は左右へのバレルロール機動で見事これらを凌ぎ切り、空母飛行甲板に接近する。自衛隊ヘリを天の藻屑と変えた八五ミリ高機動アサルトライフルの銃口が、　ジールヴェン　の機体に向けられた。三点連射さんてんぱすトで火を噴く。

両肩のフレームを外側へ展開させた　ジールヴェン　のフィールドジェネレーターが、防御力場を形成するエネルギー障壁を出力。

高機動アサルトライフルの銃弾がこれに阻まれ、光沢の干渉縞を空中に輝き散らせる。　ジールヴェン　が再びビームランチャーを射撃態勢に入れたとき、　リンドエア　の機影は既に空母を大きく迂回して距離を取っていた。空戦型NFAの特性を最大限に生かした一戦離脱の戦法　、ユイは敵パイロットの操縦技量を推し量る。　飛び抜けたテクニクがある訳じゃないけど、戦場での経験値は私より遥かに上。

リンドエア　の携行する、航空・高速戦闘に対応したアサルトライフルは、突撃の名を冠してはいるものの、空対地戦を想定し、地上の敵との高低距離をカバーする為に通常のアサルトライフルに比べ極めて長い射程を有している。加えてあのミサイル攻撃。移動範囲を飛行甲板上に限定された状態で撃ち合うのはかなり分が悪い。ヘッドアップディスプレイから遠ざかる敵機を見送り、両のグリップを強く握り締めながら内心で毒づいた。

　ビームランチャーの命中精度はそれほど高くない。長距離砲のエネルギーギークャノンが健在なら狙撃できるのに……。

アラート。マイクロミサイルの接近を伝えている。

フライトシステムを使う？　いえ、訓練を受けていない健吾と明美を乗せたまま空中で戦闘機動なんて出来ない！

　リーダーに映る四つの光点。先程よりも発射のタイミングが遥かに早い。何故か　簡単である。目標が　ジールヴェン　ではないからだ。

爆発。爆炎。震動。

マイクロミサイルが空母の船体側面に直撃し、内部で、その身に与えられた火力と熱量を解放。破壊の限りを尽くす。空母を沈めてこちらの足場をなくす腹積もりだろう。　リンドエア　の猛攻。

ジールヴェン　の射程圏ぎりぎりでも高機動アサルトライフルによるヒット＆アウェイを繰り返し、機体に搭載した残り全てのマイクロミサイルを、長距離から空母のあらゆる支点に叩き込んだ。

空母が煉獄の炎に包まれた。船底に数多の風穴を開けられ、海水

が唸りを上げて押し寄せる。墨色の煙と深紅の火の粉を吐き出しながら船体が瓦解を始める。その不気味な悲鳴が空間に響き渡り、海域を埋め尽くす。

上空からの爆撃と下層からの誘爆により凄惨に半壊した飛行甲板。ジールヴェンの周囲には連鎖的な爆発が散々と巻き起こり、鉄塊を抱いた爆風が荒れ狂う熾烈な情景を呈している。なさがら鬼の闊歩する地獄絵図のようだ。

自衛隊護衛艦からの援護射撃を鋭角的な旋回機動で去なし、リンドエアは脚部の炸裂ボルトを着火してマイクロミサイルを撃ち尽くした二基のウェポンコンテナを切り離す。それが海面へと着水、破棄されると同時にジールヴェンへの再強襲を仕掛けるべく機体を燃え盛る空母滑走路に向けて加速させた。

こちらは防御フィールドのエネルギーが間もなくパワーダウンする。身体をガタガタと震わせる明美の計り知れない死への恐怖が、触れ合った肌を通して伝わってきた。健吾は既に感覚が麻痺しているのか血の気の引いた表情で唾液を滴らせながら呆然とモニターを見つめている。危機的戦局。このままではジールヴェンは敗北。護衛艦も全滅する。

死。

この場で、それはもうユイひとりのものではない。本当に取り返しのつかない領域に巻き込んでしまった。

健吾も。

明美も。

北村も。

自衛軍も。

私が、死なせてしまう。

全身の神経がたぎるように熱を帯びる。腹部の奥深くで眠っていた幾億もの小さな有機体が、一斉に覚醒を始めた。感情の赴くままに、喉を灼いて叫ぶ。

「このまま、何も守れないでっ！」

刹那、くぐもった電子音。

「画面が、消えちゃったぞ」

健吾のこの言葉が、その瞬間に起こった現象の発端を表していた。  
「もしかしてエネルギー切れ？」

違う。

明美の、不安げな声で尋ねてくるその言葉を、ユイは果たして否定した。自分は知っている。

戦闘システム、リスタート。

ユイ、健吾、明美を囲うディスプレイとモニター群が、怒濤に溢れかえる解読不能な数言語の荒波を三人の視界に流し始めた。

「ジールヴェン。あなたはまた、私のことを守ってくれるの？」



### この空よさらば（3）

空母甲板上を荒れ狂う鉄塊と爆炎が、ジールヴェンの機体から放たれた青白い強烈な閃光によって滅却する。声なき声を上げ、ジールヴェンが咆哮ほろごうしていた。空母に広がる地獄を屠ほふるカタルシスのようにその閃光が周囲の空間を脈動し、湾曲させていく。

光に包まれたコックピットで健吾と明美が激しく狼狽する中、

「爆発かつ？」

「どうなってるのこれえ！」

乱数演算を繰り返すヘッドアップディスプレイを、ユイは強靱な意志の宿った双眸そくめつで注視する。

「大丈夫。必ず勝つから、守ってみせる」

サブモニターにウエポンプラットフォームが突如として復元、データ更新の信号群が津波のように画面を支配した。ユイは本能的に理解する。射撃制御ソフトのプログラムが信じ難い速度で書き換えられていく事実を。機体の兵装スペックが変貌を遂げ、一五〇ミリ粒子ビームランチャーの出力と最大射程が一気に一桁跳ね上がる。

ジールヴェンの異常な形態変化を至近距離からメインカメラに捉えた リンドエア が、推進剤を噴かせ減速、機体を翻す。ヘッドアップディスプレイに映る乱数表示が瞬時に散開、再び集約した光点が、リンドエアの軌道を追う画面中央にターゲットサイトを形成した。

「もう逃がさないつ。今度こそ命中させる！」

相対速度、距離補正。

インサイト。

ユイはトリガーを絞り込む。

青白い閃光が、右腕部の先端へ集約。異常なまでの高出力によってプラズマ熱流を纏わせたフォトン収束弾が、狂暴な銃声を轟かせて空へ撃ち放たれる。一五〇ミリ粒子ビームランチャーの砲口が

発射と同時に溶解して吹き飛び、極限まで叩き上げられた熱量を冷却し切れず ジールヴェンのラジエーターが悲鳴を上げた。規格外に肥大化したビームの光軸が、射線上の空間を灼き払いながら上空の リンドエア へ向かって爪牙を剥き出す凶獣が如く襲い掛かる。

即座に反応して回避運動に入る敵機だが、常軌を逸した驚異の弾速で追従してくるビーム光を凌ぐことはもはや不可能であった。斜め下方からの強烈な一閃が リンドエア の両脚部と背部を喰い破り消し飛ばす。錐揉み状態で急降下。機体を立て直そうと、残された腰部のサブスラスタを噴射しながら海面ぎりぎりを低空飛行する。しかしジェットエンジンを削り取られた背部の溶断面が機体全身に電撃とショートを進らせ、遂にはコントロールを失った。海面を数回バウンドしたあと、 リンドエア が海中にその姿を沈める。

爆発。高度一〇〇メートルを優に超える水柱が空を舞い上がって散逸し、海に大きな水紋の華を咲かせた。

やがて刹那の自由が潰え、重力に囚われた花卉は海に還り、一部が陽光を反射する鋭い輝きを纏った雨へと姿を変えて周囲に降り注いだ。

リンドエア 撃破。

だが ジールヴェン の放つ光は降り注ぐ雨をも滅し、途絶えることはない。

『あの青い光は……！』

『作戦が始まったのか？』

無線装置から自衛隊の怒声が飛び交う護衛艦旗艦の通信フロア。眩い閃光を放つ空母滑走路を最大望遠で映し出すモニター群と向かい合った北村が、神妙な面持ちで口を開く。

「発動しましたね」

援護射撃の強化についてあれから更に口論した結果、乃木は北村からネクタイを掴み上げられ何度も身を揺さぶられる羽目になった。

すっかり乱れてしまったその服装を坦々と正しながら小さく咳払いをした後、彼は無然とした態度で言葉を返す。

「ええ。まだ中枢から漏れ出すほんの残光に過ぎませんが、間違いないでしょう」

それを耳に入れた北村が、青白い輝きを映すモニターから視線を逸らすことなく、小さく、そして敢然とした声で

「【イクシオン】」

確かにそう呟いていた。『敵機の完全な撃破を確認。救護班は空母に回れ、大至急』

空母の船体が噴き上げる爆発の熱風に煽られ、体勢を倒しながら旋回する自衛隊ヘリ。

『駄目だっ。また爆発が起こり始めて目標に近づけない!』

その眼下。原型を崩しつつある空母は側部壁面を破壊し尽くされ、露呈した骨格の束が獰猛な焰で包まれている。誘爆によって内部構造が煩雑と分解され、鉄の刃を四方に撒き散らす。滑走路上に確認出来る ジールヴェン の機体は、放熱機構より放つ青白い閃光を不安定に瞬かせながら震えていた。光の幕が周囲の空間を歪めている為に全身が超蠕動ちようぜんどうを起こしているようにさえ見える。

「倒したのか、あいつ」

「ええ。何とか勝てたみたい」

「助かったの？ 私たち」

「そうね。でも」

通信システムが復元、北村の声が飛び込んで来る。

『ユイ、応答して頂戴!』

「北村監督官？」

『ああ良かった。回線が戻ったようね』

焦燥の声色を乗せたまま、北村は一気にまくし立てた。

『早くそこから離脱しなさい！ 救護班を向かわせているのだけけれど、爆発が壁になってヘリがそちらへ取り付けそうにないの。あと

僅かでその空母は沈むことになるわ。急いで!」

至極真つ当な意見だとユイも思う。出来れば自分もそうしたい。しかし言わなければならぬことがある。

「それが、」

『何?』

「機体の制御が利きません」

『……』

「……」

『……』

「……」

爆音と震動が轟く中、息の詰まるようなこの沈黙に耐えかねたのか健悟が突っ込みを入れてくる。

「ここはボケるとこじゃないだろ」

「ボケてなんかないっ。どうして私がこんなところでふざけなくちゃいけないの!」

健吾の言葉にむっとして、グリップとそこら辺のコンソールをがちやがちやいじり倒す  
ジールヴェン の反応はない。

「ほら!」

「いやほらって言われても」

などと言いつつ、ジールヴェン のことになるとこうしてすぐムキになるユイの仕草に並々ならぬいじらしさを感じ取ったらしい健吾は「でも今のユイちょっと可愛かったかも」と鼻の下を伸ばした。

「ご機嫌斜めなのかな ジールヴェン は」

明美のこの指摘にユイはハッと何かを悟ったような顔になり、彼女と二人して疑念の視線を健吾に投げかける。

「何でそこで俺を見るの?」

「ケンがジルハムとか言うから」

「今関係ないだろそれっ」

閑話休題。制御不能のまま、機体の放つ閃光によって青く浮かび

上がったコックピット。緊急脱出機構の制御系は完全なスタンドアローンである。マニュアルで炸裂ボルトを起爆してコックピットハッチを吹き飛ばすか。

しかし外に出ることが出来たとして、健吾と明美が自衛隊に無事回収される保証はない。むしろ空母の爆発と沈没に巻き込まれて命を落とす可能性の方が遥かに高いだろう。いや、ジールヴェンの形成した力場に触れて肉体を消滅させられるかもしれない。

「俺達の人生、このまま終わってしまうのかな」

「私はこの青い光に乗って、【蒼穹世界】に渡って来たの」

その言葉を耳にした健吾の瞳が大きく開かれる。ユイと出逢った夜に裏山で見たあの光と、今コックピットを照らすこの光が脳裏で重なったに違いない。

海に沈むのが先か。

【暁世界】への転送が先か。

大きく溜め息を吐いた。

「確認するわ健吾。【暁世界】に渡る覚悟があるのね？」

急な呼び掛けと強い語調に一瞬肩を竦ませた健吾だったが、言葉の意味を咀嚼したのかすぐに落ち着きを取り戻す。

「もちろん」

「本当にある？」

「本当にある」

「本当の本当にある？」

「本当の本当にある！」

「……そう。分かったわ」

今度は明美に向き直って優しく声を掛ける。

「巻き込んでごめんなさい、明美。あなたも私の世界に連れて行くことになりそうなの。覚悟を決めて欲しい。一緒に来てくれる？」

明美は 数秒の沈黙を置いて「うん」と頷き、

「この際しようがないなっ。もうこうなったら一蓮托生でしょ」  
気持ちのいいくらいサバサバと言い切った。スカツとする爽快な

笑顔である。

「分かった。ありがとうございます」　そこで健吾がもの凄い勢いで挙手。

「超ハイパーミラクル異議あり！」

お前はただだけ異議の申し立てがしたいんだ、と眉を顰めて面倒くさそうな表情を作ったユイは健吾を叱咤する。

「何っ？　切羽詰まってるから手短に」

「俺には三回も確認を取ったのに何で妹は一回なんですか。このえらい待遇の違いを説明して下さい先生」

何だそんなこと、とでもいうように小さく溜め息を吐き、キツパリこう言い捨てる。

「信頼度の違いです」

「っ！」

健吾は肩を落として「ひどい。これはひどい。告白したばかりなのに」と盛大にしょげ返り、明美はそれを嘲笑うかのように「ふふん」と得意気にふんぞり返った。

『あなたたち、全員で【暁世界】へ渡るつもりなの？』

ジールヴェンの通信システムと【蒼穹世界】のそれを同調させる事が出来なかった為、ユイは明美に持たせていたあの無線機を北村に渡している。

通信回線からの北村の声に明美は、あっけらかんと言った。

「はい。そういうことなので私達の親や学校には北村さんから説明をお願いします。ちゃんと説得力のあるやつをよろしくです」

『そんな無茶な』

「そこをお国の力で何とかっ」

両手を合わせていじらしくウインクする明美。音声のみで映像は向こうに送られてはいない。しかし彼女のこの何とも憎めない仕草と雰囲気だけは届いたのか、こんな言葉が返ってきた。

『……ふう。こういう事態に陥ったのには私にも責任があります。善処しましょう』

「ありがとうございますっ」

コックピットを交叉する青の粒子が、強引に軌道を切り替え流れを変えた。上方へ向かって光が遷移し、

「もう時間がないみたい」

ユイのその声を絡め取るかのように振動して場を満たした。

腹部が、熱い。

不安定な閃光を成していた ジールヴェン の放つ力場が、美しいドーム状へ整形してさらに大きく成長 空間の歪みが、外部風景を視認出来ない程にまでその曲率を上昇させ、周囲のエントロピーが増大する。

通信回線の途絶する寸前だった。北村の柔らかい声が、

『行つてらっしゃい。【暁世界】に帰ったら、私の娘と孫によろし

く』

「え、」

しかしユイがその真意を問い返すことはもう出来なかった。

消失。

この言葉以外にそれを表現し得るものは存在しないだろう。

ジールヴェン がこの世界から消えた。

青白い閃光が絶えたのちに訪れる、瞬間の静寂。機体の転送に空母の飛行甲板と中層部が飲み込まれ、それらを構成していた物質が球形に消滅、巨大な空洞を作っていた。まるで世界からその一部分だけを切り離し、抉り取ったかのように。空洞が重心の位置エネルギーを根刮ぎ奪い去つて船体を大きく分断、空母の原型を完全に崩壊させた。圧倒的な質量をもつ無秩序へと姿を変えた合成金属の孤島が、耳をつんざく断末魔の叫びを上げる。インディペンデンス級航空母艦、その成れ果てが、日本海の大波に抱かれて沈んでいく。

「あの兄妹のご両親には何と説明するおつもりですか北村監督官。下手をすれば民事訴訟で裁判沙汰でしょう」

乃木の声に怒りはなかった。疲労と困憊、こんぱい 裏れた表情が彼を年相応に老け込ませたように見える。

「今の時代に神隠しなんて流行りません。防衛省が民間人を誘拐したとなれば、内閣は血相を変えて隠蔽にかかる。お上の方々が今度は責任の擦りつけ合いに獅子奮迅ししぶんしんの活躍を見せてくれますよ」

全く以て冗談には聞こえないが、そこでまた口の端を釣り上げて乃木はこう付け加える。

「明日の幕僚会議は騒がしくなりそうです。今夜中に耳栓を用意しておいた方がよろしいですか？」

どうやらこれは彼の癖らしい。

北村は同じく裏れた表情で苦笑し、開き直ったような口調で答える。

「全力で対処します。あの子に『善処しましょう』と約束してしまいましたから」

「それは頼もしい限りです。しかしそれよりも……、犠牲となった自衛隊員の遺族の方々に、何と言って頭を下げればよいのか、私には検討もつきません」

乃木の瞳に浮かぶものは、【蒼穹世界】の尊い人命を削ってしまった現実を鑑みかんが、慈しむ悔恨の揺らぎ。

太陽が、西へ向かって緩やかに歩を進める。このまま地平線に沈んでも、明日には再びその顔を見せるだろう。そしてこの世界を照らし、空を大気の蒼に染める。何故ならその事実こそ、ここが【蒼穹世界】であるという証明だからだ。



## 明けない夜明け（1）

【彼】は道に穴を空けた。

穴の底に炭火を仕掛ける。罨に掛かって落ちた者を丸焼きにする為だ。

やがて現れた【彼】の義父がこの罨に掛かり、炭火の炎によって焼き殺された。

【彼】は自らの義父を抹消し、この世界で初めての身内殺しとなる。神々は怒り狂った。

【彼】を蔑み、憎み、迫害し、糾弾する。

その渦中、十二神の王ゼウスは【彼】の罪を浄化し、【彼】を神々の晩餐へ招き入れた。

しかしあるうことか【彼】は、再び陰惨で凶悪な謀略を巡らせる。

ゼウスの後、ヘラを誘惑し、誑かし、我がものにしようと言葉巧みに言い寄ったのだ。

主神ゼウスは怒り狂った。

ヘルメスの鞭により【彼】を断罪し、タルタロスの火焰車により

【彼】を永久の苦しみへと縛りつけた。

永遠に廻り続け、その身を焼かれ続ける火焰車の炎の中で、【彼】は何を思い馳せるのか。

世界の掟と律を破り、神に対する熾烈な裏切りを行使した愚者。

【彼】は愚者。

その愚者の名は。

【イクシオン】

見渡す限り一面の荒野が広がっている。何もなかったはずの場所から、光が生まれた。空気を脈動させる青白い閃光。空間を歪ませながら世界に干渉し巨大化する閃光の力場は、ドーム状を成した状態から急激な波動の起伏を生み不安定に瞬いた。それは、本来あつてはならないはずの赦されざる力。この世界の自然法則、物理法則を跳び越える　まさに神への裏切り。永久を灼き舞う火焰車の灯。

### 【イクシオン】

力場が収束へ転じ矮小化。光の中心に姿を現した巨大な機人は、ジールヴェン　である。

瞼の向こうに静けさを感じて、健吾は恐る恐る瞳を開いた。

G P S 作動　座標特定。

「帰ってきた。やっと……」

傍から聴こえるユイの感慨深い声。モニターに映る光景は地平線の向こうまで続いているのではあるまいか、と錯覚してしまう程のただっ広い荒れ果てた大地である。画面の上端に座標数値らしきものが表示されたが、自分にはちょっと読み取れない。

「明美、健吾、体に異常はない？　痛いところとかある？」

「うっん。私は大丈夫」

「俺はちよつと腰にキてる」

「それくらいなら大丈夫そうね」

自分と肩を合わせてひっそりと寄り添っている健吾を見て、ユイは思わず「ぷっ」と吹き出した。

「何で笑うんだよー」

「ふふ、ごめんなさい。あんまり一生懸命にくっついてるものだからつい」

「ユイがくつついてって言ったんだろ」

「そうだった。でもほら、敵はもういないから離れてもいいわ」

「えっ！　う、まあ、うん」

虚を突かれたように慌ててユイから体を離す。

「うう」

これはかなり残念だ。柔らかくて暖かいユイの身体の感触を、もう少しのあいだ味わっていたかった。断っておくが、この気持ちは純情であって、決して欲情ではないのである。

「これからどうするの？」

明美の言葉に一端頷いて見せ、ユイはコックピットのコンソールに利き手を伸ばすと機械慣れた滑らかな指捌きでそれを操作する。心地いいリズムの電子音が鳴り響き、ヘッドアップディスプレイに「system online sending signal」「wait」...の文字が表示された。

「今、友軍に機体コードと信号を送ったわ。通信可能な距離に味方の鑑が入ればすぐにでも応答があるはず」

「敵に見つかつたりしないよな？」

不安げにそう訊ねると、それを笑い飛ばすように彼女は明るく答える。

「平気よ。一〇年前はここも戦場だったらしいけど、幸い今は同盟軍の国領内になっているから滅多なことじゃ発見されたりしないわそれに。ジールヴェンが搭載する通信システムの識別機能は優秀なの。ECMだってそれなりに信頼度は高いし」

なるほど。それは頼もしい限りだ。命を脅かす危険は一時的にする本来に去ったという訳か。へなへなと肩の力が抜ける。けれど、安心と同時にくやしい気持ちを抱いている自分もいる。何故ならばジールヴェンの性能について語るユイは、とても嬉しそうであり、そして何より楽しそうだから。ジルハムと無力な己と比較して、健吾はまた少し嫉妬した。

愛機の自慢を終えて満足げに頷いたユイが、再びコックピットのコンソールに指を重ねてこう言った。

「外に出ましよう。ぐずぐずしていると日が暮れてしまうから」

時刻は既に日の入りに向かっており、外は綺麗な夕陽が輝いてい

た。文字通り世界の壁を越えて、ユイの背中に再びこの手が届いたことへの実感が、その光景を通じてようやく健吾の心を満たしていく。

俺はやったぞ！

勢い余ってガッツポーズを取りそうになったが寸前のところで自分を抑える。もはやこれは運命ではないか、とすら思う。ユイと自分との間に強い人生の交わりを感じずにはいられない。

確かに、一度自分は彼女にフラれたし、先ほどのように今はまだジールヴェンにも勝てそうにない。それらの事実は潔く受け入れよう。しかしユイは「他に好きな人がいる」とは、ひと言も口にしなかった。もし恋人の存在　もちろんNFAではなく人間の理由に自分の求愛を断ったのなら、律儀な性格上、彼女は必ずその旨を打ち明けてくれたはずだと健吾は推察する。

ユイと一緒に世界を渡ったんだ。彼女のそばにいれば、またアタックする機会はきっと巡ってくる！

顔だって、あなたが思っているほど悪くないわ。

胸に刻まれたユイのこの言葉が、図らずも健吾の恋心を再び燃え上がらせている要因となっていることに疑いの余地はない。

するんだ。もう一度、告白。

「こらー、そこー。サボるなあ」

背後から野次が飛んできた。

誰だ新たな決意に満ち溢れたこの崇高なる独白に水を差す輩は、と振り返る。すると大量の缶詰めを両腕いっぱい抱えた妹が、それを落とさぬようにとおっかなびっくりな歩調でこちらへ向かって来た。突っ立ったままの健吾を見て、口をへの字にひん曲げながら不平を漏らす。

「早くテント組み立ててよー」

ああ、ここには明美もいるんだっただっけ。余計なおマケがついてきたもんだ。

「缶詰め、投げるよ？」

可愛らしく小首を傾げ、怖いくらい満面の笑みで明美は言った。声に出してもないのに相変わらず鋭い。彼女の戦闘能力なら、例えば小さな缶詰めひとつでも脅威の殺傷兵器と化すだろう。ここは血が流れぬ内にとつと謝ったほうが得策である。

「ご、ごめん」

「よろしい。さ、日が暮れる前に何とか寢床を確保しないとね」

健吾はユイから任された野営の準備　すなわちテント張りの作業を再開する。明美がその辺に缶詰めの山をおっ立て、塞がっていた自分の両手を空けた。慣れないテント張りにアタフタする兄の不甲斐なさに見かねのだろう。健吾の隣に腰を下ろして作業を手伝ってくれる。支柱となる何本もの金具を伸ばして固定し、厚い革を重ねて作られたダークブルーの幕を広げて小屋を組み立てていく。

膝立ちの状態で駐留させた　ジールヴェン。その脚部の収納スペースから取り出した残りの食料パックと水ボトルを肩に担ぎ、更に大量の資料を脇に抱いたユイが二人のところへ戻った頃には、既に立派なテントが完成していた。素人が組み立てたにしてはなかなか見てくれのいいテントに少し感心して、

「あ、全部してくれなくて良かったのに。ありがとう」

疲れた表情で座り込む健吾と明美に労いの言葉を掛けた。

二人は何もテント張りに全力投球したせいで疲れ果てたのではないだろう。直前の戦闘に巻き込まれた事が精神的、肉体的な疲労を極端に増長させていた。平和に溢れた【蒼穹世界】の日本で育った二人にとっては文字通り死ぬ思いをしたに相違ない。戦闘に関してはユイにとっても同じであったが、戦場で半生を送ってきた自分との判然たる適応力の差が出たのだろう。

ユイは三度二人を巻き込んでしまった行為への罪悪感に駆られた。一瞬が生死を分かつ戦場で、自分が下したあの選択はやむを得ないものだった。だがそんな兵士としての常識も、二人を【暁世界】に連れてきてしまったという大きな罪の意識を打ち消し相殺するほど

の効力はもたない。

足元に視線を落とす。人の原型を嘲笑うかのように細く長く伸びる暗い影が、まるで自分に向けられた重たい呪いのように感じる。安っぽい悲劇のヒロインを気取っているのでは断じてない。何故ならば【暁世界】で起こる激しい戦火により健吾と明美が命を落とすその確率が、覆しようのない強固な正数を以てこの現実が存在しているからだ。この現実を、二人の両親は、親族は、友人は、思うだろうか。

「ユイ？」

明美の心配そうな声を聞いて我に返り、無理に笑顔を作る。

「何でもない。もうじき気温が急激に下がってくるわ。中へ入りましょう」

テントの間取りは四畳ほどで三人が入るには少々窮屈な広さだが、食事をして睡眠を取るだけだと考えればさして不自由はないだろう。天井の据付ライトと床のランタンに柔らかく照らし出されたテント内は、視覚的な刺激を一切持たない平穏な雰囲気包まれている。数時間前の目まぐるしい戦闘が嘘だったかのようなゆっくりとした時間が流れる中、プラスチックのフォークを片手に少し遅い夕食を摂る。

乾パン。

鯖肉。

クラッカー。

フルーツ。

ミネラルウォーター。

質素な非常食ばかりで食感は味気なかったものの、こういう食事はやっぱり楽しい。中学高校時代、学習キャンプや修学旅行の夜に、隠し持って来た軽食やお菓子を頬張りながら、同班の友人たちとあれこれ語り合ったときの多感な思い出が微かに蘇る。

「あ。トイレどうする、やっぱり順番に外だよな」

「こらっ、いま食事中なんだからそんな話しないで」

「ふふ。生理現象だもの。仕方ないわ」

「バカなんだからもう。それより重要なのはお風呂だよー」

「お風呂……だって？　なぜだろう、今この場で聞くその言葉には、とても甘美な響きを感じる」

「黙れエロガツパ」

「しばらくはお湯で体を拭くしか出来ないと思う。我慢してね」

健吾が下らない話を振り、

明美が鋭い突っ込みを入れ、

ユイが小さく笑って答える。

絢爛反語けんらんの晚餐が緩やかな時を刻む。子供たちだけの楽しい団欒だんらんは疲労を空腹へと置き換え、周囲に転がる空きの缶詰めがひとつ、またひとつと増えていく。そんな食べ散らかされた容器をちらりと一瞥し、ユイが思索に耽ひたっている姿を健吾は見逃さなかった。

在庫が心配になっていろいろだろうか。【蒼穹世界】の日本政府からユイに支給された食料は、成人男性が約一〇日間生活できる蓄えに相当する量だと聞いた。【暁世界】帰還作戦の発令に際し作成されたマニュアルに基づき、当然これは一人分の摂取量を算出したものである。それをユイと明美と自分で更に分ける　ざっと概算すると三日と少し保てば御の字といったところだろう。

「食料大丈夫か？」

「ん。そんなこと心配しなくていいから、たくさん食べて」

ユイは口許をほんの少し綻ばせてそう言った。憂いの面持ちで答えたように見えるのは果たして健吾の思い過ごしだろうか。

何だよ、いきなりお荷物になってるじゃん俺。

無力な自分だけれど、ならばせめてユイの憂いを取り払ってあげたい。せめて彼女を本当の笑顔にしてあげたい。場を和ませようと口をついて出た言葉は、

「ごめんな。うちの妹がバクバク食べるもんだから……」  
であった。

すまん妹よ。ユイの微笑みを取り戻す為に今一度お前の存在を頼らせてくれ。

「ほっほあー。ケン、どうやら君は命が惜しくないと見えるな」

明美は目を細めながら鼻で笑うと健吾の挑発に乗ってきた。

「ユイ、辞書みたいなのある？」

雷に打たれたかのようにビクツと全身を震わせる健吾。

しまったそう来たか！

英語事典から繰り出される惨たらしい殺劇の数々が、不動なる過去の経験則として胸中を巡る。軽い気持ちで振ったはいいが、流石にこれはやばいと焦る。額に変な汗が滲み出てきた。

「辞書？ 戦術指南書ならあるけど」

「あ、それでいいよ」



## 明けない夜明け（２）

「待てユイ早まるなつ。お前も知ってるだろう？ 明美に辞書を持たせたら危険だ」

健吾が危機迫る形相で説得に掛かるが、既にユイは戦術指南書なる分厚い書籍が数冊ほど重ねられたテント内の一角に人差し指を指し示した後だった。

「遅いつ」

「させるかあつ」

最終兵器妹の完成を全力で阻止するべく、最凶の武器をその手にしようと立ち上がる明美に向かって決死のダイブをぶちかます。

「きゃあ！ 離してよこのヘンタイ」

半ば押し倒す形になりつつ明美の両脚へしがみつки、健吾は懸命にこの暴君を抑え込む。

「それは出来ない相談だなつ。お前に辞書を持たせたら最後、ここは血染めの地獄と化す！ 俺には兄としてそれを未然に食い止める義務があるつ」

「吹っかけてきたのはそっちのくせにいい」

ほふく体勢で戦術指南書の小山へと強張る腕を伸ばす明美。それを、彼女の体を上から羽交い締めにした健吾がガツシリと妨げる。わーわーきゃっきゃと奇声を上げながら享樂を貪る兄妹の姿を眺めてユイは、控えめに抱腹すると声を漏らして笑った。

よしつ。我ながら上出来。

健吾がゆっくりと体の力を抜いていく。すると明美もユイの笑顔を確認、表情を緩ませながらパタリと動きを止めた。

明美、もしかしてお前もわざと……？

もしそうだとするなら全くナイスな妹である。防衛省まで駆けつけてくれた件と併せて、明美に対する認識を改めてやらんでもない。「楽しそうね二人とも」

楽しくないっ、とまるで照らし合わせたかのようなタイミングで健吾と明美が同時に反論の意を示す。さすがは兄妹、息もピッタリだ。

だが、ユイは美しい柳眉を微々と沈ませながら、やがてその微笑みを再び憂いの色に染めていく。健吾は目を疑った。

また。何で。

彼女の次のひと言が全てを物語る。

「家族っていいわね」

さらに付け加えられた言葉は、

「私には」

消え入りそうな程に小さく、か細く、健吾にその先を聴き取る事は叶わなかった。

意識に去来した問い掛け。

ユイに家族はいないのか？

言えるものか。

言えるはずがない。

不思議な直感があった。

それはユイの、胸の奥底に巣くう未だ見ぬ禁忌に触れてしまうような気がした。いや、触れるなどと生易しい比喻では許されず、繊細な彼女の心に土足で踏み入ることになるかもしれない。恐らく明美も同じ懸念を思惑したのだろう、口をつぐんで視線を遁走させている。

ユイは確かに強い女の子だ。一六歳という年齢がもつあらゆる常識と限界を、遥かに超越した意志の強さと覚悟の強さ。出逢ったときから肌に伝わってきた。まさに健吾の言葉を使うなら、それは自分たちとは理の質を決定的に違い、【蒼穹世界】のあるべき調律を打ち砕く「特別」という名の破調。この存在の強さこそユイだった。しかし健吾と明美は彼女と共有したこの一ヶ月余りの時間を通じ、その強さの向こうに隠された脆く儚い少女としての危うさを、僅かながらに感じ取れるようになっていた。

「ごめんなさい。何だか興を削いでしまったみたい」

「別にそんなんじゃない、」

「疲れたでしょ。今日はもう休みましようか」

健吾も明美も、それ以上は何も言えなかった。

ミノムシになっちゃった自分の身体を、もぞもぞと動かした。

ダークグレーに彩られた分厚い表皮をもつ大きな大きなミノムシだ。  
「んこ」

ミノムシを蠢めかせ、頭を出す。ゆっくりとその瞼を押し上げた。  
ようは寝袋である。空間を支配する冷暗な静寂の中、テント内の  
床にゴロリと不精に転がる二つの寝袋。その片方が消灯時に与えら  
れた健吾の臥所だ。

それにしても、疲れているはずなのに変な時間に目を覚ましてし  
まった。夜明けなどまだ遙か遠い彼方だろう。

掛けと敷きの隔たりが皆無に等しい二重の毛布が全身を抱擁し、  
素肌から蒸し上がる熱を外へ逃がさぬよう寝袋の内側に閉じ込める。  
健吾の軀幹には大量の汗霜が滲んでいた。就寝中の体温低下を防ぐ  
主旨ゆえの構造なのは承知しているが、大凡アウトドアに免疫のな  
い人間からしてみればこれはかなりの苦行だ。

うう、暑いのか寒いのかよく分かん。気持ち悪い。

兎にも角にもまずは汗を拭き取るべきだと思い立ち、いそいそと  
寝袋から這い出る。ミノムシが脱皮した。入り口の隙間から微かに  
射し込む幽玄な月明かりが空気中に薄青色のヴェールを掛け、目前  
を遊泳する塵と埃を緻密に煌めかせる。月明かりと塵埃のカーテン  
を通過し、歯ブラシやタオルの入ったナップサックが放ってある一  
画に向かおうとして 方向転換。

分かっている。覗き紛いな行為など褒められたものではない。し  
かし身の内から溢れ出るこの切望にはどうしても抗えなかった。

ひと目でいい、ユイの寝顔が見たい。

音を立てぬよう如何にもな差し足忍び足でそっともう一匹のミノ

ムシへ近寄って腰を落とす。

長い睫毛。

整った鼻筋

小さな口許。

そして透き通るような精白色の肌が、夜闇を纏わせて幻想的な麗貌を醸し出している。初めて視界に入れたユイの寝顔は、やはり年相応の幼さがあつた。警戒心も敵愾心も全く存在しない彼女の無垢で健やかな表情。

健吾は思わずふにやあ、と顔を情けなく綻ばせた。  
やっぱすげえ可愛い。

どんなに特別なことが出来たって、その前にユイは一人の女の子である。本来ならば、こんな表情をもつと見せてもいいはずだ。

“私は、確かに ジールヴェン でたくさん人を殺してきたけど”  
あの時の自分は頭に血が昇った状態で相手に気を回す余裕などこれっぽっちもなかった。今思い起こしてみれば、この言葉を発した瞬間の彼女の表情は痛々しいほどに辛辣しんらつだった。強く握り込んだ拳を小刻みに震わせ、苦虫を噛みしめるようにぐつと何かに耐えていた。

それは大きな罪の意識だったのだろうと漠然と悟る。

街中に出現した ミシア のパイロットが死んだ時も。

日本海の端で自衛隊ヘリが爆散し尊い命が消えた時も。

未知なる力を発現し リンドエア を撃墜した時も。

健吾たち兄妹を【暁世界】へ連れてきてしまった時も。

ずっと彼女は悔いていた。それでも自らを省みず、兄妹の安否をいつだって気にかけてくれる。この事実を思えば思うほど、健吾の中でユイに対する慈しみと愛おしさがさらに大きく膨らんでいった。一六歳の少女が背負うには重すぎる。自分にその荷を少しでも分けてはくれないだろうか。

自分が彼女の支えになつてあげたい。

ただひたすらに受け身を徹し、無償で与えられる愛情だけを求め、

自分からは決して誰も愛そうとはしなかった滑稽で我が儘な青年の、それは確かな心証の変化であつた。

それにしても。

今から遡ること五時間飛んで一二分と三七秒。

「寢袋がこれと予備のもうひとつしかない。窮屈だけれど、片方は何とかして二人で使うことになるわ」

「何だつて！」

「健吾。私と一緒に、いや？」

むしろ大歓迎です。　ジールヴェンのコックピットで身を寄せたあの感触を再び。

「ユイの躰、ぷにゅぷにゅしてとっても柔らかいよ」

「あうふ。そこはダメだつてばあ」

男の理性を揺さぶる甘い喘ぎを漏らした一六歳の少女が、躰を這う青年の指先に官能を覚えて妖艶な曲線をビクンと反らす。ひとつ寝袋の中で寄り添う健吾とユイ。

「声を上げると明美が起きちゃうだろ。でもホラ、風邪は引かないように、しないとな、んしょ」

窮屈な中で健吾は体をくねらせると、辿々しく不器用な手つきでユイの肢体に触れて彼女の造形を確認する。

「ひゃう。もう、健吾のえっち」

大きな瞳を涙で湿らせて、頬をもぎたての桃のように染め上げたユイが、健吾の軀幹に両腕を絡めてくる。思わず彼女の背筋に腕を回して強く抱き寄せた。

「あ……ん」

異性と躰を絡め合う至上の快感。正気を狂わす喜悦が鋭敏な電撃となつて全身を駆け巡り、あらゆる性感帯の感度を跳ね上げる。

「あつ……！　う」

「ユイい」

お互いの姿を潤んだ両の瞳に映す。やがて腕の中でユイは健吾の胸板に顔を埋め、恋人と共にある幸福を微笑みに讃えながら上目遣

いでこう囁くのだ。

「健吾の心臓の音が聴こえる。とくんとくん、て」

「か、可愛すぎるっ！ もう我慢出来ん。俺はお前が　っ」

脳が溶けてしまいそうなアホ妄想がいよいよ以てフルスロットルを掛けようかという時、憐れ健吾の意識はここでぶつ切りになった。いや正しくは“された”。鼻の穴を卑しく全開にした彼の顔面に、凶悪な殺傷兵器と化した戦術指南書の角がめり込んで来たからに他ならない。

「大丈夫だよユイ、あなたの貞操は私が必ず守ってみせるから」

「あ、ありがとう明美。言ってる意味がよく分からないけど……」

どうか軽蔑しないでほしい。脳内でユイのキャラがやたら違う事にも突っ込みを入れてはいけない。下手なエロマンガみたいな、好きな女の子との甘くていやらしい妄想とは男なら誰だってするものなのである。

妄想、もとい回想終了。

寝袋の中、愛しの姫君であるユイの背中にその身を預けているのは、何を隠そう只今絶賛爆睡中の我が妹だ。ねっとりとした手つきで右頬に残る生々しい流血の痕を撫で回しながら、健悟は明美の寝顔に羨望の眼差しを注ぐ。

何て羨ましいやつなんだ。

お互いの体温が熱を保つ為、彼女達の入った寝袋の毛布は一重に設えてある。僅かに空いた隙間からちらりと覗くユイの蠱惑的な鎖骨と、その先にあるほどよい膨らみに富んだ柔らかそうな胸元へ、健吾の視線は釘付けになった。そのとき、明美がユイの感触を堪能するかのようにその首筋に頬擦りを　、

「ん……ふ」

明美の行為に反応してユイが艶っぽい吐息を漏らした。

っ！

健吾は勢い勇んでユイの口元へ身を乗り出し、彼女の吐息を残さず自らの体内へ取り込もうとすーはーすーはー深呼吸。ああ彼女に

触れたい。

そんな健吾を尻目に、明美は人間湯たんぽにしたユイを背中からぎゅっと抱き締めると、それはそれは気持ちよさそうに身をよじって満足げな笑顔のまま快眠を貪っている。

見せつけかつ。生殺しかそうかつ。

これはおかしい。明らかにおかしい。こういうラブコメ路線のイベントでは、そこは本来主人公である自分のポジションではあるまいか。こうなったら願掛けだ。私めもユイの体に触れたいです、と切実な願いを込め、まるで盲目的な信仰者のように指を絡めて天を仰ぐ。誰か俺に主人公補正を下さい。

お断りです。

そんなお告げを聞いたような気がした。

切なくなつたので汗を拭いてテントを出る。明美の羨ましさとユイのエロさに悶え狂いそうな自分を夜風で冷まそう。とはいえ、それで風邪を引いてしまうのは望ましくない。手にした上着を恰幅に羽織る。それが就寝前までユイの着ていたシルクジャケットなのは、自分を冷遇した神への囁かな反抗のつもりだ。

柔らかくていい匂いが健吾の鼻腔を仄かにくすぐる。

くんくん。

「ユイの匂い」

女の子ってどうしてこう柔らかくて甘い香りがするのだろう。鼻の下を伸ばして顔をへにやりと崩す。

気温は低いが風は思ったほど強くなかった。ビスケットの屑みたに見える石の群小が無作為に敷かれた荒れ地を、ザクザク音を立てて踏みしめながら歩いて行く。殺風景という言葉すら今は豪奢じゅうしゃに感じられてしまうくらい、ここは砂と石以外に何も無い場所だ。

「戦争のせいなのか」

自然と洩れた自分のその言葉を受け、敵NFAの強襲により命を落とした昨日の記憶が、シナプスが結合し得る限りの鮮明な解像度とリアルな感覚を伴って全神経に再生される。頭上の爆発が空

気を侵して汚染する感触。押し倒され、視界を回転する天空。静と動の絶望的な差をこの身に叩きつける激震と激動。恐怖の迫間に顕現する巨大な力の胎動、青い光。

ほんの一瞬、体だけをここに残して心が時間を跳んだ。

「よく無事だったもんだよな、ホント」



### 明けない夜明け（3）

好きな女の子が自分を護ってくれた。男としては情けない話かもしれないが、健吾は気にしていないし、そんな余裕はなかった。

そして命を賭して戦ったのは、ユイだけではない　立ち止まる。「よっ、ジルハム。眠れないからちよつと付き合ってくれないか」

世界を彩るものは宵闇の髄へ溶け込み、枯渴の大地を青暗く塗りかえている。健吾の色を浸蝕せんと降りる夜の帷、その片鱗で、

ジールヴェンは揺るぎない存在の形を彼に示した。機体装甲の表面を張り巡る結露が、月明かりの袖を受けて淡く美しい燐光を放つ。

「あーあ。俺もお前みたいにユイから愛されたいよ」

苦笑と共に漏れ出た呟きは白い吐息となつて、微かに奔る夜風に浚さらわれていった。

ところで今さらな話だが、機体脚部の踝辺くるぶしりから缶詰めやら TENT やらが出て来るのを目の当たりにした時はさすがの健吾も頭に血が昇り、「夢を壊しやがつて……謝れつ。地球上にくすぶる一〇〇億の口ボ好きに謝れつ」と怒鳴りつけた。すると半眼の明美に、「いや人類の総人口、六〇憶だから。それに収納があつた方が何かと便利じゃん」と女性目線の建設的な意見を諭され、後から冷静に考えてみれば、なるほど機能のひとつとしてはそんな悪いものでもないなと思ひ直す。

新世界の開拓者として全人類から多大な羨望と賞賛を集める稀代の宇宙飛行士だって、ずんぐりむっくりオムツを穿いてスペースシヤトルに乗り込むのだ。戦闘メカに缶詰め TENT 入りの収納くらい充分目を瞑れるサブリミナルではないだろうか。自分が機械に強い超インドア派だという事実を差し引いても、NFA とは実に興味深いマシンだと思ふ。

「ジルハムよ……」

健吾は何時になく真剣な眼差しで、

「ところでNFAって何の略だ？」

割かしどうでもいいことを訊いた。

自慢じゃないが、自分はゲームの主人公名を入力する画面で二時間くらい延々と悩み抜けるほど件のネーミングには拘りがある。加えてロボットアニメが大好きなだから、これは気にするなと言う方が無理だった。

斯くして健吾は、何らかの頭文字を取った略称と思しきNFAの正式名称に考察を馳せる。ネオファイティンググアーマーか。ニユーフィジカルアクションか。ナチュラルファイナルアグレッシブか。

大変お気の毒なネーミングセンスだった。

「で、どれなんだジルハム」

まるでこの中から選べ、と言わんばかりの酷いこじつけである。

健吾が見据える ジールヴェン の頭部カメラは、人の双眸をモチーフに設計された光学式のデュアルアイセンサーだ。その瞳に宿った哀愁漂う藍染の光沢に、答えが返ってくるはずのない泰然な沈黙が重なり、「知るか。そんなのユイに訊けよ」というジルハムの無言の訴えのように思えて健吾は軽く吹き出した。

「ごめんごめん。機嫌悪くしないでくれ」

呼吸を整え、わざとらしく咳払いをすると改めて ジールヴェン と俯仰を構える。再びの真摯な眼差し。

「その、何だ、お前に言いたいのは本当はそんなことじゃなくて、えと」

呟いて健吾は ジールヴェン の機体を視線でなぞる。苛烈な戦闘機動を耐え抜いた脚部、迫る熱量を受け止め分散させた肩部、中枢たるコックピットを守護した胸部、パイロットの眼を担った頭部、度重なる白兵戦を支えた左腕部。

そして。未知なる力の集約と放出、強大なエネルギーの濁流を受けて先端が消滅した右腕部 可変機構が欠損し、マニピュレータ―は失われた。その姿はまさに戦場で片手を失った兵士である。我が君主への徹底的な忠誠と献身の先で、使命の完遂と引き換えに蒙

った代償。

「ごめんな、痛かったろ？」

まるでユイのような物言いが自身の口から零れ出たことに自分でも心底驚いた。気恥ずかしさから頬を掻く。それから健吾は、ジールヴェン に向かつてぺこりと頭を下げる。些か角度が物足りないが、不慣れな為そこはご容赦願いたい。形だけではない、本心からの謝礼をこうして体で表現したのは何年ぶりだろうか。

「ユイと一緒に、俺と明美を護ってくれてありがとう」

これは絶対に言わなくてはいけない、そう思った。

「お前がいなかったら俺たちは確実に死んだ。本当にありがとう」  
頭を上げる。

認めよう。

「ああ、お前は最高にカッコいい奴だよ」

ジルハムの動き回るアニメがあるならDVDは予約で全巻揃えろし、ジルハムを再現したフィギュアがあるなら喜んでこねくり回す、ジルハムの設定資料集があるならそれをおかずにご飯が三杯いけるだろう。

以前の自分ならば。

「でも」

現在<sup>いま</sup>はもう違う。健吾はそんなものより、もっと重大な感情を自分の中に見つけた。

「ユイを諦めた訳じゃないから。いつかあいつを俺に振り向かせてみせる」

グツと ジールヴェン に拳を突き出す。

「俺と勝負だ……！」

男の宣戦布告である。

もちろん返ってくる言葉はない。代わりに、周囲を一陣の風が吹き抜けた。肌寒さを感じて身を震わす。

「寒くなってきたな。俺もう戻るわ。付き合ってくれてさんきゅ」  
ジールヴェン の頭部カメラへにかつと笑いかけたあと、健吾は

踵を返した。砂と小石の重奏を乾いた空気に響かせながらテントに向かって歩いていく。

健吾は ジールヴェン のIDパスワードを知らないし、セキュリティシステムに生体データを登録している訳でもない。つまりはユイの存在なくして機体のコックピットに搭乗する術をもたないのである。

故に彼は知る由もなかった。

待機モードによる省電機能を従順に継続するモニター群の暗がり  
で        アビオニクスを掌握した    ジールヴェン    の人工知能が、  
集音機構と音声認識プログラムを起動し、ヘッドアップディスプレイに三節のある英文を表示させていた事実を。

No id : Flexibility Arms = NFA  
You are welcome .  
A competition !

「ねえ、そろそろ起きて健吾。七時間以上の睡眠は、将来的に脳細胞の死滅を早める結果になるわよ」

一日の始まりを告げる言葉にしては相当バイオレンスだが、寝起きは悪い方ではないらしい健吾は「ふまあ」とか言いながらミノムシ化した自らの身をよじり、目脂でカチカチの瞳をパチパチさせた。  
「おおはあよお」

「おはよう。外にペットボトルの水を用意してあるから、顔を洗ってきて」

「あい」

「あまり水を使い過ぎないで。飲む分には構わないけど」

「うい」

「あと、私のジャケット触ったでしょ」

「うい    えっ！」

さり気なく耳に飛び込んできた不意打ちの一言に目が冴えたのだ

ろう。健吾は裏返った声を上げて狼狽した。

「昨日私が記憶してるのと位置が少し変わってる」

「んつと、それはその、うう」

ジャケットに触れた理由を必死に搾り出そうとしているのか下唇を噛み締めながら唸る彼を、ユイは少し慌てて制する。

「ああ、いいの。別に責めてる訳じゃないの。そういう意味じゃないから。ただ」

「ただ？」

教師から叱られた小学生のような表情で首をもたげて聞き返してくる健吾に、優しく言葉を返す。

「ううん、やっぱり何でもないわ。気にしないで」

彼を無駄に不安がらせて自分は一体どうしようというのか。「そういう周囲の些細な変化に気づけないと、これから先は生き残っていけないかもしれない」ユイは喉まで出掛かったこの言葉を飲み込んだ。

「ふう。サッパリした」

「ケン水使い過ぎ」

「何言ってるんだよ、ちゃんと節約してただろ」

「あれのどこがっ。男ってほんつと雑、信じらんない」

食料庫に見立てた一画で缶詰めの小山を物色していたら、洗顔を終えた健吾と明美がーだこーだいつもの言い争いをしながらテントの入り口をくぐって来た。

「おかえり。昼食はもう食べる？ 見ての通りこういうのしかないけど」

その台詞のどこかに激しい違和感を覚えたらしい健吾が一瞬怪訝な顔をするも、すぐに表情を戻して何気なく話しかけてくる。

「でもあれだよ。実は俺、昨日二度寝した筈なのにこんな早い時間に起きれるなんて驚いた」

「それ私も思った！ 昨日はすっごい疲れたから今日は夕方くらいまで起きれないかと思ってたよ」

健吾に同意を示すように明美も興奮気味にそう言い添えた。

「どうやら土曜深夜アニメから日曜早朝アニメへのスムーズなシフトを目論んで編み出した秘技、『遅寝早起き二度寝シーケンス』が更なる高みへ昇華したようだな。ふふ、自分の才能が恐ろしい」

「何その日常生活に全力で必要ない秘技。別に表へ出さなくていいから。ずっと秘めてていいから。てかただの不規則でしょそれ……。私の場合は、部活の朝練に励んだ賜物かなあ」

そんな二人のやり取りを、ユイは苦笑という意味とはまた少し違う、困っているような、笑っているような、大変に複雑な表情を<sup>こじら</sup>せて眺めた。

「ん、何？」

俺の顔に何かついてるか的なニュアンスの口調で問いかけてくる健吾に、

「今の時刻は一四時を回ったところ。お昼はもうとつくに過ぎてるの」

ユイは恭しげに言葉を発した。幼い子供の間違いを正し、真実を諭す優しい母親のように。

健吾と明美は、

「……………」

さっと押し黙る。そして何かを思い出したように二人仲良く回れ右をし、スタコラとテントを出て行った。

待つこと数十秒、

ドタバタと凄い勢いでテントへ駆け戻って来た健吾と明美は、外を指差しながら開口一番、声を揃えてこう叫ぶ。

「空がっ、空が青くない！」

【蒼穹世界】に渡って初めての朝に自分も同じようなことをやっていた事実を華麗に棚に上げ、ユイはクスッと微笑んだ。

「そうね。青くないわ」

「本当にお昼過ぎてるの？ 今」

明美の呟きにそっと首肯すると二人の間を通り過ぎ、テントの入

り口前で立ち止まって小さく手招きをする。

「あなたたちに話さなければいけないことがたくさんあるの。この世界について、私が知っている事実をこれから話すわ。外で。できれば空の下で聞いて」

健吾と明美は確かめ合うかのように少しのあいだお互いを見つめ、それから再びユイへ視線を戻すと、ゆっくりと頷いた。

青はない。

淡い黄金が支配する黎明。

青はない。

地平線上を光塵が躍る東雲。

青はない。

大気の明暗が交わる誰彼時。

青はない。

世界を敢然と謳歌する曙光。

空は暁。ユイと、健吾と、明美と、  
雄大な黄金<sup>こがね</sup>。      ジールヴェン      を見下ろす

「【暁世界】へようこそ」

比喩や形容ではない。ユイの言葉はこの世界を代弁する。

【暁世界】へ、ようこそ。

## もつひとつの朝（１）

メファーナの胸を締め付ける黒い鎖は、強靱さを緩める気配など一切ない。苦しみから解放されるには一体どうすればいいのだろう。考えれば考えるほど、小さなケージに囲われた箱庭を右往左往するノイローゼのモルモットのように、この苦痛が出口のない心の檻なのだという事実<sup>じじつ</sup>に絶望した。

苦しい。

ここから抜け出したい。

このひと月で何十回、何百回と擦り重ねてきた後悔と哀しみが、悪夢の如き世界が夢ではない現実をメファーナに糾弾する。だから、望んでしまう。こんな世界を生きていくくらいなら、いつそ朝など来なければいいと。

意識の端で音が蘇る。規則的で色気のない二拍子の電子音。徐々に間隔を詰め、やがてそれが耳障りな機械仕掛けの叫喚へ成り変わった時、蘇ったのは音ではなく意識の方なのだと気づく。

力を入れる。脳が起きているのに体が眠っている状態を「金縛り」だとする説があるが、どうやら脳からの命令は無事に右腕へ伝わったようだ。伸ばす手の指先が枕許を探り、ひんやりとした機械の虫を捕らえるとその腹を搔いて五月蠅い<sup>ひづり</sup>鳴き声を黙らせた。

視界に光が溢れる。瞳が光量を調整し、ぼやけた視界を練成する。灰色の低い天井が圧迫感を煽るが、そんなものはとくに慣れっこだ。腰を曲げて体を起こす。体が、重い。神経が完全な覚醒を遂げていないせいも無論ある。しかしメファーナにとって、この「重さ」には拭いようのない苦しみが込められていた。

「朝が、来ちゃいました」



などと離<sup>はや</sup>し立ててはみるものの、これが例えば不治の病による余命幾許かの朝だとか、あるいは決して揺るぐことなき死刑執行日の朝だとか、はたまた神の予言に約束された世界終焉の朝だとか、そういう訳では特<sup>とく</sup>にない。

ここは二段ベッドの下段。上段の底である天井に頭をぶつけないよう気を払いながら寢台を降りる。寝起きでふらつくのか危なっかしい足取りでベッドの向かえに佇む簡素なデスクまで辿り着くと、その上に置かれた薄い銀縁眼鏡を手にとった。

メファアーナの美しく澄んだ碧眼を、眼鏡のレンズが覆う。視界が更に洗練されて景色を本来あるべき姿に映し出す。先程まで視認出来なかったデスクの上の、香水の小瓶に塗装されたラベルの配色や、アクセサリーボックスに印字されたメーカー名や、ドックタグに降り積もった細かい埃が、当たり前のように浮き彫りになった。

さらに注意深く観察すると、この状況なら机上にあつて然るべきものがひとつ欠けている。眼鏡ケースだ。

メファアーナはよくものを失す。

極度な天然という訳ではないにしろ、これを可愛い個性なのだと許せるほどメファアーナも自分に甘くはない。

昨日は下ろしたばかりの靴下を片っぱし失し、一昨日は愛用していたシャープペンを失し、一週間前はお気に入りのリップクリームを失し、二週間前は一三九ドルと二五三六円の入った財布を失し、

一ヶ月前は、大切な友人をひとり失した。

振り返る。二段ベッドの上段は、シーツも枕も毛布もなく、申し訳程度の薄皮を被ったスプリングが朝の冷気に晒されている。

苦い過去とは精神に穿たれた窪みだ。いけないと分かっている、つい覗きこんで底の深さを確かめようとしてしまう。すると心ごと窪みへ引つ張り込まれ、そこから抜け出せなくなる。

体が、重い。

メファアーナは生まれてからの一七年間、失したものをその手に取り戻したことが一度としてない。

気怠い身をベッドに乗り出し、放られていた機械の虫 携帯端

末を取り上げると目前に翳<sup>かざ</sup>す。表示されているのは、6:08。

「やっぱり、朝ですよ」

幾ら確かめてみても、それは疑いようのない、一日の始まりだった。

きりしましぐれ

桐島時雨は艦のキャプテンだ。彼の存在をひとことで表すなら、

ずばり「変な人」である。いや、もはや縮めて「変人」でいい。

「おお。おはよう、メファ」

「おはようございますキャプテン」

馬鹿と天才は紙一重、とはよく云ったもの。時雨は割り箸を如何に美しく割るかという儀式において、己の全身全霊を賭けているのだと豪語する。

よって、ここ食堂に朝食を摂るべく集結した艦のクルー達が一斉にスプーンと皿底の演奏を弾き始める中、彼ひとりだけ割り箸を睨みつけたまま「ふぬぬはうあ」と意味の分からないテンションで唸り声を上げているこの奇妙なシチュエーションに対して、メファーナはこれといって訝しむ様子を見せない。

ただ内心、彼の隣しか席が空いていなかった事に対して嘆息はしているが。

パッチン。

「ひゃっほーい！ 見てくれみんなっ」

興奮気味に立ち上がった時雨が見事に割れた箸を頭よりも高く掲げ、初めて鉄棒の逆上がりで成功した少年のようなオーラを周囲に振りまいた。

「この美しい割り筋、まさにアートだと思わなかつ。そして迷いの感じられないこの肌触りっ。全てはライトとレフトのフォーエバーグッバイが可能にする奇跡の神技！」

食堂に響いていた演奏が止まり、様々な視線が自分の隣に集まってきた。

流れる沈黙。

メフアーナには分かる。

オペレーター、きくおかあいこ菊岡愛子は視線でこう訴えている。

「いい加減にしてよ、ウザいんだけど」

兵器管理主任、みやのたかし宮野隆は視線でこう訴えている。

「うわ、また始まった。視線逸らさないと」

パイロット、くらきかつのり倉木克典は視線でこう訴えている。

「あんた今年で三四だろ。少しは艦長らしくしろ」

操舵手、まえかわしの前川志乃は視線でこう訴えている。

「この人、黙つてればいい男なのに……」

機関士、くろいけいたろう黒井慶太郎は視線でこう訴えている。

「いっぺん炉心に叩き込んだるかこいつ」

料理長、さかしろみのる坂城稔は視線でこう訴えている。

「そんなことより食え、早く食え、料理が冷める」

……。

「あ、すまん。食事を続けてくれ」

咄嗟に空気を読んだ時雨が、残念そうな表情を作つてこの沈黙を破つた。

スプーンと皿底の演奏が再開される中、彼はしょんぼり椅子に腰を下ろす。何ともシニールな情景である。落ち込む彼の姿を盗み見て少し気の毒だな、と思つた。

確かに時雨の割り箸熱はありがた迷惑 いや、はっきり言つて迷惑だ。しかし彼の底抜けた明るさには何故か憎みきれないものがある。

大切なものを失つたのは自分だけではない。戦争で疲弊した精神は肉体を蝕んでいき、やがて自分が自分で無くなってしまう。その先に待っているのは死だ。生と死が限りなく等しい領域に同居する戦場で、自我を維持し続けなければならないという行為には、想像を絶する程の苦痛が伴う。一瞬でいい。その苦痛を一瞬だけでも忘れることが出来る「何か」がなければ、この世界では生きていけない

い。

もしかすると時雨は、艦のキャプテンとして自分こそがこの「何か」を担わなければ、と考えているのではないだろうか。何とないやりのあるリーダーなんだ、と先程とは別の意味でメファアーナは嘆息する。

「メファ」

「は、はい……？」

気がついたら時雨と目が合っていた。浅黒く男勝りな彼の肌は、白い壁に囲まれたこの食堂では妙に浮いて見える。

じーっと視線を逸らさない。これは流石に緊張する。

刈り上げられた短髪が彫りの深い顔になかなか栄える時雨。そんな彼は周りに聞こえないようポリウムを絞った声で、

「この割筋、どう思う？ 近年でも稀に見る傑作だと自負してるんだが」

握った割り箸を提示して訊ねてきた。顔にさあ褒めてくれと書いてある。どうしよう。お箸の割り筋の良し悪しなど検討もつかないきつと深く考えたら負けなんだと思い、努めて明るい笑顔を讃えてこう言った。

「良いんじゃないでしょうか。綺麗に割れたんなら気持ちいいです」

そうかそうか、分かってくれるか、やっぱりメファアはいい子だなあ。だらしのない笑みを浮かべながら割り箸でコーンスープを掬すくうという猛者ぶりを発揮する時雨を眺め、メファアーナはさっきの感心を静かに撤回した。

フランチ・リールズは艦に所属するパイロットのひとりだ。彼の存在をひとことで表すなら、ずばり「クールガイ」である。

リフレッシュルームへと続く廊下の途中で、涙を溜めて走り去る女性士官とすれ違う瞬間、メファアーナはこの先にいる彼の存在を察知した。

「フランチ、おはようございます。今日も朝ごはん食べないんですか？」

「おはよう。食べないよ、朝は」

朝食を抜くのは衛生上良くないことだと思う。だが他人のライフサイクルに意見を挿めるほどの人徳は生憎と持ち合わせていない。それに好奇心はやっぱり違うところへ向かう。

フリードリンクのボタンを二三選択し、落ちてきた紙コップに注がれるメロンソーダを透明のプレート越しに観察しながら隣に声を掛ける。

「さっきの女の人……」

「ああ。そうだよ」

言い終える前に答えが返ってきた。何を訊かれるのか重々承知していたらしい。それならば、とメファーナは若干語調を強めてこう続ける。

「また断ったんですか？」

「当然。というか今そんな余裕ないし」

フランチは驚異的にモテル。時雨もそれなりに男前の部類に入るのだが、ひとたびフランチが舞台上に上がればそれなりなんて端役はすぐに霞んでいってしまう。

流麗な眉と均整のとれた目、筋の通った鼻立ち、形の絞まった口許。それぞれのパーツが絶妙なバランスを成す美しい顔の造形に加え、身長も自分より一〇センチ以上高い。もし戦争が始まらずにハリウッド映画が現在も製作され続けていたとしたら、彼は一躍スターダムに登り詰めることが出来た逸材ではないかとメファーナは勝手に思い込んでいる。

メロンソーダを注ぎ終えた紙コップを受け取る。そのままフランチが寄りかかっている壁の、向かいに設えられたソファアに座った。背もたれがないのでちよつと不便だがメロンソーダがあれば気にならない。

上目遣いに正面を窺う。女性の心を惹き付ける、垂れ具合が特徴

的なライトグリーンの甘い瞳　メロンソーダの色に少し似てなくもないと思う　が宙を仰ぎ、フランツは言い訳のようにこう呟く。「明日はもうこの世にいないかもしれないのに、恋愛なんて何の意味があるのさ」

それはきつと逆なんだと思います。

メロンソーダをちびちび喉に流し込みながら心の中で反論してみたものの、声には出さなかった。真偽のほどは定かでないが「フランツの恋人は戦争で死んだ」という話を人伝に聞いたことがある。真実を知りたくないと言えは嘘になる。でも彼の胸に刻まれているかもしれない心の傷に塩を刷り込むような真似をしてまで、それを確かめるつもりはない。

フランツがアッシュブロンドの長髪を掻き上げた。そんな仕草を見てメファーナは、肩から下がる自分の髪の端にそつと触れてみる。金色をしたこの髪の毛は、クルーの大半を日系人が占めるこの艦ではやはり異質なのか。主観だが人目を引いているような気配がある。逆にこうしてフランツと一緒にいる自分に何となく落ち着きを感じるのは、彼が同じ欧米の出身だという事実が理由のひとつだろう。ひとつ……。ならば他の理由は？　と訊かれたら、メファーナは迷うことなくこう答える。「彼は私の命を預けるに足る、極めて優秀な兵士だからです」と。

フランツとの関係について、若い女性のクルーたちが根掘り葉掘り自分に探りを入れてくることがよくある。ときには好奇心に満ちるキラキラした瞳で。ときには嫉妬心に満ちるギラギラした瞳で。彼女たちから見れば、今のよう一緒にいるメファーナとフランツの姿は確かに仲のいい男女に映るのかもしれない。

だが誓って言おう。少なくとも現時点において、フランツに対して恋愛感情とされる類のときめきを、自分の胸中に見つけることは出来ない。

フランツに対してかなり失礼なことを言っているが、それは彼にとってもきつと同じことだ。この瞬間だって、自分が日課にしてい

る食後のメロソードと、彼が日課にしている朝のナルシズムタイムが、リフレッシュルームという場所でたまたま重なったに過ぎない。

## もうひとつの朝（２）

彼と自分との間に他人以上の絆があるとするならば、それはやはり友情だ。戦友という名の友情。

戦友。

ひと月前に失ってしまった友人もまた、戦友だった。

ジャラジャラと音を立て、黒い鎖がメファーナの胸を締め付ける。思考が濁り視界の焦点を揺らす。体が、重い。

苦しい。

振り払いたい。

とにかく何かに焦点を合わせたくて手元の紙コップを覗く。沈んでいく心に反して炭酸が泡を吹いて昇ってくる。大好きな食後のメロンソーダが、敵に回ってしまったかのような錯覚に陥って顔を歪めた。

「忘れるよ。あいつのことはさ」

頭に降ってきたフランスの言葉にハツとなって顔を上げる。憤りを感じて今度こそ反論を返そうと口を開き、

「忘れるなんてそんな言い方っ」

「

「あいつの意志だったんだろ」

すぐに遮られた。

「どんなに引きずったって、どうせ戻ってこないんだ」

彼の言っていることは正しいのだろう。頭では理解できても、心が事実の承諾を拒絶している。

「いい加減、楽になれメファ」

ライトグリーンの瞳が僅かに揺れていた。それが無愛想なフランスの、滅多に見せることのない含みなき「優しさ」や「気遣い」の具現である、果たしてこの艦にいる何人の人間が気づけるだろうか。彼が厳しい現実を突き付けて自分を苦しめている訳ではないことくらい分かっている。反論を出し切れず、捌け口を失った悲哀の



熱が喉元に渦巻く。

これ以上心配をかけてはいけない。悲哀の熱を、残ったメロニーダと一緒に飲み下した。

リプリーは艦に所属するチーフメカニックだ。彼の存在をひとことと表すなら、ずばり「人間ではない」である。

この「人間ではない」とは、決して中傷を含んだ揶揄ではない。正にそれは彼の人間離れた高い整備技能を暗喩するもの……のだが、それも飽くまで一重。

何しろリプリーは本当の意味で、真正正銘、「人間ではない」のである。

ペタペタというスリッパの音が近づいてくる。艦内の整備ハンガーに繋がる巨大なエレベーターの扉の前で、メファーナは音のする方へ振り向く。

「メファ嬢。おはようござんす」

愛用のスリッパを鳴らしながら隣に並んだリプリーが、頭部の複眼を明滅させるとコンピューター声帯らしからぬ流暢な合成音声でそう発した。

「おはようございます。リプリーチーフ」

アンドロイド　　というにはそのシルエットはコミカル過ぎた。

アンテナの延びた丸い頭が乗った立方体形の胴体、そこから長い手と短い足が生えている。腰部はないがもちろんそのことに突っ込みを入れてはいけない。

「昨晚はよく眠れましたか？」

「うむ。こう見えて小生、寝つきはいい方なのだ」

こう見えて？　メファーナは傍らに立つ自分よりも背の低いリプリーを俯瞰する。

如何にも「ぼくロボです」な体型と風貌から相応の無機質さを感じないのは、彼自慢のファッションが外見印象に大きな影響を与えているからだろうか。

入力端子や外部端末が剥き出しになった胴体を覆っているのは、エキゾチックなウェーブ模様のアロハシャツ。胸ポケットには丁寧にサングラスが引っかけられている。

表面に微細なセンサーが張り巡らされた長い腕、こちら側から見える右の手首にはピンクの糸で「WORLD WIDE LOVE」と刺繍された白いリストバンドが。

ペンギンかよ、な短い両脚の行き着く先にはスリッパ。そうスリッパだ。足の甲に張り付いた、漫画みたいなウサギの譚える笑顔が何ともニクらしい。

全く困った話だが、リプリーはロボットのくせしてロボット扱いされることに心穏やかではない。何も完璧な人間扱いをしるなどと贅沢は言っていない。せめて一個の人格として、一個の生命として自分をみてほしい。そう願ってやまないのだと彼は訴える。

艦に着任して間もない頃、そんなこととはつゆ知らないメファーナは、これから世話になる彼に囁かな贈り物をとガソリン燃料を渡そうとして「こんなこつてりしたもん飲めるかつ！」とスリッパで頭をはたかれた。乾いた痛撃をさすりながら、あれは彼への侮辱だったのか、稚拙な先入観に駆られ自分は何と愚かしい真似をしてしまったんだろうと強い罪の意識に苛まれる。

しかしその日の夜。照明が落とされた人気のない整備デッキの片隅で、何かをすすするような音を立てる小さな背中を発見。心配になって声をかけたところ、尋常ならざる拳動で振り返ったアロハシャツが「いやっ、コレはあの、小生は決して、つまりはそのっ、」とココナッツオイルの入った中瓶を抱えて裏声を上げる姿を見たときの衝撃は、今でも忘れられない。

回想に浸っていると、リプリーのアンテナが突然に伸び上がり、その半分から先がぐるんと回ってパラボラと化す。そしてピコピコ点滅する両目。たぶん整備デッキのメカニクたち 彼の手前あまり大きな声では言えないが、向こうは人間である と通信しているのだと思う。

こんな短距離でパラボラアンテナって……と突っ込みを入れたくて心の底がムズムズしてきたメファアーナに再びリプリー、

「とこんでメファ嬢はマシンの具合を見に来たのかいね？」

「えと、はい。そのつもりでしたが、ひょっとして今はお邪魔でしょうか？」

「うむむのむ。邪魔という訳ではないなコレが。しかしながらいま小生の忠実な部下達と交信を行ったところ、先程ちょうどインターフェイス周りの最終チェックに入ったと報告を受けたのですたいコレが。」

いや決して、お嬢が邪魔だなんてことは、ないないのしないでござーすが……」

リプリー節は語調がトリッキー過ぎて時々ついていけなくなるものの、彼の言わんとしていることは何となく汲み取れた。

現在のところ仕上げの整備工程が進行中で、自分が近くに寄ると差し支えがあるということだろう。システムの微調整くらいなら手伝える自信は勿論ある。しかしコックピットの広さには限りがあるし、作業効率と正確さを優先するならプロフェッショナルに任せた方がよいとの判断は自明の理。

リプリーは如何にメファアーナの気分を害さずしてそれを伝えようと頑張ってくれているのだ。下手をすると、この艦のどの男達よりも紳士な彼の態度に思わず表情が緩んでしまう。

初対面でスリッパかましておいて今さら紳士も何もない気もしないではないが、チーフはそれを補って余りある大きな優しさをもつたいい「人」だなあとメファアーナは感じた。

「そんなに気を使ってくれなくても大丈夫です。少し様子を見ようかなと思っただけで、重要なものではないですよ」

他にも用事がありますから、と言い繕ってその場を後にする。別に嘘ではなかったが、「遠くから眺めるくらいなら全然オツケーなんだけれどおー？」とか申し訳なさそうな声を掛けてくるアロハシヤツが、到着したエレベーターの扉に隠れて見えなくなるまで何と

なく後ろ髪引かれる思いをしたのも確かだった。

佐原智世さばらともよは艦に所属する遺伝子学者兼物理学者兼医療責任者だ。

彼女の存在をひとことで表すなら、

メフアーナは智世をひとことで表す事が出来なかった。

「変な子ね。そんなところに突っ立ってないで中に入りなさいメフアーナ」

母親なのに。

「はい」

瞳の色も。髪の色も。血筋も。胸に秘めた思いも。眼鏡を掛けているという共通点以外の何もかもが自分と違う智世を、メフアーナは憧憬と畏敬の念を以て心から愛している。

智世の存在を「母」と淀みなく言い表せなかったのは、彼女にその資質の有無を問うたからではない。自分にこそ彼女の娘と誇れるだけの資格があるだろうか、そう自身を疑ったのだ。

身を預けた椅子を回転させ、智世がこちらに向き直る。彼女は漆黒の瞳を瞑ると、左手で眼鏡を押し上げ、右手の親指と中指で両の目頭を軽く揉む。疲れているのだろう。

先程まで体を向けていたデスクには、びっしりと文字が詰め込まれて余白の見えない論文が散乱していた。耳を澄ませば微かに聞こえる静謐せいひつな機械音。脇に設置されたパソコンの薄型ディスプレイは、メフアーナの知識域を遙かに超えた極めて難解な数語式を綴っている。

智世の役職は前述の通り、遺伝子学者兼、物理学者兼、医療責任者である。一見、二つの「学者」という肩書きは、「医療責任者」という本位に対する付属品のように思える。しかし真実は全くの逆だ。「医療責任者」という肩書きこそ、本位である「学者」が艦内に居座ることの整合性を保つ建て前に過ぎない。

その証拠に、智世は医療チームの長であるにも関わらずちっとも白衣は着ないし、あろうことかこれっぽっちも医務室に顔を出さな

い。最近はこの自室に籠もって、何かの研究や調査に躍起になっている。

食堂にも来なかったので朝食もここで摂ったのだろう。デスクの上をもう一度よく確認すると、論文の下敷きとなった軽食用トレイの円い角つこが紙束の影からちらりと覗いている。

これほどまで私生活を犠牲にして研究に没頭する彼女の姿は、本当に格好いいと思う。まさに「学者」の鑑だ。

だが当然のことながら、既に実戦配備のなされた戦闘艇に「学者」が乗艦しているという事実はとても奇妙なもの。けれど自分は知っていた。彼女がここにいる本当の理由を。

智世は、メファーナがひと月前に失ってしまった大切な友人

「あの子」の為にこの艦に乗っている。

よく知っている。「あの子」はとても特別な女の子で、メファーナが出来ないことを何だつてやってみせた。自分より一歳年下ののにすごく強くて頼り甲斐があつて、今でも智世と同じくらい懂れている。

そんな「あの子」に対して、智世は「医療責任者」ではなく「学者」という本位を駆使して熱心に接していた。娘としての自信が持てないが故に、自分よりも多くの時間を智世と共有していたはずの「あの子」に嫉妬の感情を抱いたことはない。

ただ気になることはあつた。「学者」という立場とはいえ、あれほど気にかけていた「あの子」がいなくなってしまったというのに、目立った動揺もないまま平然と過ごしているひと月前からの智世。メファーナは大きな戸惑いを覚える。

智世は「あの子」のことを本当はどう思っていたのだろう。そして私の事はどう思っているのだろう。娘として、見てくれているだろうか。衝動的な感情が突き上げてくる。

母さん。どうしてお気に入りの優秀な「あの子」じゃなくて、戦災孤児で駄目な私なんかを養女にしたんですか？

唇が微かに震えていた。答えを訊くのが恐い。メファーナの苦渋

を違う意味に捉えたのか、智世は小さくかぶりを振り「やれやれ」と呆れ顔を作ってこう問いかけてくる。

「また何か失したのかしら？」

その言葉が胸を打つ。これで恐い思いをしなくて済んだという安心と、真実を知る機会をまた逃してしまったという焦燥が、心中を蠢いて迷走する。でもこのまま黙っているのだけは駄目だ、何か言葉返さなくては。

「……め、眼鏡ケースを、失してしまっただけです」

辛うじて発した言葉が、何とか会話に矛盾を発生させることのないものだった幸運に胸を撫で下ろす。もはやこの瞬間に真実を知る機会がないのなら、余計な不安を気取られるのは嫌だった。それにこうして彼女の部屋を訪れた理由は、まさしく眼鏡ケースに他ならない。ようやくそのことを思い出して気持ちを落ち着かせる。と同時に、失しものをしてやっぱり迷惑をかけているじゃないですかどうしよう、とビビリ直す。

そんな感じでひとしきりあわわしていたら、智世がデスクの引き出しからスペアの眼鏡ケースを掴み取って立ち上がった。手を伸ばしてそれをメファーナへ差し出す。

「はいこれ。今度は失さないように」

### もっひとつの朝（3）

慌てて歩み寄って、両手で包み込むように眼鏡ケースを受け取る。それから上目遣いに智世の表情を窺ってみた。すると自由になった彼女の手の平が顔面に迫ってきて。

えっ、と頬を朱に染めるも、それは肌に触れることなくメファーナの掛けている眼鏡に辿り着く。指先がスツとフレームを伝う。

「いい？　今回はケースだけで済んだけど、本体はくれぐれも失さないように気をつけて。あなたの眼鏡は、特別なんだから。すぐにスペアは効かない大切なものよ」

「ごめんなさい。気をつけます」

安心して母さん。眼鏡はもう、大丈夫です。貴女が大切だとそうはつきり声に出したものを、私は決して失さないから。

「少しシャワーを浴びてくるわ。この部屋の片付けをお願い出来るかしら」

「任せて下さい」

思わず笑みがこぼれた。智世からお願いをされると胸が躍る。嬉しさに溺れそうになる心を引き締め、言葉を付け加える。

「ごゆっくりどうぞです」

「ゆっくり、ね。そう出来るといいけど」

智世が皮肉の籠った口調で言った。彼女は紛れもない非戦闘員だが、いつスクランブルが掛かるか予測出来ないこの艦の現状をよく理解していた。さすがにこればかりはメファーナにもフォロー出来ない。

「そんな悄<sup>し</sup>げな顔しないの。あなたを責<sup>し</sup>めている訳ではないのよメファ」

智世はそう言い添えながら隣を横切って部屋の扉へ向かう。外側にカールして跳ねる彼女の栗毛の髪が、メファーナの耳朵を掠めた。左からスライドしてきた扉が、部屋の出入り口を静かに閉ざす。パ

ソコンの微かな機械音だけが後に残された。

寂しい。

だが仕事を仰せつかったばかりである。ぼさつと突っ立っている訳にはいかない。ズボンのポケットをほじくり回して、中から小さな赤いリボンを取り出す。

自分の金髪を大雑把にかきあげて指で適当に解いた後、髪 of 右側へ纏めて赤いリボンで結わく。これが本来のヘアースタイルである。一度だけ智世を真似てドライヤーでカールをつけようとして、髪質が合わないのかどえらいことになった。

「ふう」

見渡す部屋は、そのときの髪型みたいにどえらいことになっている。足の踏み場を犠牲にして敷き詰められた資料やメディア。積み重ねられたファイルの束がベッドにまで及んでいた。今からこれらを綺麗に整理しなくてはいけない。智世がシャワーを浴び終えて戻ってくるまで。

でもその前にやっておかねばならない儀式がある。

今度はズボンのお尻のポケットに手を入れ、中から小さなメモ帳を取り出す。月に一度、物資の補給と共に艦にやってくる行商人から、日本円の一一〇円で購入したもので、安っぽい再生紙を纏めただけの簡素な品だ。

ページをひとつひとつ、丁寧にめくっていく。

そこには、デスク上に散乱している智世の論文に負けなくらいびつしりと、辛うじて読める下手くそな日本語で書き込まれた、数万字にも及ぶ単語の海があった。

「ちよつと借りますね」

小声で呟き、デスクに転がっていたボールペンを遠慮がちに拝借そして単語の海が浮かぶメモ帳の、僅かに残されたページに、メフアーナは辛うじて読める下手くそな日本語で新たにこう書き加える。  
私の眼鏡。

智世は何故、よくものを失ってしまうメフアーナに、大切な研究



資材やデータが保管されているはずのこの部屋を任せていられるのか。それは、メファアーナが智世の大切なものを今までに一度として失ったことがないからだ。逆に智世が見失っていたものの在処あつかを一瞬で言い当てたこともある。

誇れるとまではいかないが、これが自分の唯一の自慢だった。智世が「大切」だと口にしたり、あるいはそう考えているとメファアーナが判断したものの名前を、全て紙に書きとめておくという、律儀で気の遠くなるようなメモ帳。

そして自分以外にこのメモ帳の存在を知る者は、“もう”どこにもいない。ただ一人だけメモのことを知っていた「あの子」は、笑ってよくこう言った。

「それは魔法のメモ帳ね。メファの持ち物だって、そこに書いておけば失さなくなるかもしれないよ」

技得たりと喜んで試してみたけれど駄目だった。自分のものはどうしたって失ってしまう。不思議だがこのメモは、智世のものでなければ魔法の効果を発揮することは出来ないのだ。ならば智世が大切にしていた「あの子」の名前を、この魔法のメモ帳に書けば失してしまうことはなかったのだろうか。

ジャラジャラと音を立て、黒い鎖がメファアーナの胸を締め付ける。体が、重い。振り払いたいのに叶わない。

苦しくなる胸が、思い至りたくなどなかった負の予感を絞り出す。ずっと「あの子」の為に艦に乗っていた智世は、「あの子」がいなくなった今、そのうちメファアーナを置いてこの場所から去って行ってしまうかもしれない……。

黒い鎖の輪がさらに太く、強靱になって締め上げてくる。また大切な人を失ってしまう。

腹の底が凍り付くような冷たい恐怖に自意識を侵され、ほとんど朦朧とした状態のまま、小刻みに震える利き手で魔法のメモ帳に智世の名前を書き込もうとした刹那。携帯端末のアラームとは比較にならないほど遙かに耳障りな艦内の緊急戦備警報が、両の鼓膜を

激しく振るわせた。

ハッと我に返ってボールペンをデスクに放り戻し、魔法のメモ帳をお尻のポケットにねじ込む。

慌ててシャワーのスイッチを切りながら舌打ちを鳴らす智世の姿が脳裏を過ぎる。どうか母が風邪を引きませんようにと祈りつつ、メファーナは部屋を飛び出した。

## 最前線（１）

戦争による技術革新。

ミサイル兵器の技術が、宇宙ロケットに搭載する推進機構へ転用された。核兵器の技術が、都市発電プログラムの中枢に組み込まれた。バイオ兵器の技術が、医療システムの次代を担った。

革新は止まらない。

### 【ブレン変移炉】

ナノテクノロジーの究極的な進化が到達した素粒子操作は、全く新しい動力資源をこの世に産み落とす。これによって人類の文明レベルは想像を遥かに超えた速度で成長し、世界は栄華の絶頂を垣間見る。

しかし【ブレン変移炉】は地球という星の本来あるべき姿に暗い影を落とす諸刃の剣であった。無尽蔵の莫大なエネルギーと引き換えに、空間の物理構造に深刻な特異現象を齎した。もたら

惑星の保全と秩序の保管を旗に掲げた諸国連合は、これに強い警告を打ち鳴らす。動力炉と研究データの無条件放棄を余儀なくされた各国幾多に渡る技術開発局。その渦中、最大規模の【ブレン変移炉】を有する無国籍コングロマリットが武装蜂起を以てこれに相對した。

技術革新による戦争の始まりである。

【ブレン変移炉】の生み出す膨大な資源と豊潤な財力を糧に増殖を繰り返す無国籍コングロマリットは、やがて情勢の優位に君臨し、戦略組織 イーグリッド を私設 諸国連合が誇っていた軍事力を凌駕する。彼らの戦闘動機が「【ブレン変移炉】の永続」から「全世界に対する弾圧的支配」へと成り替わるのは、もはや時間の問

題であった。

イーグリッド は支配領域を滔々（とうとう）と押し広げ、その戦力と規模を拡大させていく。諸国連合はこれに対抗するべく国家間の軍備強化と軍事統合を主眼とした 世界解放軍 を編成。地球上の平和は無惨にも形骸化し、イーグリッド と 世界解放軍 の激しい戦闘は人類全体を巻き込んで泥沼状態へ突入する。

いつ果てるとも知れない戦争が続く。イーグリッド の弾圧に喘ぎ苦しむ人々が、囁かな安らぎを求めて天を仰いだ時、空の色が変わっていた。

高感度レーダーの走査範囲にNFA九機を補足。FCS解放。バイザーディスプレイの形成する光学映像が、数百メートル彼方で戦場と化した超高層ビル群 時間の流れに取り残されて咽び哭く（むせな）廃都の姿を幽玄と浮かび上がらせた。

有視界戦闘領域まで三〇。

暁の空の下。灰燼（かいじん）を纏った幾棟もの建造物が、その長軀を傾け荒涼と生えている。建造物同士の狭間で、白い閃光と橙色の火炎が踊り狂った。友軍と敵軍の激しい交戦状態。渴いた何かが鋭く頬を撫で、呼吸のリズムを囁（はや）し立てる。

有視界戦闘領域まで二〇。

疾（は）る震動。轟く砲声。心臓の音が速まる。恐怖ではあるが、そこに自意識を侵すほどの力はない。胸の奥で戦意が狼煙を上げた。手をかけたサイドの操作グリップを力強く握り締める。火の灯った全神経を機械仕掛けの手足へ拡大させるイメージ。前方へ加速する機体は自身の一部だ。

有視界戦闘領域まで一〇。

次に求められるのは感情のコントロール。強くて美しかった「あの子」がいつもこう言っていた。戦いで生き残る為には、生きようとする強い願望と、己の手足となる愛機を最後まで信じ抜く強い意志が必要なのだ。

有視界戦闘領域に到達。

ステルス解除、出力上昇。兵装システムフルドライブ。バイザーディスプレイ　母が大切だと言ってくれた眼鏡、機体のメインカメラとリンクするそのレンズが、第一撃破目標に設定した敵軍NFAの姿を鮮明に映し出していた。

「これより戦闘行動に移ります」

“長大な剣を携えた赤い騎士”

それが、NFA　ソルダーニヤ　の意匠を直感的に表現した言葉だ。しかし本機の光学映像を視界に捉えた敵パイロットが、脳裏にその言葉を再生することは恐らく叶わなかっただろう。何故ならば、搭乗機の胸部がこの刹那に下半身へと永遠の別れを告げていたからである。コックピットを横薙ぎに両断。メフアーナの駆る　ソルダーニヤ　が放った初撃は、敵軍NFA　ミシア　を一刀の下に屠<sup>ほふ</sup>り去った。

直前まで五機小隊を組んでいた残存四機の　ミシア　が、僚機の損失により乱れかけた陣形を再編、射撃体制を取りライフルを撃ち込んでくる。回避運動を入力。ソルダーニヤ　の驚くほど静粛で引き締まるように精練な駆動制御。それは、ライフル弾の回避と同時に、第二撃破目標と設定した敵機の死線へ重なる軌道。長刀を振り上げ、太刀筋を成す。ミシア　の左肩部から入った斜め一文字の鋭い剣閃が、右腰部へ終着して敵機体を抜けていく。バックブースト、目前で発生する爆発から逃れる。

マニピュレーターを覆い、ソルダーニヤ　の右腕部とほぼ一体化した兵装ユニット　デュランダル。単分子レベルの特殊構造で形成されたその刀身は、鋼の機人というべきNFAの装甲を桁外れの摩擦係数によって切断し、ミクロ単位へいざなう。だが　デュランダル　は強力な斬撃兵器として完成をみた代償に、機体バルンサーに過度な負担を課している。

NFAの兵装として類を見ない長刀、バルンサーの負担を解消し滑らかな戦闘機動を可能にしたのは、究極の次世代型アクチュエー

ター。中世ヨーロッパの鎧甲を想起させるフォルムが屈強なシルエツトを描く ソルダーニヤ の外部装甲、その直下に存在するフレームは、強靱な繊維を束ねた人工筋を纏っていた。

「ごめんなさい、あなたも斬ります」

伝わるはずのない死の宣告を呟き、グリップを押し込む。己の手足となった愛機が、流れるような動作で デュランダル を自在に手繰り、刃の反射光を鋭く踊らせる。戦場にあつて芸術的とさえいえる剣劇。第三撃破目標の頭部を斬り飛ばし、返す刀でその胴体を両断する。

残存二機を攻略するべくターンブースト。バイザーディスプレイに映る敵機が波状に散開していく。彼らとて莫迦<sup>ばか</sup>ではない。デュランダル の斬刀速度を看破、且つ間合いを見極めたのだらう。ライフル弾が矢の如く襲い来る。

「くっ……」

フットペダルを踏み替えながら ソルダーニヤ に旋回機動を。だが二方向から飛来する敵機の弾道は極めて正確だった。デュランダルのユニット後部は、箆手を模した補助装甲で構成されている。これを機体前面へ翳<sup>かき</sup>すことで弾丸の直撃を防ぎきる。

巻き返す！

ウェポンプラットフォーム展開、腰部のハードポイントにジョイントしていた射撃兵器を左マニピュレーターへ携行させる。短銃身に反した太く武骨なバレル構造は、上段にビームガン、下段にソリツダブルカンの二重火器を内蔵するハンドカノン。照準、グリップのトリガーを引く。一条を描く薄紅色のビーム光が、正面の ミシア腹部に穴を穿つ。反撃の機会を与えず追撃、二発三発と動力部に熱量を撃ち込む。圧縮率を高められた粒子の塊は、小口径弾にあるまじき貫通力と誘爆性を備えていた。為す術なく爆炎と化す第四撃破目標。

最後の一機に銃口を向ける。ビームガンの出力供給はマニピュレーターを介したジェネレータードライブだ。消費電力を軽減する為、

ハンドカノンの射撃モードをビームガンからソリッドバルカンへ。照準を合わせて再びトリガー。周囲に空薬莖をばらまきながら吐き出される目視不能の破線は、ミシアの右腕部をライフルごと蜂の巣にした。射撃手段を奪われた敵機が、左マニピュレーターで背部に携えた高振動ブレードを引き抜く動作に入る。

「駄目です、それは抜かせない！」

スラスター全開。敵が抜刀を終える直前に距離を詰め、デュランドルの尖剣でコックピットを刺突する。頭部カメラの光を失い、沈黙して沈む第五撃破目標。搭乗パイロットの生命反応を絶たれた敵機のCPUが、相打ちを狙って自爆装置を作動させる場合がある。刀身を引き抜き即座に後退……一〇秒経過、爆発の兆候はみられない。

一呼吸おいたあと、周囲を警戒してレーダーを確認。残されたNFAの反応は四つ。いずれも友軍信号を発していた。回線が開いて通信が入る。

『全滅するところだった。助かったよ』

通信機から漏れる囁<sup>しわが</sup>れた壮年兵士の声に、メファーナは心から安堵を吐いて言葉を返した。

「ご無事で何よりです」

『はは。この状況を無事と言えるかは実に疑わしいが』

ソルダーニヤを囲う廃墟のビル群。これらの構造物を盾に利用しながら敵軍と交戦していたのだらう、建造物の影から中破した四機のNFAが姿を現す。

NFA ベオル。白と深緑を基調にしたカラーリングと、天を衝く一本の頭部アンテナが特徴的な機体である。鋭角の多い猛禽類に似た外観をもつが、フレームへ弾痕を刻まれ、片腕を吹き飛ばされ、あらゆる箇所の装甲版を抉られたその姿に、本来の勇ましさは見る影もない。

『見ての通り、酷い有様さ』

量産機としては破格の基本性能と機動力を有するベオルも、

生産性と拡張性で大きくこちらを勝る敵軍の ミシア に苦しい戦況を強いられていた。既に兵士たちの体力は限界に達しているのだ。憔悴<sup>しやうすい</sup>で掠れた彼の声からそれが容易に窺える。

『五時と九時の方角から後続の敵部隊が迫っている。俺たちの母艦は戦闘エリアを射程圏に収めるべく現在こちらへ向かって移動中だが、正直充分な戦力とは言い難い……』

「了解しました。引き続きあなた方を援護します」

『君の所属を聞いても？』

これだけは誇れる。頼もしい仲間や、愛して止まない母が共にある“家族”。それはメファアーナにとって命にも等しい大切な場所。名乗ることに後悔などあるうものか。胸を張って口を開く。

「解放軍独立部隊。戦闘艦 クインハルト、NFA小隊所属、佐原少尉です」

自分でも驚くほどよく通る声が、コックピットの空気を震わせる。口下手な自分にしては素晴らしい発音だった。噛まずに言い切れた事に鳥肌が立つ。思わず顔を綻ばせながら感動に身を震わせていると

『あ、割り箸王子ントコの艦か！』

「っ！」

さっそく名乗ったことを後悔した。

『隊長！ それなら自分も聞いたことあります。何でも芸術的な美しさでお箸を割るんだとか』

『いやいや。俺が聞いたのはナイフもフォークも使わずに割り箸だけで数キログラムのステーキを何の苦もなく平らげてしまುತ್ತて話だ』

『違うんだなあ。割り箸で出来立てのピザを口元に運ぶんだ。これに決まってる』

『まさか。きつと割り箸でカレーのルーを自在にすすれるんだよ』

『僕の意見を述べさせて頂けるなら、ここはやっぱり割り箸でケーキを八等分でしょう』



メファーナに置いてけぼりを喰らわせ、先程の疲労感など嘘のよ  
うにに活き活きと盛り上がる ベオル のパイロットたち。しかも  
割り箸のこと全部当たってるから余計に腹が立ってきた。 クイン  
ハルト の素晴らしさならもっと他に語るべきところがたくさんあ  
るのに。この人たち、どうしてももの凄い勢いでそこにだけ食いつく  
の？ 話を広げたがるの？

『時間がない。討論は止めだ。目の前に生き証人がいるから尋ねて  
みようじゃないか、割り箸王子の真実とやらを。どうなんだねお嬢  
さん？』

そんな真実、正直どうでもいいです。

## 最前線（2）

「状況は？」

発声は短く、しかしそれでいて充分に鷹揚の効いた割り箸王子の声が場を奔った。即座に返されるオペレーターの言葉。

「友軍のカルナス級三隻を確認。既に砲撃態勢に移行しています」  
割り箸王子こと桐島時雨は、純然な戦意を宿した双眸で前方の大  
型ディスプレイを見据えてこう切り返す。

「戦果を上げる。総員覚悟はいいか」

力強い首肯が時雨のもとに集う。CIC通信パネルに両の指を走らせる女性オペレーター菊岡愛子は、友軍艦から受信した電文を滑舌のいい声で素早く読み上げる。

「カルナス級より入電。『我々は防衛作戦を続行。貴艦の援護に感謝する』です」

光芒が縦横に駆け巡り、黒煙が天空を昇る。メインスクリーンが流す粗い望遠映像は、本作戦で最も激しい戦闘が予測される前線を捉えたものだ。

「戦列に入ったら、こちらも攻撃を開始する。援護射撃だからって遠慮しないでいいぞ。敵の土手っ腹に風穴空けるつもりでぶっ放せ！」

緩急ある発声で紡がれた司令。揺るぎなき自信に溢れる彼独特の痛快な語脈が、戦闘ブリッジを高揚感で満たす。狙撃手は好戦的な笑みさえ浮かべ、「了解……！」と覇気のこもった威勢で応えた。

ブリッジクルーが身を預ける樹脂製のリニアシートは、三次元空間を最大限に謳歌する球陣形によって配置され、機能美と様式美を兼ね備えたハイセンスな設計思想を具現する。前方へ倒れた卵型を描く戦闘ブリッジの内郭壁は、その全面を光学モニターへ転換し、戦場となる亡国旧市街の荒れ果てた情景を周囲三六〇度に渡って映

写していた。

廃ビルのひび割れた窓ガラスたちが、巨大な推進器の巻き起こす駆動風に煽られて低い悲鳴を上げる。骸の街を眼下に捉えて身を進めていく白亜の巨艦　有機的な流線型を成した船体が上空を微速前進するその姿は、さながら海棲哺乳類が暁の射す海を遊泳しているかのような。決定的な違いを挙げるならば、これが万物を焼き払う灼熱の炎を身の内に宿していることだろう。船殻表面に浮かび上がった無数の継ぎ目が、各部で展開反転。前面側面に計一五門の荷電粒子ビーム砲口、上面に計二〇基の多弾頭ミサイル発射管を露顯する。戦闘艦艇　クインハルト、その砲撃形態であった。

前方で間断なき艦砲射撃を続ける二隻の友軍艦は、揚陸戦艦としては珍しいシャトルタイプのシャープな艦影をもつカルナス級だ。高度を下げながら二隻の間を縫うように戦列へ入った　クインハルトは、目標エリアへ向けて展開した粒子ビーム砲口から幾筋もの火線を一齐放射、さらに上空へ向けて展開した発射管から戦術ミサイルを立て続けに垂直発射する。体内から吐き出された灼熱の炎は、遙か数キロの彼方で混沌を謳う最前線へと吸い込まれて爆ぜ、狂乱する死の宴を鮮やかな閃光で彩った。

戦闘ブリッジが砲撃の振動で僅かに揺れる。前方右寄りの中型サブディスプレイには作戦エリアの概算的な地形マップが表示されており、クインハルトの火炮を受けて変形した地形をCG補正を交えながら最適化していく。狙撃手の目前に展開する火器管制モーターが、楕円形の赤いマーカーで着弾ポイントを示した。それら戦闘データが艦長席の統制ディスプレイへ送られ、確認した時雨は力強く頷いて口を開く。

「味方は巻き込んでないな。俺たちは攻勢に徹する。フィールド出力は可能な限り抑え、エネルギーを火炮へ注ぎ込め」

そこで地形マップをもう一度流し見て、唸るように呟く。

「しかしこう入り組んでちゃ、これ以上侵攻するのは厳しいな。やっぱり後衛を出すまで時間が　」

時雨の呟きは、オペレーター席から通信モニターの情報を読み上げる愛子の声にかき消される。

「ソルダーニャ　が敵NFA部隊第二波と接触、再び交戦状態に入りました。このまま前線へ侵攻します」

オペレーターとしての役割はその報告を済ませるだけでこと足りるはずだった。しかしシートごと体を回転させ、艦長席へ振り返った愛子は、表情を不安で陰らせて何か訴えるような瞳を時雨に向けていた。

「キャプテン、本当に良かったんですか？　前衛をメファたちだけに任せて」

心配性が見て取れる彼女の指摘に、時雨は右手を振る大袈裟なジェスチャーを交えつつ明るい声で応える。

「それについては大丈夫だって。あの子は何かと卑下にする癖があるけど、パイロットとしての技術は申し分ない。てかそうでないと、あんなピーキーな機体をあそこまで操れるかよ」

「それは、そうですね……」

理解はできるが納得がいかない、という感じに苦渋して口ごもる愛子。

「それにさあ。そろそろあの二機の新しい実戦データを送らないと、開発局でふんぞり返ってるヘンタイ夫婦がまたぶーぶー文句言ってくるし」

少し戯けたその台詞に何事かを得心したのか、愛子は「ああ」と軽く肩を竦ませる。時雨は少年のように純朴な瞳をキラキラと輝かせてこう言った。

「それともあれか。もしかして愛子君が俺の代わりにヘンタイ夫婦のぶーぶー、引き受けてくれるのかい？」

すると愛子は時雨から露骨に視線を外し、わざとらしく口笛を吹いた後、ゆつくりと前方の通信モニターへ向き直ってインカムの位置を正し、「さ、仕事仕事」と何事もなかったように電子キーボードを叩き始めるのだった。

「艦長、この艦にはイジメがあります」

そう湿った声を漏らした時雨が唇を尖らせ、タッチパネルの外枠を人差し指でツツと女々しくなぞっていく。艦長はお前だ！クルーの誰もが心中でそう叫んだのは言うまでもない。

生と死の境界線が酷く曖昧になった異空間。機人の慟哭が灰の街を蹂躪し、銃火が哮る死の宴は第二幕の開演を告げた。

ソルダーニヤの左肩部から放された対空ミサイルが リンドエアの腰部を<sup>な</sup>貫く。飛行力を削がれて乱回転した リンドエアは、携行ライフルの流れ弾を撒きながら廃ビルへ激突、緋の華を咲かせて散った。

叫び続けるアラート。

眼前に迫る機影。両肩部エクステンションに補助バーニア、バツクパックに追加ブースターを装備した ミシア 高機動タイプ。直撃コースで放ったビームガンが横跳びに回避されてしまう。

「<sup>かわ</sup>躲された。でもっ」

右コンソールを叩いて左グリップを引き戻す。ソルダーニヤ脚部のスラスタバーンが光力を焚き、至近距離で撃ち込まれた ミシア のショットガンを斜線機動で緊急回避する。三発が第一装甲版を掠めたが戦闘行動に支障なし。

「退かない、攻める」

右フットペダルを踏み込んで右グリップを押し込む。ブースター全開、驚異的な即応性で ミシア 高機動型の死角へ飛び込み、敵機体を デュランダル の逆袈裟で斬り裂いた。

「この距離なら、ソルダーニヤはどんなNFAにだって負けない……！」

最前線へ到達。

単機で二十数機の ミシア と リンドエア を相手取りながら尚衰えないメファーナの戦意と決断力は、愛機に対する絶対的な信頼が勝ち得たものであった。

叫び続けるアラート。

右コンソールを叩いて左フットペダルを踏み込む。バックブースト、一瞬先まで ソルダーニャ の立っていた場所を対地ミサイルが灼き払う。両グリップを最大に引き戻して左フットペダルを最奥まで踏み込む。大腿部に内蔵する人工筋をしなやかに伸縮させ、背部と脚部の全推力を地面へ向かって噴射、 ソルダーニャ は天高く跳躍する。

中空からの確な対地ミサイルを撃ち込んできた リンドエア は、しかし回避運動に鈍りが見える。飛行能力のない ソルダーニャ の機動領域を過小評価していたのだらう。そして耐久性を犠牲にした リンドエア の装甲に、上昇加速の運動エネルギーを得た デュランダルの一刀を防ぐ術はない。猛烈な斬り上げが リンドエア の機体を裂き貫いていく。蝙蝠こうもりの嬌声にも似た永く甲高い音が戦場を木霊し、 リンドエア は摩擦熱の火の粉を上方へ散らせて真つ二つに切断される。NFAという兵器を成していた二つの金属塊は、中空を落下していき地面に達することなく爆発。閃光が建造物の狭間を奔った。

叫び続けるアラート。

敵機のロックオン警告が重なり、バイザーディスプレイに弾き出された予測弾道は ソルダーニャ のポインターと重なっている。殆どの出力をメインバーニアへ供給している為、サブスラスタによる回避運動はまず間に合わない。このまま上昇を続けても敵の命中補正から脱することは不可能だ。

瞬時に戦況分析を終えたメフアーナはFCSの機能を切り替え、オプション兵装をアクティブにすると迷わず左グリップのトリガーを引いた。廃ビルの壁面に向かって、 ソルダーニャ が左マニピュレーター甲部よりワイヤーアンカーを射出する。アンカーがコンクリートに深く突き刺さり固定されると同時にワイヤーを収斂。これには人工筋と全く同じ材質の繊維が織り込まれており、機体重量を牽引するに足る強靱な伸縮性と耐久度をもつ。バーニアの推力を

抑えつつ、ワイヤーアンカーで強引に生み出した慣性を利用して敵機の射線軸から離脱する。

傍らの空間を、黄金色の粒子束から成る熱線が一瞬にして翔抜けていく。防眩フィルター稼働、ビームが横切ったことで急上昇したコックピット内の光量を即座に抑制。視界が復元したとき、ソルダーニヤの戦術AIは熱線の発射位置を正確に算出していた。バイザーディスプレイへ投影される敵機のポインターと拡大映像背部に補助コンデンサーを装備し、両腕で大型のビームキャノンを抱え込んだ ミシア 砲撃戦タイプ。砲身の冷却が完了次第、こちらの動体数値を補正に加えた第二射を撃ち込んでくるであろう事実  
に疑いの余地はない。

叫び続けるアラート。

新たな リンドエア が二機、上空から迫る。一方がアサルトライフルを、更にもう一方がマイクロミサイルを照準している。ソルダーニヤは、牽引し逐<sup>お</sup>えたワイヤーの先を甲部から切り離し、アンカーの終着点となった壁面を蹴って二度目の跳躍。反動を活かしたまま、回復したエネルギーを推力へ転換して再びバーニアを点火させた。

「空が飛べないからって」

発射された敵機のマイクロミサイルは計四発。メファーナはFC Sを切り替えて ソルダーニヤ の左肩部から迎撃ミサイルを放ちながら、アサルトライフルを構えた リンドエア へ機体を突進させる。

「馬鹿にしないで！」

ソリッドバルカンでアサルトライフルを撃ち抜き、誘爆を恐れた敵機がそれを投棄する瞬間に デュランダル をその肩口に突き立てた。

リンドエア の浮力に自らの推力を押し込め、ソルダーニヤは空中を邁進する。迎撃ミサイルを抜けてきた一発のマイクロミサイルが真上を通過し、虚空を彷徨ったあとに爆発した。その閃光を

背に、揉み合った状態で乱雑な軌道をとる両機体。この状態ならば下からビームキャノンを構える ミシア と、上空からマイクロミサイルをロックオンしたもう一機の リンドエア は、味方機への誤射を危惧して下手にトリガーを引くことは出来まい。

メファアーナが「あの子」から教わった戦術のひとつだった。

バイザーディスプレイの端に表示された簡易マップ。愛機と目前の リンドエア がポインターを重ね、 ミシア 砲撃戦タイプのもれへと肉迫する。射撃に特化した装備といえど、入り組んだ地形の中で機動力に優れた ソルダーニャ を正確に狙撃するには、射線がクリアになる最適距離まで機体を接近させなければならぬ。ゆえに、NFA二機分の機体重量に耐え切れず急降下を開始した リンドエア と ソルダーニャ は、僅か十数秒で ミシア 砲撃戦タイプを有視界戦闘可能領域へ収めた。

メファアーナは左グリップを押し込んでトリガーを引き、ビームガンを眼下の敵機へ撃ち放つ。数発の熱粒子が大地を焦がす。退路を断つ牽制射撃。重装備に機動性を殺されている ミシア 砲撃戦タイプは、大きな回避行動を取れずその場に金縛りとなった。相対距離とタイミングを見計い、コンソールを叩いてフットペダルを踏み込む。応えた ソルダーニャ が機体を前方に傾けて推力を増す。



### 最前線（3）

続けざま右グリップを押し込んだ。 リンドエア の肩口に突き立てた デュランダル を力業で斬り下ろしながら ミシア 砲撃戦タイプの頭上へ落下、敵機同士を衝突させる。急激な落下加速の太刀と衝突のダメージを受けた リンドエア の機体は、フレームを完膚なきに破壊されてバラバラに砕け散った。デュランダルの太刀筋は勢いを保ったままとどまることなく ミシア 砲撃戦タイプの胸部に達し、無慈悲な長刀がコックピットを裂いていく。敵機を斬り伏せると同時に ソルダーニヤ は着地を終える。シヨックアブソーバー稼働。落下と着地の衝撃を緩和するコックピット外郭壁のセミフローティング構造が、静かにメファアーナの全身を揺らす。

ミシア のパイロットは、最期の瞬間まで リンドエア ごと ソルダーニヤ を撃ち抜こうとしなかった。砲身の冷却が間に合わなかったのか。照準が定まらなかったのか。或いは仲間を撃つという行為に迷いが生じたのか。その迷いは、人間として決して間違ったものではない。しかし兵士としては致命的なミスだった。出撃前に彼らは酒を酌み交わし、この戦場から共に生きて帰ろうと語り合ったのだろうか。

妄想だ、メファアーナは思考を振り払って両のグリップを握り直す。余計なことは考えるな。ここは戦場なんだ。敵に情など感じていたら次に命を落とすのは自分の方。

叫び続けるアラート。

上空より リンドエア がマイクロミサイルを撃ち込んでくる。建造物の影に隠れるよう愛機を移動させながらレーダーを確認。敵部隊の更なる増援に、簡易マップが敵ポインターのマーカで染まっていく。

ミサイルが建造物の横腹へ次々と直撃し爆炎と衝撃波を生む。コ

ンクリートの壁面をビームガンで撃ち破り、駐車場と思しき廃ビルの内部に侵入。置き棄てられた無数の廃車を粉々に吹き飛ばしながら直進で通り抜け、今度は左肩部のミサイルで壁面を破壊して反対側の街道へ出る。

刹那、巨大な砲声と震動がメファアーナの五感に叩きつけられた。

障害物として利用するつもりだった構造物の一棟が、砲弾に根元を破碎されて倒壊を始める。迫る大質量をサイドブーストで凌ぎ、衝撃に備えた。コンクリートの軋み崩れる轟音が戦場を駆け抜け、穢れた灰燼と土煙が宙を踊り狂う。

この口径と破壊力。NFAの携行兵器ではない。広範囲レーダーが巨大な熱源を感知する。敵艦による艦砲射撃。

叫び続けるアラート。

大地が抉られ、廃ビルが薙ぎ倒される。巨大な主砲の洗礼によって、旧市街は消えない火焰に飲み込まれていった。機人たちの宴は終わらない。応射、跳躍、接地。燃え盛る戦場の炎をスラスト光圧で震わせながら ソルダーニャ は戦闘機動をとり続ける。

前方より ミシア 重武装タイプがロケットランチャーを、上空より リンドエア が対地ミサイルを、後方より ミシア 高機動タイプがサブマシンガンを、遠方より敵戦艦が滑空砲を、さらに接近する敵NFAのロックオン警告。 ソルダーニャ の戦術AIが予測弾道を表示する。周囲の空間が、敵機の弾道で赤く埋め尽くされた。

「回避軌道が、ない……！」

だがメファアーナの次なる判断は淀みない。ハンドカノンとサブスラスタの出力をカット、プライオリティをディフェンスシステムへ。 ソルダーニャ は両膝とバックパックを覆う装甲をせり上げ放熱帯を露呈、エネルギーフィールド発生機構の稼動を以て主の命に応えた。空气中に散布される琥珀色の微粒子が、互いに干渉しながら濃度を増して機体周囲に安定還流。NFAが搭載する従来型のエネルギーフィールドは、機体前面一八〇度に半球状の防御力場を

発生させるタイプが主流だ。対して ソルダーニャ のそれは、より高い出力と粒子圧縮率を発揮し、機体の全天周囲に完全球状の防御力場を形成することが可能である。

ロケットランチャーとマイクロミサイルが、琥珀色の光壁に弾頭を押し潰され指向性を奪われたまま消し飛ぶ。サブマシンガンの銃弾は、粒子との干渉波を描きながら分解されていく。大口径の滑空砲弾が、僅か後方の地面に着弾。巻き起こる激しい衝撃波とコンクリートを抱いた爆風は、しかしフィールドに阻まれ ソルダーニャの装甲に届くことはない。

フィールドジェネレーターオフ。切り開いた回避軌道に乗ってこの場を離脱、火線が周囲を追い抜いていく。熱波の奔流を機体に浴びながらメインバーニアを出力。戦術AIが算出する次なる予測弾道は、敵艦の砲撃が著しく精度を低下させている事実をメフアーナに訴えた。

遙か後方から、 クインハルト が援護射撃によって敵艦を牽制してくれている。

「みなさんありがとう」

戦闘開始から一五〇分が経過していた。満身創痍の友軍に後退を呼び掛けながら進み続けた為、戦域に ベオル の反応はない。ここで決着をつける。FCSのリミッター解除、エネルギーを右腕部へ集中供給し デュランダル を最大解放。

前方へ掲げた長刀が、ユニット全体を“展開”させる。パーツ群が外側へスライドすることで姿を現した デュランダル の内部機構は、粒子加速帯と思しき複雑な連動出力装置だ。

出力全開。粒子を進らせながらユニット内部から雄々しく放射されたビームスレイヤーの束は、力場を固定すると瞬時にして デュランダル の刀身を光の槍剣へと変貌させた。巨大な剣が、ようやく堅い鞘から抜き放たれた瞬間である。

敵戦艦位置を再確認し、彼我の距離を計算。最適な侵攻ルートを割り出してフットペダルを踏み込む。メインバーニアの咆哮。デ

ユラन्दル を猛らせ、接近する敵NFA部隊を迎え討つ。

死の宴は最終幕の開演を告げた。

ソルダーニヤ の手繰る剣閃が、戦場に軌跡を描いて躍る。横薙ぎの袈裟を受けた ミシア は頭部と脚部のみを残して滅却し、振り下ろす一太刀を受けた リンドエア は機体そのものがこの世から消滅する。廃ビルの一部に身を隠しながら戦術ミサイルを垂直発射していた敵機を、建造物もろとも両断。全てを無へ帰す豪なる剣舞 ターンブーストの遠心力を乗せた太刀で、続く二機の敵を同時に消し飛ばす。巨大な光刃はもはや破壊力が、戦術レベルが、斬撃兵器の限界を超えていた。

握り絞めるグリップが恐ろしいほど熱い。自らが斬り伏せた機人の断末魔が、メファアーナの精神を浸食していく。この世界で生き残る為には、戦うしかない。

死なないで。メファ。

ふと「あの子」の声が胸に響いた。思い出すまいとしていたのに、酷く懐かしい声。彼女がいなくなってしまう直前に発した最後の言葉。幻聴だと分かっている、心が引つ張られるようにそこへ沈む。私こそ、私こそが、「あの子」にその言葉を掛けてあげべきだった。

戦場で生き残っても、失ったものが戻ってくることはない。体が、重い。この苦しみから解放されたい。ここで死ぬのは簡単なことなのだろう。何もしなければいいのだから。しかし骨の髄まで染み込んだ戦闘技能が、メファアーナに戦意の喪失と安易な死を許さない。

ジャラジャラと音を立て、黒い鎖がメファアーナの胸を締め付ける。「聞こえますか クインハルト。これよりポイント2065の敵戦艦を撃滅します」

低空から射撃体制へ入った リンドエア を薙ぎ払う。翼を生やした機械仕掛けの鳥人が、その姿を滅されていく。

下ろしたばかりの靴下が、

鳶色の粒子を前面へ還流させ防御力場を展開した ミシア シー

ルドタイプを、フィールドごと突き破る。敵パイロットの命とその機体は瞬時に蒸発、凄まじい余波で地面が黒く焦げ付いた。

愛用していたシャープペンが、

鋭い低音を響かせて飛来した敵艦の大口径滑空弾を受け止める。

爆発のエネルギーは デュランダル の光の巨槍へと還元され、僅かな痺れと震動のみが伝わった。そして ソルダーニャ の進攻を遮ることはない。

お気に入りのリップクリームが、

灰燼を吐き出しながら倒壊してくる建造物を斬り裂く。中央を消滅させられ波状に吹き飛んだ建造物の巨大な断片が、数機の敵機を巻き込みながら爆発炎上して転がっていくさまは、生きてはいないはずの死都が、まるで我が身を削られる激しい痛みに阿鼻叫喚しているかのようだ。

三九ドルと二五三六円の入った財布が、

超高速で接近する ソルダーニャ に対して、勇敢にも正面から砲身を向け射撃体勢に入った ミシア 砲撃戦タイプを デュランダル の斬光で喰らい尽くす。

大切な戦友だった「あの子」が、

機銃曳航、滑空弾道、光学射線、空間上に広がるあらゆる弾幕を斬り拓いて進撃。死の焰と闇に侵された景観と、敵機の断末魔が次々と後方へ飛び去っていき、やがて目前に巨大な影が姿を現した。

帰ってくるはずはない。

最終撃破目標、敵戦艦 ダートフォース 。ホバー機動を主推進とし、起伏に富んだシンメトリーの構造が特徴的な艦影。その直上に跳躍した ソルダーニャ は、槍剣の矛先を艦橋部へ向ける。

デュランダル を射撃形態へ移行。展開していたパーツの一部が閉じられ、光刃を一時的にカット、ユニット前部が伸張する。再展開。光の槍剣は、長銃身の中距離対艦砲と化す。

だから「あの子」のいない今、自分が艦の皆を、母を守る。

右グリップを押し込み、トリガーを引き絞る。連動型の粒子加速

帯が唸りを上げた。収束率変換。ビームスレイヤーを成す力場が剣の形状から解放される。加速帯より指向性を与えられたエネルギーの塊は、物質を灼き尽くす熱線となって空間を駆け降りた。デュランダル の放った巨大な光条が、敵艦の艦橋を貫通。莫大な熱流はその艦内を攪拌、蹂躪し、刹那に機関部へと達して本体を爆炎の渦で飲み込んだ。

轟音と爆光が奔り交う中空に、放物線を描いて ソルダーニヤは着地する。僅かな残光を漏らす デュランダル のユニットが、完全に閉じられた。それと入れ代わるように機体の右肩部が展開し、右腕部に蓄積した余剰エネルギーを一気に吐き出す。 ソルダーニヤ 右肩部は デュランダル の冷却機構である。

激しい勢いで放出される大量の赤い鱗粉。その飛べない<sup>せきよく</sup>隻翼は、剣が吸い取った血と魂で成したものなのかもしれない。

「これで周辺の敵部隊は」

アラート。熱源探知、急接近する残存敵 N F A を二機補足。地上八時方向から ミシア、中空三時方向より リンドエア。

「しまった！ まだ残って、」

何て愚鈍なミス。メファアーナは警戒と索敵を怠った自らの留意不足を叱咤、嫌悪する。恐らく敵機は、母艦の爆発に紛れて機体の熱反応を消しながら反撃の機会を得たのだ。迫る ミシア は両腕にエネルギーブレードを起動させた近接戦闘タイプ。

ハンドカノンはパウダーダウンと弾切れで、既にビームガンとソリッドバルカンの双方を撃つことが出来ない。肩部ミサイルも同様。右腕の デュランダル は先程冷却に入っただけだ。左側面左後方から急所へ飛び込まれるこの間合いでは、長大な刀身を振りかざすことも不可能だ。

決死を囁くモーメント。

「これで、」

咄嗟の反応で左マニピュレーターのハンドカノンを ミシア へ向けて投げつけ、右腰部に収納されている補助武装のレーザーダガ

ーを抜き放つ。ハンドカノンを左ブレードで切り裂いて、こちらに右ブレードによる切り払いを浴びせようとする ミシア の攻撃を、体勢を低める俊敏な動作で回避 限りなく人間に近い動きが可能 な人工筋のなせる技だ し、発振させたレーザーダガーの粒子刃で敵のコックピットを貫いた。

ミシア 近接戦闘タイプを撃破。だが リンドエア が頭上からマイクロミサイルをロックオンする もはや次の手は間に合わない。スラスター出力もフィールド出力も既になく、ここからあの距離へ届く攻撃手段は皆無。メファアーナは死を覚悟した。

これで「あの子」の許へ逝けるだろうか。

母は、自分の死を悲しんでくれるだろうか。

## 最前線（４）

不思議と瞳を閉じなかった。故にはつきりと見えた。 リンドエア が、マイクロミサイルを発射することが出来ずに天の藻屑となつて炎と散つていく瞬間を。

上空に友軍機反応。

『メファ、無事か』

バイザーディスプレイに映った男、戦場で自分の命を預けるに足る優秀な兵士。往年のハリウッズスターにも匹敵するその端麗な目鼻立ちを認めて、メファーナは静かに驚嘆する。

「フランツ……！」

N F A ウインググラス

日暮れと共に藍色の帯が滲み始めた暁の空を、敢然と裂いて飛翔する漆黒の機体。 ソルダーニヤ と比較すれば遥かに細身だが、軸に対して水平に展開した両翼は、一四基もの小型スタビライザーを内蔵する。通常はバックパックと肩部を、ミサイルポットをはじめとする無数のウェポンコンテナで武装している為、翼部が外見に与える印象はそれほど大きくない。だが本作戦の遂行中に弾を撃ち尽くしたそれらをパージしたのだらう。現在は翼部のシルエツトが浮き彫りになり、そのシンプルなラインが如何に無駄のないデザインであるかを窺と伝えていた。

腕部は右マニピュレーターにプラズマライフルを、左マニピュレーターにレールガンをそれぞれ携える。そして本来二本の脚部があつて然るべき下半身は、その全てを大型ブースターによって構成していた。高機動戦闘を想定して設計された、完全なる空戦N F A。『最後まで気を抜くな。体は、どこも負傷してないか？』

無愛想なので分かり難いが、エメラルドグリーンの瞳が微かに揺れていた。本当に、心配してくれている。嬉しい。感謝の気持ちで胸が一杯になる。



「はい。大丈夫です。助けてくれてありがとう」

『なら、いい』

メファアーナの笑顔に面と向かうのが気恥ずかしいのか照れ臭いのか、フランチはすぐに視線を逸らしてばつが悪そうにむっとりとした。こういうところが彼のチャームポイントなのだとメファアーナは思う。あとほんの少しだけ心を開けば、きっといい友人も出来るだろうし、素敵な恋愛だって出来るはずなのに。

ウインググラスの機体が飛行速度を上げながら、紫色の微粒子を焚いて垂直に翻る。慣性法則に逆らったかのような軌道修正。ウインググラスは背部バーニアの一部に試作型の反重力推進機構、通称デインドライブを搭載している。これによって他のNF Aが追従出来ない変則的な機動性能を獲得した。

そんな機体の動きを眺めながら、メファアーナはハツと我に返る。九死に一生を得た反動で思考が浮いて気づくのが遅れた。作戦の性質上は現在の時刻にフランチのウインググラスが、このポイントで自分のソルダニーヤと合流しているのは不自然だ。

「フランチ、どうしてここに？」

彼は疑問の答えを至極簡潔に、無愛想にこう告げる。

『敵軍が撤退を始めた。この戦いは一先ず、俺たちの勝ちだ』

バイザーディスプレイの端に、クインハルトからの通信を示すランプが点灯していた。

「イーグリッド 軍の艦隊が、戦闘エリアから離脱していきます」  
「被害状況確認。後衛のNF A部隊を収容しつつ友軍の救援活動にあたれ」

時雨は艦長シートに深く背中を預けながら両腕を組み、「撤退、ね」と唸ってみせる。このクインハルトが前線へ出ることなく戦闘に勝利したのはまさしく僥倖うちはいふと言えるが、どうもこの結末は腑に落ちない。

「てつきり“FFA”の一機や二機は平然と投入してくるもんかと

思っていたが」

「もうキャプテン、縁起でもないこと言わないで下さい。メファは今回かなり危なかったんですから！」

「ああすまない。ソルダーニヤの動力は、飽くまで“準”永久機関。出力と限界値をもう少し考慮すべきだった。攻防進退の最終的な判断はパイロットに一任しているとはいえ、ちよつと無茶をさせたかな」

本当ですよ全く、とぶんすか怒り始めた愛子に対して平謝りと言いつつ、時雨は今次の戦いを反芻する。

本作戦　メファーナの　ソルダーニヤ　が突破力を生かして最前線の敵部隊を真つ向から斬り崩し、フランツの　ウィングラッサ　が航行力を生かして可能な限り艦隊に接近、高度からミサイルをぶち込む。結果、敵の旗艦を叩く前に勝敗が決してしまった。

クインハルト　が参戦して以降、解放軍　が戦局を持ち直したのは事実。だが敵の全艦隊を撤退に追い込むほど壊滅的な打撃を与えた訳ではない。長距離戦闘に秀でた　ウィングラッサ　も、流石にそれほど大量のミサイルを一度に装備することは不可能だ。弾切れと同時に戦線を速やかに離脱し、ソルダーニヤ　とは別ルートで帰還。早急に補給を受け、第三派として再び出撃してもらう手筈だった。

「妙だな」

「妙ですね」

イーグリッド　が取った「撤退」という選択は妙だ。

現在の勢力図から見て確かに奴らは、追い詰められている自分たち　解放軍　と比べ遙かに余裕のある戦い方が出来るだろう。そこまで必死になる必要はない。しかし支配領域を拡大する上で、今回の制圧戦がこのように軽視される理由もないと時雨は考える。

煮え切らない。なつとりと思考に絡み付いて尾を引く妙な感覚。胸騒ぎがする。「嫌な予感」の一言で片づけるにはあまりにも危うい。イーグリッド　はまだ重要な手札を隠し持っている。

「何だろうな」

「何でしょうね」

「……愛子君、俺の懸念に興味がないからって、さっきからテキトーに相槌打ってるだろ」

「ええまあ。よく分かりましたね」

なかなか切なくなってくるじゃないか。こんなときは、そう。さつさと部屋に戻り、貴重な高級竹で作られた秘蔵コレクションの割り箸を一本だけ割って心を慰めよう。うん。それがいい。

「部屋帰って割り箸割るのは構いせんけど、部隊のみんなが帰艦するのをちゃんと見届けてからにして下さいね。それがキャプテンの勤めというものです」

やっぱり二本にしようと思う。

## おかえりなさい（１）

「おかえりんぐメファ嬢。無事で何よりよ」

「ただいまです。リプリーチーフ」

「あんれ？　ところで　ソルダーニヤ　のハンドカノンは？」

「失しました」

「がびーん」

そんなこんなで　クインハルト　へ無事に帰艦したメファアーナは、リプリーにたくさん謝罪をしたあと、パイロットたちの生還を見届けに降りてきた時雨から「よく戦ってくれた」と労いの言葉を掛けてもらい、艦底部に位置するNFAハンガーを出た。

エレベーターの上昇感覚に身を預けながら、帰艦早々姿が見えなくなったフランツを探し出して、もう一度だけ彼にお礼を言った方がいいだろうか、それともあんまりしつこいと逆に嫌われるだろうか、などと思いを馳せつつ深呼吸。

エレベーターの扉が開く。

「っ！」

智世が立っていた。

「おかえりなさい、メファ。よく頑張ったわね」

本心からなのか愛想笑いなのか判断のつかない微笑を浮かべて母はそう告げる。こんなことは初めてだ。自分を迎えにきてくれるなんて。嬉しい。でもどう対応すればいいのだろう。頭の中をあれこれ堂々巡りして、ようやく捻り出した言葉は

「お部屋の掃除、まだでしたよね！　す、すぐに終わらせますから！」

智世が今度は苦笑する。

「ふ。何それ。ここは『ただいま』でしょう?」

やってしまった。顔中が熱を帯びていくのが分かる。きっと耳の先まで真っ赤になっているに違いない。

「た、ただいまお母さん」

「お帰りなさいメファ」

そのひと言で胸に温かな安らぎが生まれてくる。

ああ。自分の帰りを待っていてくれる人がいるということは、こんなにも幸せなものだったのか。死ななくてよかった。生きてよかった。やっぱりフランクにもう一度だけお礼を伝えよう。

いや、重要なことを思い出した。

そういえば戦闘後にはなるべく母と会いたくない理由があった。ツンと鼻を突く体臭。白いパイロットスーツが、軀にベツトリと貼り付いていて凄く気持ち悪い。さっきから髪の毛がベタベタするし、全身が痒くてしょうがない。母の前では常に心掛けている「清潔」の二文字が、今や遠い異世界の呪文か何かのようだ。

「ごめんなさい」

つい後ずさって身構える。せつかく出迎えてくれた母に不快な思いをさせてしまったかもしれない。

「謝る必要はないわ。戦闘行動中 緊張状態における発汗作用は、人間として当然の身体機能よ」

智世がこちらに背中を向けて既に歩き始めていた。淀みのない、自信と誇りに満ちた強い歩調。メファーナは母のこの姿が好きだ。何故だか自分まで勇気が沸いてくる。

「何時までもそのままじゃ気持ち悪いでしょう」

小刻みに揺れる智世の肩、メファーナには分かる。

「いつまでそこに突っ立っているの? 早く私について来なさい」  
その後ろ姿が自分にそう語りかけていた。

こうなることはある程度予想出来た。

母は体を洗い流そうとした直前に戦闘が始まってしまっていてそれを

中断せざる得なかったのだし、自分なんかは先述の通り戦闘に参加した直後で体中が大量の汗でびっしょりなのだ。そうだ。こうなることは予想出来たはず。しかしいざこうなってみると、やっぱりもう少しだけ心の準備が欲しかったなと切に思う。

降り注ぐ温水の雨。立ち込める湯煙。伝わる熱の微風。

メファーナは、智世と並んでシャワーを浴びている。

母と裸体を晒し合うなど、想像もつかなかった。計七基のユニットシャワーが立ち並ぶフロア。簡素な開閉式の仕切りを挟んだすぐ隣で、きつと母の白くて綺麗な素肌が光を反射して煌めいているのだ。

智世の方が早くシャワーを終えるだろう。ふと自分の体に、母に見られておかしい所はないだろうか気になって腕の動きが緩慢になる。だがボディソープの泡が自分の体を隠してくれる事実は今さら気づき、慌てて両手をこすりあわせて泡立てを始めた。

裸を見られるのが恥ずかしくて、脱衣所では母がシャワー室に入っていくまでメファーナは下着を取ることが出来なかった。とはいえ一緒にシャワーをと誘われておきながら、このフロアでスペースを空ける訳にもいかず、こうして隣で湯の栓を開けたのである。

よく泡立った石鹸を、どうしよう、そうだ、とりあえず一番見られたくないこの胸を、

「やっぱり大きいのね」

「ひゃっ」

「上向きで形もいいし、羨ましいわ」

いつの間にか隣の仕切りを開いて顔を出していた全裸の智世が、これっぽっちも遠慮する素振りを見せずにメファーナの上半身を凝視している。母の身体を見返す余裕もなく、思わず自らを抱くようにしやがみこむが、

「私もある方だと思ってたけど、流石にあなたには負けるみたい」  
手遅れだった。

「頂上はピンク色か。色素が薄いのね」

も、もうやめて。恥ずかしい。

智世は生物学者でもある。あらゆる生物の身体構造に精通しているのだ。今までに幾度となく聞かされてきた生命体についての論述も、必ず科学的見地に基づいた厳肅なものではなかったか。それなのに今の智世の口から出て来る言葉は、何から何まで破廉恥なものに思えてくる。

「今、成長期よね。まだ乳房の芯は残ってる？ 弾性の具合や脂肪の付き方にも興味があるわ」

お、お願いだからもうやめて。

「乳腺の状態はどう？ 少し触診してもいいかしら？」

母さんの威厳が揺らいでいる気がするのは、まさか私のせい？ もしそうなら、こんな大きいだけで何の役にも立たない胸なんていらないよう。

恥ずかしさで全身が酷く火照っている。てっきり自分になんか関心がないと思っていた母が、こうして興味を示してくれたのは喜ばしい事実なはずなのに。この状況下では、とてもそれを素直に喜べないメファーナであった。

智世のおっぱいタッチをどうにかこうにか凌ぎ切り、食堂に辿り着いたメファーナは、壁掛けされた電子メニューボードの前で、考え込むように顔を赤る菊岡愛子の姿を見かけた。「うーん。どうしようかな」などと呟いている。何やら夕食のメニューを決めかねているようだ。

「こんばんは、愛子さん」

「ああメファ」

「悩んでらっしゃるようですね」

「うんそうなのよ。麺系でいこうと思うんだけど。ソーメンにするか、チャーシューメンするか、なかなか決まらなくてね。メファはどうちがいのと思う？」

急にそんなこと訊かれても、何を基準に決めればいいものか分か

らない。どうしようか悩んでいると、愛子が突然「そうだ！」と手を叩いた。

わ、ビックリしたあ。

「いいこと思いついた。私がソーメンにするから、メファはチャーシューメンにしろよ。それでもって半分食べた時点でお椀を交換。ほらほら万事解決。一度で二度おいしいこの感じ、私って頭いい」巻き込まれてしまった。

カウンターで注文を済ませ、料理の載ったトレイを受け取る。空いているテーブルを適当に見繕って愛子と並んで席に座った。

箸を用意して「いただきます」をし、チャーシューメンに手を付け始める。こつてりとした濃厚スープと肉汁たっぷりの厚切りチャーシューが何とも食欲をそそる。そういえば午前中に緊急戦備警報が発令されてから五時間、まともに昼食を摂っていなかった。

食は須く進み、ずず、と麺の音を立てながらお椀の中身はあつという間に半分に。そろそろ愛子のソーメンと交換しなければいけないのだろうか。メファーナが挙動不審になり始める中、ふと向かい側のテーブルに別のトレイが置かれた。

ぱっちゃん！

箸が割れる無駄に小気味いい音。

「これはこれは。食堂の隅で箸をつかつてるご婦人があるなーと思ったら、君たちだったか」

メファーナは微笑を浮かべて「キャプテン、どうもお疲れさまです」と言ってみる。愛子がその隣で、ちつ、と小さく悪態をつきながら露骨に視線を逸らした。

「あつ、愛子くん今確かにちっちゃな声で舌打ちしたろ。傷つくな」眉をひそめたまま芝居がかったような動作でかぶりを振る桐島時雨は、「違いますー」という愛子のあからさまな嘘にもめげずメファーナ達の正面を陣取った。彼の持ってきたトレイの上には、赤やら黄色やら黒やら白やら緑やらがやたらめったら挟み込まれたビツクサイズのハンバーガーが二つ。



それを食べるのに何故お箸？

メファーナのそんな疑問をよそに、何時雨は目前でハンバーガーの解体ショーを始めてしまったではないか。蓋と真ん中と底で具を挟んでいた三枚の円形パン、赤　トマト、黄色　チーズ、黒

ハンバーガー、白　卵、緑　レタス、無惨にもその身を引き離されてしまったハンバーガー。バラバラ殺バーガーの犯人は、それらを箸で挟み込むと器用に口の中へ運び始めるのだった。

「うわ、ちよつとあれ。何考えてるのかしら、理解できないわ。これだから嫌だったのに……勘弁してよもう」

小声でそう耳打ちしてくる愛子に苦笑を返す。確かにどうかと思う。本人にとつては割り箸を駆使した高度なテクニクのものなのだろうが、これではハンバーガーの存在意義が無くなってしまふ。可哀想なハンバーガーさん。

「んぐんぐ。そういうえば、この艦にも出るらしいな」

何の脈絡もなく唐突に切り出された時雨の言葉に意味をはかりかねたメファーナは、急に何を言い出すんだろうと思いつつ小首を傾げて聞き返す。

「出るって何がですか？」

「出るって言ったら、ほら、やつぱりあれしかないじゃないか。本当は見えちゃいけないはずのあれさ」

急に声のトーンを低めて絞り出すようにそう呟く時雨。いまだ彼の言葉の真意を理解できなくてキョトンとするメファーナの隣で、愛子が「ひ、」と肩を震わせて箸をお椀の中に落とした。

心なしか、この場の温度が少しだけ下がった気がする。

うん、まあ何ていうか、この　クインハルト　は戦争をしているんだ。いわば生と死の彼岸へ頻繁に出入りしていると言っても過言じゃあないだろ。

あると思うんだよね。魂が行き交う道筋みたいなものが、このクインハルト　の艦内にもさ。だから時折こんな話を耳にするんだ。丑三つ時。夏夜の寝苦しさに目を覚ましたある兵士が、汗でベタ

ベタになった自分の身体をさっぱりさせようと、シャワー室へ続く長い廊下を歩いていった。誘導灯しか光源のないそこは昼間とは完全に別世界さ。

カッソカッソという自分の足音だけが反響する、不気味な暗がり。兵士はふと自分以外の気配を微かに感じ取るんだ。だが振り返っても誰もいない。考えてみればおかしい話だよ。自分の足音しか聞こえないのに背後から気配を感じるなんてさ。

首を傾げて再び歩みを始める兵士。馬鹿だよなあ。ここで自分の部屋に引き返せば良かったのに……。

やがて気づいてしまうんだ。自分の足音に紛れて、ざっざっざっという、重たい何かが床の上を引き摺られていくような摩擦音が、いつの間にか聞こえ始めていたことに。こんなのは幻聴だ、自分にそう言い聞かせながら歩みを進める兵士。

だが進めば進む程大くなるその音に身の内の恐れは否応なく増長されていく。恐怖のあまり振り返ることも出来ず、耐えられなくなった兵士は咄嗟にすぐ脇のトイレに駆け込んで、個室に鍵を掛けた。

ざっざっざっ。

その音はトイレの中まで追いかけてきた。便座の上で両耳を塞いでうずくまる兵士。全身の震えは止まらず、冷や汗は一層溢れてくる。

ざっざっざっ。

早く、早く違ふところへ行ってくれ。どうかこの扉を開けないでくれ。俺の存在に気付かないでくれ。兵士は必死に祈る。すると突然その音が止んだ。願いが通じたのか、それ以来いくら息を潜めても音は聞こえてこない。

腕で額の汗を拭いながら大きく溜め息を吐いた兵士が、便座から立ち上がったその時だ。ツーと首筋を何かが伝った。自分の汗だと思いい、手でそつとそれを拭う。何気なしに手のひらを確かめた兵士は目をむきだして驚愕する。赤。手のひらにベッタリと、血の赤。

恐怖で殆ど動かなくなった首の関節を軋ませながら、ゆっくり頭を持ち上げる。

戦慄で五臓六腑が凍りついた。そこには、爪の剥がれた血まみれの指で壁の縁を掴み、眼球の抉られた暗く虚ろな双眸でこちらを見下ろす戦死者の怨霊が

「いやあああああー！」

突如もの凄い音を響かせて立ち上がった顔面蒼白の愛子が、両耳を塞いで絶叫しながら食堂を走り去って行った。速い。むちゃくちゃ速い。彼女は本当にオペレーターか。怪談話を途中で切り上げた時雨が後頭部を搔いて肩をすくめた。

「おっと。囁かな復讐のつもりだったんだけど、ちとやり過ぎたかな」

## おかえりなさい（２）

「愛子さんはああいう話が人の苦手なんですから、あんまりしつこくやると本当に恨まれますよ。あと、出来れば食事中にトイレの話はやめて下さい」

「すみません」

時雨を窘めつつ隣を見やる、ソーメンの鉢とお椀が放置してあった。覗いてみると中身は空っぽだ。いつの間に……。交換の話は一体どこに行つたのだらう。もしかして、時雨の前で交換するとからかわれそうだからやめたのかもしれない。

メファアーナは残り半分のチャーシューメンを完食して席を立つ。

愛子の食器を片付けるのはもはや自分しかない。流石に一度に全部を運ぶ自信はないので、二回に分けることにした。まず愛子の持つて行つたあと、再びテーブルに戻ってきて自分の使つたトレイと食器を手取る。

「それじゃあキャプテンお先に」

「ちよつと待った」

振り返るメファアーナに向かって時雨が掲げたのは、もちろん見事に割れたチャップステイクスであった。

「メファアはこの芸術的な割筋をどう思う？ 近年稀にみる傑作だと自負しているんだが」

「今日は助けてくれて本当にありがとう」

「何だ藪から棒に。そのことはもういっていったろ」

生きて帰つてこられたからこそ、母に優しく出迎えてもらえた。でもこれはちよつと照れてしまうので、言わないことにする。

「いいえ。こうしていま生きて食後のメロンソーダを楽しめているのも、やっぱりフランツのおかげだから。ありがとう」

フランツは無愛想な表情で腕を組んだ。

こういうときは例によつて瞳の動きを観察すればいい 案の定、微かに揺れている。戦闘終了直後に見たのと同じ、照れとバツの悪さが入り混じった、声なき戸惑い。困らせてしまっただろうか。でも言わなければきつと後悔したと思うから。通信機越しではなく、顔を見合わせて、言葉を交わしたかったのだ。

手元のメロンソーダとフランツの瞳を見比べながらほつと息をつく。ちゃんとお礼が言えて良かった。

それから二人は特に会話をするでもなく、ただただ流れ行くだけの数分間をまったりと過ごす。フランツはコーヒーを、メファーナはメロンソーダを啜りながら。

会話がなければ息が詰まりそうになる、とはコミュニケーションの道理において何かとよく聞く台詞だが、それは相手と本当は仲の良くない証拠なのだ。真に心を許しあえる仲間となら、ちやうど今の自分のようにただ一緒にいるだけで、安らぎや居心地の良さを感じるものだと思う。

ふと、ここまで仲がいいのになぜ自分たちの関係は恋愛に発展しないのかをちよっぴり考えて、何だか頭痛がしてきそうになる。フランツと自分がそういう雰囲気になっている光景が、全くと言っていいほど想像出来ない。

彼はやっぱり自分にとって戦友 ああ駄目だ。

これは出撃前に既にやった、恋愛、否、友情という思考の流れとまるつきり同じではないか。これ以上続ければ、心が再び「あの子」に辿り着く。まるで行き場のない檻だ。気持ちが一気に沈んできつとまたフランツに迷惑を掛けてしまう。痛み始める胸を抑えつけて思考を強引に振り払い、メファーナは顔を上げる。

と、フランツの視線が自分を通り越して後方へ向けられていることに気づく。それ自体は別に不自然ではなかったが、気になることがある。その瞳が揺れていない。これは、彼が確固たる意志の下に行動を起こす時の眼差しだ。

フランツの視線を追ってみる。フロアの隅から、執拗にこちらを

窺う仕草が見て取れる女性のクルーがひとり。朝すれ違った人とはまた別人だ。

「私、席を外した方がいいですよね？」

「すまない」

「いえ」

フランチと短い会話を交わし、飲み干したメロンソーダの紙コップをゴミ箱に捨ててメファーナはフロアの出入り口へ向かう。

例の女性が、フランチの周囲にもう誰もいない状況を確認して彼の元へ走り寄った。彼女はフランチと対面するや矢継ぎ早に何かを訴え始める。その頬がどんどん紅潮していく。嫉妬と羞恥。

さっき一緒にいた子とは一体どういう関係なんですか、付き合っているんですか。私も、私だって、今日までずっとあなたのことを見てきました。好きです。どうか私と、私と。

ここからではもう声は聞こえないが、多分そういうことを言っているのだろうというのがメファーナには分かる。そして、フランチが彼女に求愛に応えないであろうことも。

もし恋愛の神様がこの世に存在するのなら、どうかあの女性と、フランチの前に、いつの日か素敵な人が現れますように……。そう祈りを捧げながら、メファーナはリフレッシュルームをあとにする。

整理整頓の基本は、まず今すぐ必要なものとそうでないものに分けることだろう。その点はメファーナの得意分野だ。何たって魔法のメモ帳があるのだから。

足の踏み場を埋めていた書類とディスクを少しずつ丁寧に纏めていく。棚やクローゼットなど、収納を最大限に活用して部屋本来の広さを取り戻す。掃除を始めてから三時間弱。机の上、ベッドの上、床の上、智世の私室が秩序を伴って美しく生まれ変わった。

「お疲れさま。これなら私の手伝いなんて逆に要らなかったわね」

「そんなことないです！」

母さんと一緒に掃除が出来て嬉しかったから、とは流石に言えな

い。

「綺麗になると気持ちがいいわ。でも良かったの？ シャワーを浴びたばかりだったのに。私はほとんど動いてないけど、あなたはまた汗をかいたんじゃないかしら」

頼まれた仕事はその日にやっておかないと気が済まない性格なのだ。「大丈夫です。気にしないで下さい」と返しながらパソコンのディスプレイを軽く拭こうとして、思わず手が止まる。

そこには、驚嘆するほど膨大な量の数語式が溢れていた。

記号と数字が織り成す静謐な混沌は、部屋の秩序と相対して異常なまでの存在感を放つ。今朝見たときよりも遥かに難解さを増している。不思議な魔力を宿した数語式に飲み込まれてしまいそんな錯覚を抱いて立ち眩みを起こしかけたそのとき、

「ファインマン。発展系の経路積分法よ」

「え、」

突然近くなったその声に思わず振り返る。いつの間にかすぐ背後に智世がいた。緊張が全身を走る。見つめ合う、母娘。先程までの柔和な空気を一切感じさせない母の真剣な表情に意識を集中する。

「それはね、魔法なの」

「魔法？」

一瞬、魔法のメモ帳の存在が脳裏を過ぎったが直ぐにかき消えた。あれとは決定的に質が違う。

「そう。この世界の真実を映し出す強力な呪文」

母は、何を言っているのだろう。

「平行宇宙という言葉を知っているかしら？」

少し考えてから、首を縦に振る。SFに登場するパラレルワールドの事ならメファアーナにも少しだけ知識がある。確か「時間軸が分歧し、それぞれ別の因果律をもった世界が無限に存在している」という理論だったと思う。

現実主義の物理学者である智世の口から魔法などという単語や、SFとはいえ作り話の中でしか語られないような台詞がこうして飛

び出してくるとは夢にも思わなかった。

「この経路積分はね、平行宇宙の存在を数学的に証明できるかもしれないツールなの」

意味が理解出来ない。物理学の素養がない自分に向かって突然何を伝えようというのか。だが次に発せられた言葉は、メファアーナの心を深く抉るものだった。

「メファ。あなたは、私がいずれこの艦を去ってしまうのではないかと危惧しているわね」

口から心臓が飛び出しそうになる。「あの子」を失ってから毎日毎日、苦悩し続けた恐怖を言い当てられてしまった。見透かされていた。胸の奥に仕舞い込んで隠し続けてるつもりだった心の影を。

「そ、それは」

「部屋の掃除をしてくれたお礼よ。あなたの一番知りたいことを教えてあげる」

私の一番知りたいこと。

「あの子」がいなくなってしまったから、お母さんは私を置いて、遠い何処かへ行ってしまふのではないか。精神を蝕み続けている大きな恐れ……。

「私は、この艦からは離れないし、何処にも行かないわ」

聴覚が捉えたその響きを、脳髓がゆっくりと解析する。

嬉しい。本当に嬉しい。それなのに、メファアーナは大きな幸福を感じることがまだ出来ないでいる。こんなにも望んでいた答えを母は与えてくれているのに、自分はこれ以上何を望むというのか。

分かりきっていた。

こう言っただけなのに、「あなたを置いて遠くへ行ったりしないわ」と。こう付け加えてほしいのだ、「あなたがいるから私はここに残るのよ」と。自分は何と強欲で醜く、傲慢で身の程知らずなのだろう。こんなものはきつと智世の求める娘の姿ではない。

智世の瞳はもはやメファアーナに向けられていなかった。自分の背中を通り越し、再びパソコンのディスプレイへと注がれた彼女の強



い視線を認めて、どうしようもなく悟ってしまう。肩に置かれていた母の手に力が入る。この画面に巢食う魔法の呪文こそ、「あの子」を失ってなお智世がこの クインハルト に留まる本当の理由なのだ。

あの母がここまで情熱を注いでいる。凄く価値のある研究に違いない。それはメファアーナにとっても誇れることだ。

でも。ほんの片隅でいいから、どんなに小さくてもいいから、智世を智世足らしめている気高い決意と心のどこかに、自分の存在を見つけたかった。

どんどん我儘になっていく己に気がついて、必死にその邪さを抑え込む。戦場から戻ったときに母が優しく迎えてくれたことを誇大解釈し、気を大きくしていたのかもしれない。智世の些細な気まぐれを娘への愛情だと勘違いして。

メファアーナは心の中で何度もかぶりを振った。いつから自分はそんな高望みが出来るほど偉くなったんだ。些細な気まぐれだって全然構わない。母が優しく迎えてくれた。それだけで、それだけで充分だったんだ。他にはもう何も望まない。

「母さん、話してくれてありがとうございます。その言葉を聞いてとても安心しました」

内心の葛藤を悟られない程度には巧く笑えたと思う。ただ含みのある表情であることは勘づかれたようで、智世に再び苦笑されるはめになった。

「まあとにかくそういうことだから、これからもよろしく頼むわね」「はい。こちらこそです」

メファアーナの肩から手を離してゆっくり後退すると、智世はそのまま部屋のベッドに腰を掛けた。

母を追ってベッドの脇にあるテーブルへと歩み寄り、その上に置かれた簡易給湯セットに手を伸ばす。急須の中にお茶の葉が入っていることを確認して、小型ポットからお湯を注ぐ。柔らかな葉の香りが仄かに立ち込める中、溢さないよう慎重な手つきで母の湯飲み

にお茶を淹れた。

「どうぞ」

「ありがとう」

差し出した湯飲みを受け取った智世が、「あら」と小さな驚きの声を上げる。しまった。埃でも浮いていたのか。「これよ」中身がよく見えるようこちらに傾けられる湯飲み。慌ててその中を覗き込む。

細いお茶の茎が、垂直に立って浮かんでいた。

「……すぐに、淹れ直しますから」

「ああ待つて」

湯飲みを取ろうとするメファーナを制して、智世は目を細めながらお茶の茎を眺めている。嬉しそうな表情に見えるのは気のせいだろうか。

「これは茶柱と言って、日本では吉兆の現れだと云われているの。私も科学者のひとりとしてその手の縁担ぎはあまり信じない方だけど。なるほど、実際にこの目で見てみるとなかなか悪い気はしないわね」

「縁起のいいことなんですね」

「ええそうよ」

メファーナはそつと胸を撫で下ろす。失敗じゃなくて良かった。それにほんの少しだけれど母を喜ばせることも出来た。茶柱にそつと感謝の気持ちを送る。

「メファアにも、いいことがあるといいわね」

顔を上げた母が、爽やかに微笑んでそう言ってくれた。

お母さん。私はもう満足です。あなたが喜んでくれるだけで、こんなに嬉しい気持ちになるのだから。

メファーナがもう一度シャワーを浴び終えてから自分の部屋へ戻る途中で、クインハルトは消灯時間を迎えた。天井のライトがその明度を緩やかに落としていき、代わりに足元に設置された小さ

な誘導灯が点灯を始める。静寂と暗闇が辺りを支配した。

智世ともっと一緒にいたくて、もっと話がしたくて、あのあと結局一時間近く彼女の部屋に居座ってしまった。迷惑ではなかっただろうか、邪魔にはなっていないか。ただだろうか。そう考えたら不安になってくる。自問自答を繰り返しながら廊下を進む。

### おかえりなさい(3)

カッン、カッン。

自分の立てる足音が、広い廊下に反響して次々と暗黒の中へ飲み込まれていく。

カッン、カッン。

あれ、そう言えばこの状況って。

メファーナはふと、食堂で時雨から語り聞かされた胡散臭い怪談話を思い出す。少し肌寒くなってる思わずテンションが下がった。話の中に登場する兵士と違って、自分は既に汗を洗い流したあとだが、ここまで場の雰囲気似てると流石に気味が悪い。もたもたしていると、重たいものを引き摺るような例のあの音が本当に聞こえてきそうだ。

若干歩調を速めて自室へ急ぐ。最後の角を曲がったところで、ドンッ。

突然進行方向に現れた何かと正面からぶつかった。

「きゃああああー！」

確かにかなり驚いたのは事実だが、これはメファーナの上げた悲鳴ではない。

「あんにゃあはあらあみいたあじー、なんまいだぶなんまいだぶ！」  
低い位置から震えた声が聞こえてくる。床にへたり込んだまま何やらおかしなお経を唱え始めたのは、どうやら爪が剥がれた血まみれの指と眼球の抉られた暗く虚ろな双眸をもった戦死者の怨霊などではなくて。

「お願いだから呪い殺さないでえええ」

「愛子、さん？」

尋常ならざる恐怖に打ち震え、手を合わせてただただ拝み続ける菊岡愛子がいた。

「ふえ？ メファ……？」

恐る恐るといったていでこちらを見上げてくる愛子の顔はそれはそれは悲愴で、溢れんばかりの涙を溜めた瞳は思わず同情を誘わずにはいられないほど痛々しいものだった。

……

「全部あいつのせいよ、あんの割り箸バカが食堂でヘンなこと言うからっ！」

「まあまあ。今は怒ることより、一刻も早くブリッジに辿り着く方が先決ですよ」

「そ、そうよね。ありがとメファ」

愛子は、ブリッジのオペレーター席にうつかり自分のプレスレートを忘れてきたのだそうだ。その事に気がついたのはちょうど就寝前。血相を変えて部屋を飛び出したものの、廊下は見ての通り得体の知れない別世界。

一步一步進むにつれ、メファーナと同じく雰囲気から時雨の怪談話を連想した愛子は、思わず全身を竦み上がらせる。刹那、すぐそこにある曲がり角の向こうから何者かの足音が近付いてくるではないか。恐怖のあまり逃げ出すどころか両脚が震えて動かなくなっただけという。

ここだけの話と執拗に念を押しながら、メファーナと正面から衝突したときに失禁してしまいそうになったことを愛子は顔を赤らめながら白状した。

恥をかいてまでわざわざ打ち明けてくれなくてもいいのに。そう思ったが、しかしそれは

「凄く恐ろしい瞬間を体験したけど遭遇したのは知り合いだった」という不幸中の幸いから彼女が見出したある光明を実行に移す為の、足掛かりとなる話術であつたことをすぐに思い知らされる。

「これ以上ひとりでいたら、わたし心臓マヒで死んじゃうよ。メファーナお願いっ。ブリッジまで一緒に来て！」

オペレーターという職業柄か、愛子は会話の組み立て方がとても上手い。この流れから懇願するように泣きつかれては、やっぱりメファーナには断れなかった。

果たして、メファーナの背中にぴったりとくっついて絶対にそれより前には出ないよう歩きながら時雨の陰口を叩きまくる愛子を何度も宥めつつ、ブリッジを指指して再び暗い廊下を歩いているこの奇妙な状況が出来上がったのである。

「何かまたム力ついてきた。割り箸燃やしてやろうかしら」

「まあまあ。ここは穩便に行きましょう」

それにしても。愛子はあんなに怖い思いをしたにも関わらず、もう夜も遅いので今日のところは諦めることにする、という選択肢はなかったのだろうか。

「そのブレスレットはよほど大切なものですね。もしかして、誰かからプレゼントされたものですか？」

「ちょっとしたロマンスを期待してそう問い掛けたメファーナに、うんそうなの。元カレにもらったやつ。まだお金に替える前だっというのに……夜のうちに盗み出されでもしたら大変だわ！」

実に逞しい台詞が返ってきた。

「この時間にブリッジへ入れる人は限られていますし、中には監視カメラがありますよ」

「もの凄いハッキング能力の持ち主かもしれないわ。それに犯人が覆面してたらどうするのっ」

「考えすぎですよ」

「ダメよそんな甘い考えじゃ。今の時代を生き抜くには、金目の物に少々がめついくらいが丁度いいんだって」

「はあ」

「それにね。次の係留地にある商業都市のマップをデータベースで検索して、もう目ばしい質屋をピックアップしてあるの。出来るだけ高値で売りたいから何軒か回る予定だけど、メファアも付き合う？」

何か美味しいもの奢ってあげるよ、う、うん」

実のところ、怖い思いを誤魔化す為に今まで声を出していたのか、愛子のお喋りが段々上擦ってくる。こちらは段々ワンパターンになつていく相槌を返しながら、彼女から預かったIDカードで幾つかの隔壁を開いて進み、ようやくブリッジの大きな扉の前に辿り着く。「それじゃあ開けますね」

「お、お願い」

愛子がメファアーナの背中から前に出ようとしないうちに、例のごとく自分が右手のカードをリーダーに通してIDをセキュリティに認証させた。ブリッジの扉が中央から割れて左右へスライドしていく光景が、矮小な人間二人を飲み込みまんとする魔王の口にも見えたのか、愛子は肩を強張らせながらメファアーナの背中に隠れる。

「何も居ませんよ」

「ホントに？」

時雨の陰口を叩いたり金目の話をしていたときは打って変わり、しおらしい口調で問い返してくる彼女の仕草に内心微笑する。

「はい。中に入りましょう」

あらゆるシステムが省電・待機モードに移行したブリッジの内部は想像通り冷暗としていたが、電子機器の僅かなLEDがあちらこちらで三々五々に輝きを放っている為、フロアの形状やシートの配置が把握できる程度には明るい。

「ライトをつけましょうか？」

「だ、大丈夫。メファアが傍にいてくれるから。それに照明つけると記録が残っちゃうでしょ。あとで割り箸バカにからかわれるのは癪だし」

強情だなあ。怖いなら無理しなくていいのに、と思いつながらも、自分が誰かの役に立っていることが凄く嬉しかった。表情を緩ませたまま愛子に腕を掴まれて、彼女のオペレーター席へと引っ張られていくメファアーナである。

電子キーボードを展開させる出力ユニット。その下部に存在する収納を、メファアーナの返したIDカードを使って愛子が開封する。

中に、暗がりで微かに煌めくシルバーの輪っかがぼつんと置かれていた。装飾の少ない細くシンプルな構造のプレスレット。

「あつたあつた」

あまりにも出来すぎたタイミングだった。

それは、愛子がプレスレットを手に取るうとしたまさにその瞬間に起こる。

アラートにも似た、けたたましい電子音。

「ひいやああつ！」

突如として鳴り始めたそれを真つ正面から浴びせ掛けられて死ぬほど驚いた愛子は、甲高い悲鳴を上げながら盛大に腰を抜かして尻餅をついた。

愛子からしてみれば全く冗談ではない。人間、自分の願いが成就する直前には必ず心のどこかに小さな隙が生まれる。増してや彼女の最も苦手としているこの雰囲気と、ホラー映画のようなそのタイミング。もはや誰が彼女の狼狽と醜態を責められようか。

「た、助けて神さまっ。アーメンソーメンチャーシューメン！」

「愛子さんどうか落ち着いて、それは私たちが食べた晩ごはんのメニューです！」

鳴り響く電子音は、間違いなく愛子が使用するオペレーター席の端末から発せられている。

「それにこの音、霊的なものだと思える必要はないと思います」

何度か深呼吸をして自分を落ち着かせたあと、のろのろと立ち上がった愛子は、恐る恐る端末を覗き込む。はりつめた緊張がこちらにも伝わってきて、メファアーナは口を閉じてそれを見守った。数秒の沈黙……。

「これは 救難、信号？」

電子音に愛子の大きな溜め息が重なる。彼女は先程の醜態を取り繕うようにコホンと一つ咳払いをし、シートに座ってディスプレイと電子キーボードを起動。その上に指を走らせ始めた。

「メファア、ライトつけて」



「あ、はい」

ブリッジを照らすライトの操作系は、出入口付近のタッチパネルが艦長シートのコンソールに設置されている。メファーナは取り敢えずここから近い艦長シートを選び、コンソールの傍らまで行つてスイッチを押した。ブリッジ全体にゆっくりと光が注ぎ込まれ、視界が急激に色を蘇らせていく。

「やっぱりそうみたい。でも一〇年位前から何もないこんな荒野のど真ん中で？」

長いあいだ暗闇にいたので少しばかり目が眩んだが、愛子の下へ戻るころにはもう慣れていた。

「まあ何処かの戦場から逃げ延びて来たと考えるのが妥当でしょうけど」

そう呟いた愛子と視線がぶつかり、さらに数秒の沈黙を経て思わず互いに吹き出す。最初からライトをつけていれば、愛子をここまです驚かせたりはしなかっただろう。彼女に頼られて気を良くし、そのところを失念していた自分の責任だ。メファーナは申し訳ない気持ちになった。

「こんなにビツクリさせてつ、全くだこの落武者よ！」

愛子は複雑な怒り笑いを浮かべながら、信号からさらなる情報を引き出すべく今一度電子キーボードを叩き始める。メファーナもまた、彼女の隣でそれを見守る姿勢をとった。

電子音の正体が判明したと言えど、まだ油断は出来ない。救難信号を送った兵士が致命傷を負っていたり、一刻を争うほど重大な敵軍の情報を抱えている可能性がある。

「NFAの所属は、え、え？」

人間が、心の底から信じられない光景と遭遇した場合、実は絶叫したり泣き喚いたりすることはまずあり得ない。何故なら真に想像を超える恐怖や驚愕に全てを支配された時、人間は体が止まってしまふからだ。ふと愛子の表情を見た瞬間、メファーナは然とそれを実感した。

魔法で時間を止められたかのようにディスプレイを見つめたまま動かなくなった愛子の、しかしその横顔が、みるみる冷たい蒼白に凍り付いていく。顔中の筋肉がほとんど使いものにならなくなったせいかろくに開かない唇の隙間から、辛うじて聞き取れる震えた声  
が、

「うそ。本物の、幽霊……」

「愛子さん」

「だって、この機体コードは」

メファアーナの視線がディスプレイの一点へ収束する。

愛子はまだ動けない。

その中で、

一ヶ月前に止まってしまっていたメファアーナの世界だけが、時間を掌握する魔法をうち払って静かに動き始めた。

「どうか私につ、私に行かせて下さいキャプテン！」

『落ちて着けメファ、冷静になれ。ひと月前をよく思い出すんだ。あの戦況で、彼女が生還出来たとは到底考えられない。本当は君にも分かってるんだろ？』

分かってる。

メファアーナにも分かっているのだ。一ヶ月前の戦闘をシミュレーションで幾度となく試行した。配置を変え、パターンを変え、藁にもするが思いで、何度も、何度も。だがコンピューターが弾き出す生還確率は限り無く零に近いものだった。認めたくなくて、心のどこかで否定し続けて、今日まで生きてきた。

もうたくさんだ。

「一パーセントでも可能性があるなら、諦めたくないんです！」

『敵の罠かもしれないんだぞ』

「それでも確かめる価値はあります。もう見殺しにするのは嫌なんです。お願いです、私に行かせて下さい！」

口を開けば考えることなく声が勝手に言葉を紡ぎ出す。今まで閉

じ込めていた感情が、胸の奥から一気に溢れ出してきそうだ。

『兎に角早まるな。現在も慎重に議論が進められているから、正式な回答が出るまでは耐えるんだ』

心を囲う檻が軋んで音を上げた。外界から射し込んできた強烈な光が、メファアーナの感情を熱くたぎらせている。

「時間は待つてくれないんです。一晚議論して何も答えが出なかったのに、これ以上待つなんて出来ません！」

『もし罨だったら、通信回線を開いた瞬間に強力なコンピュータウイルスを送り込んでくることが予想される』

「スタンドアローンの状態で接近します」

『次はNFA本体に大量の爆薬が仕掛けられているケースだ。類似する過去の記録や戦術・戦略データから推察すれば、想定し得る最大の破壊力は都市をまるごとひとつ消し飛ばせる規模だ』

「私が罨を仕掛ける側の人間なら、貴重な爆薬を、クインハルト一隻しか標的に出来ないような場所と状況で起爆するなんて効率の悪い真似はしません」

## おかえりなさい（４）

『確かにそれも一理あるが、しかしな、その予測を逆手にとった純粹なサボタージュだという可能性も、』

「だから私がひとりで行くんです！」

揺るぎない意志を乗せて発した言葉。一瞬だけ、通信相手の口をつぐむ気配があった。

『……先の戦闘から、どうも胸騒ぎがして仕方ないんだ。やっぱり許可できない』

「ソルダーニヤの使用を許可して頂けないなら、せめてジープを一台貸して下さい。それだけで充分ですから」

ジャラジャラと音を立て、黒い鎖がメファーナの胸を締め付ける。だが同時に、この痛みがあるからこそ、目前に曇りのない世界が広がっていた。自分のやりたいこと、やらなければいけないこと、今はその全てがはっきり見える。

可能性がほとんど無くたって構わない。それがゼロでないのなら幾らだって、何だって賭けられる。沈んでしまった未来のひとつを、失ってしまった大切なものを、取り戻せるかもしれない。

自分の命なんか、これっぽっちも惜しくはなかった。

クインハルト NFAハンガー！

搬入ゲート前の壁面に設置された通信端末。ブリッジと繋がったそれがホログラフイによる光学モニターを形成し、低い声を上げて熟考する時雨の姿を映し出している。彼と真っ直ぐに向き合ったメファーナは、端末のコンソールに置いた手のひらを強く握り込んで拳に変えた。

「どうかお願いします。私に発艦の許可を。今度は、今度こそは、何もしないままで諦めたくないんです」

消えかかった声に混じって滲む鳴咽。もう自分でも抑制が利かない。活動を再開したマグマのようにどうしようもなく突き上げてく

る強い思いに、己の身を小さく震わせた。

「メファ嬢……」

メファーナの心身を案ずるリプリーの声が右隣から掛けられる。周囲には、この場に集まった十数人の整備スタッフたちが、固唾を呑んでことの成り行きを静観していた。

『勘違いしないでくれ。ソルダーニヤの使用許可が出せないのは、NFA一機の損失を惜しんでいるからじゃない。メファーナ、俺達は君という一人の仲間を失いたくないんだよ』

クインハルト 最高責任者として、艦内の非常事態とクルーの逸りを鎮める為の方便。彼の発言をそう捉えることも出来るだろう。しかしメファーナは知っている。この変わり者のキャプテンが、そんな上手い気の使い方が出来るほど器用な人間でないことを。

リプリーも時雨も本当に優しい人だ。それでも、譲れない思いと動じない決意が今の自分にはある。メファーナが口を開きかけたそのとき、

『お取り込み中のようだけど、少しよろしいかしらキャプテン』

モニターにマルチタスクで展開したもうひとつのウィンドウ。自室で軽く腕を組んだ智世の姿が視界に飛び込んできた。

「母さん？」

『たった今、会議の結論が出たわ。調査隊の派遣を許可するとの仰せよ』

これこそ自分の望む展開だったが、余りに予想外な事態急変を受けてメファーナは一瞬呆気にとられてしまう。代わりに声をはり上げたのはモニター内の時雨である。

『嘘だろ！』

『事実ですわ。この決定については、エルムご夫妻の打診に拠るところが大きかったようね。飽くまで救助隊ではなく調査隊という辺りにいやらしさを感じるけれど』

『まったく何考えてんだ、あのヘンタイ夫婦……！』顔に手を当てそう吐き捨てる時雨と、「流石は父上に母上！」嬉しそうに飛び跳ね

るリブリーである。

智世はさらに語を継いだ。

『何しろお二人は“あの機体”の設計者ですから』

それじゃ答えになつてないだろ、と不貞腐れる時雨だが、間もなくハツと何事かを思い出したような表情になつて身を乗り出す。

『何で俺より早くあんたに情報が行くんのだ』

『あらお忘れ？ 私は今でもまだ本部の研究員よ』

『あーそうだったな。最近籠りつきりで何も言つてこなかったから、ついそれを忘れてしまつところだったよ』

時雨がちよつと拗ねた。艦長の自分を差し置いて機密情報を入力してしまう学者に嫉妬しているらしい。一方の智世は、画面内でむくれる時雨を意に介することのない実に涼しい顔である。

『もちろん行つてくれるわねメファ』

敬愛する母からお許しを頂けた。これほど心強いことがあるだろうか。鼓動が脈を打って高鳴る。

「はいっ。お任せを。ぜひ私に先頭を務めさせて下さい！」

『いい返事です。よろしい、あなたに与えられた任務をしっかりと完遂なさい』

ますますむくれていく時雨が、最後の抵抗とばかりに口を挟む。

『二人とも俺がキャプテンだって忘れてないよな。というか調査任務なら、機体の特性上 ウィングラッサの方が適任』

『キャプテン、野暮なこと言うな』

三つ目のウィンドウが開いてフランチが姿を現した。その背景には光点の灯る精緻な端末群と、背後にあるNFAハンガーの機械的で無機質な壁面を映したディスプレイが確認できる。通信が繋がっているのは ウィングラッサ のコックピットだ。

『もし罠なら、あれが罠に使われている可能性もある。俺は上空から周囲を警戒しつつ、メファのバックアップにあたる』

『だああっ、分かったよ、みんな好きにしろよもう！』

一喝して時雨が通信を切る。今度はちよつとではなく完全に拗ね

てしまった。きつと艦長席に体操座りをし、コンソールの外枠を人差し指でツツと女々しくなぞっているに違いない。そして向こうのオペレーター席で、いい気味だざまあみろと愛子がほくそ笑んでいるであろう事実はもっと間違いない。

時雨は、もうどうなっても知らないからな、とは決して続けた。クインハルトの作戦行動、その全責任を背負う立場の人間として当然だろう。しかしメファーナには、それがどうしても彼の優しさに思えてしまう。

キャプテン。フランチ。母さん。みなさん、本当にありがとう。

空と地平線を溶かして揺らぐ蜃気楼が、この世界の混沌を連想させた。幻影を強引に意識から切り離す。すると見えてきたものは、まさに無を象徴する荒野だった。

逸る気持ちの裏側で、空虚という言葉が思考に歪みを走らせる。

自分がこの先に願って止まぬもの、それがどれほど夢にも等しい光景なのか。心に影を落とす暗く淀んだ負の痛みを、ひと月に渡って味わってきた。その反動が拭いきれない不安となって重くのし掛かっているのかもしれない。

それでもメファーナは、グリップを握る手を、コンソールに触れる指を、フットペダルへ掛ける足を、緩めたりはしない。送り出してくれたクルーたちの厚意を無駄にしたくない。そして何より、自分自身が諦めたくないから。

NFAの反応を確認。

心臓が早鐘を打つ。

距離。一二〇〇、九〇〇、六〇〇。

光学映像、最大望遠で展開。

思わず息を呑む。

走査。倍角。拡大。視覚補正。

バイザーディスプレイに投影された機体。巨躯な胸部と肩部、大腿部。スマートな腕部と腹部。紫と群青を彩る全身にあらゆる銃火

器を兵装し、単騎で敵拠点を制圧するという熾烈な使命を与えられた機人。右腕部の一部が破損しているが、見紛うはずがない。メフアーナにとって、それは力の象徴だったもの。

捕捉した生体反応は、三つ。

「三人……？」

バイザーディスプレイが展開した光景。それを視界に入れた瞬間、心臓を射抜くような鋭い衝撃が走った。全身が総毛立ち、血潮が逆流してしまいそう。

『人質交渉、には見えないな』

目標のNFAとその周囲を警戒領域に捉えた状態で上空を巡回する ウィングラッサ。通信機を介し、ゆつくりと諭すような口調でフランチは言った。

『お前はこのひと月よく耐えた。何かあったら、俺が必ず何とかしてやる。だから、あとはもうお前の好きなようにすればいい』

メフアーナの衝動を、これから起こそうとしている行為を、フランチは全て悟っている。

『お前の信じるものを、俺も信じるさ』

心を囲んでいた檻が、風を受けた砂の城が如く崩れ去る。もはやメフアーナの思考に歪みはなかった。コックピットの開閉装置に手を伸ばす。

夢じゃない。

これは、夢じゃないんだ。

降り立った大地の、ザラツとした感触。構わずメフアーナは歩き出す。

下ろし立ての靴下も、

身体が、軽い。どんどん歩調が早まる。

愛用していたシャープペンも、

嫌疑や後悔や罪悪。心に課していたあらゆる枷を振り払って、前へ前へと向かう自分の気持ちに引つ張られて脚を動かしていく。

お気に入りのリップクリームも、



ギリギリと音を立て、この胸を締め付けていた黒い鎖を引き千切りながら、メファアーナは進む。

三九ドルと二五三六円の入った財布も、失ってしまったはずの大切なものへ、沈んでしまったはずの未来のひとつへ近づいていく。

みんな戻ってこなかった。  
立ち止まる。

なのに、それなのに。

足元から視界の果てまで続いていく枯渴の大地が世界の遠近感を曖昧にする。メファアーナの心とは打って変わって、ここは驚くほど静かだった。ウィングラッサの推進器が上空で風を切る音だけが耳に届いて。

目の前に「あの子」がいた。

「……ユイちゃん」

彼女は風に靡く黒檀の長髪を片手で軽く抑えながら、美しい青銀をした大きな瞳でメファアーナを見据えている。

「メファ。迎えに来てくれたんだね。ありがとう」

まるで鈴音のように凜と響く澄んだ声。もう何年も聴いていなかったと錯覚してしまえるくらいに懐かしい声。

「あの、後ろの二人は？」

「私の命の恩人。私がこうして生きてここに帰って来られたのは、この二人のおかげなの」

彼女の背後で、遠慮がちにこちらへ視線を向けていた二人。メファアーナより少し年上なくらいの男の人と、メファアーナより少し年下に見える女の子。二人はお互いに顔を見合わせてキョトンとする。その向こう。

片腕の一部を失ってなお、悠然と強固な存在感を放つ力の象徴。

NFA ジールヴェン

彼女の愛機。

「本当に、本物の、ユイちゃん……？」

彼女は微笑して、羽織っていたコートを僅かに開くと、メファアーナの視線を自分の穿いているジーンズへ導くよう顎を引いた。それから顔を傾けて、上目遣いにもう一度微笑む。

脚、あるでしょ？ という意味だろう。

ああそうだった。これがユイちゃんだ。いつも自信に満ちていて、頼り甲斐があつて、優しくて、凛々しくて、でもやっぱり可愛いところもあつて。

視界が滲む。胸を締め付けていた黒い鎖は、もはや存在しない。

決壊したダムのように感情が吹き出してきて、気がついたら彼女の胸に飛び込んでいた。

「うああ、ユイちゃん、生き、生きて、生きてよかった、ほんとう、よかった！」

抱き止められて、彼女の手が頭の上にそつとのせられる。

「ほら、泣かないで。メファアーナは私より歳上なんだから、しっかりしない」と

その手で優しく撫でてくれる。

「だって、だって、もう会えないんだって思って、私、」

嗚咽が止まらなくなってしまうて上手く喋れない。

「もう大丈夫だから、ね？ ここに来るまでキャプテンといろいろ揉めたでしょう？」

「うん、うん、いろいろ、」

「ごめんね」

「でも平気です。やっと、ユイちゃんに会えたんだから」

まるで迷子になった子供が、ようやく母親に辿りついたときのような、あるいは自分の存在を見つけ出してもらったときのような、そんな光景だった。但し本来ならば彼女が迷子の子供で、メファアーナこそが母親のはずだ。これでは立場がまるつきり逆である。

だがある意味ではこれは正しいのだろう。メファアーナは彼女を失くしてしまったと思うことで、望んでいた道標のひとつを見失っていたのだから。

やっと見つけた。

ようやく会えた。

これでまた、自分は戦うことが出来る。死なない為の戦いではなく、生きる為の戦いを、もう一度。彼女と共に。

「フランクにもお礼を言わないとね」

そう言っただけで彼女が見上げた空。涙で濡れそぼった瞳を擦って視線を追う。推進器の低い唸り声。太陽の逆光を浴びて明けない夜明けを飛翔する漆黒のNFAが、その速度を上げながら垂直に翻った。

「それから クインハルト みんなにも」

私たちの元に戻ってきてくれたんだ。天の暁に掛かる彼女の声は、そんな思いを強くメファーナに抱かせる。

戦場から戻ってきたとき、母が優しく迎えてくれたあの言葉を、今度は自分が言っただけでなくてはいならない。

「ユイちゃん」

「ん」

「おかえりなさい」

ただいま、と彼女はもう一度だけ微笑んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7105f/>

---

ジールヴェン【携帯投稿版】

2010年10月8日13時28分発行